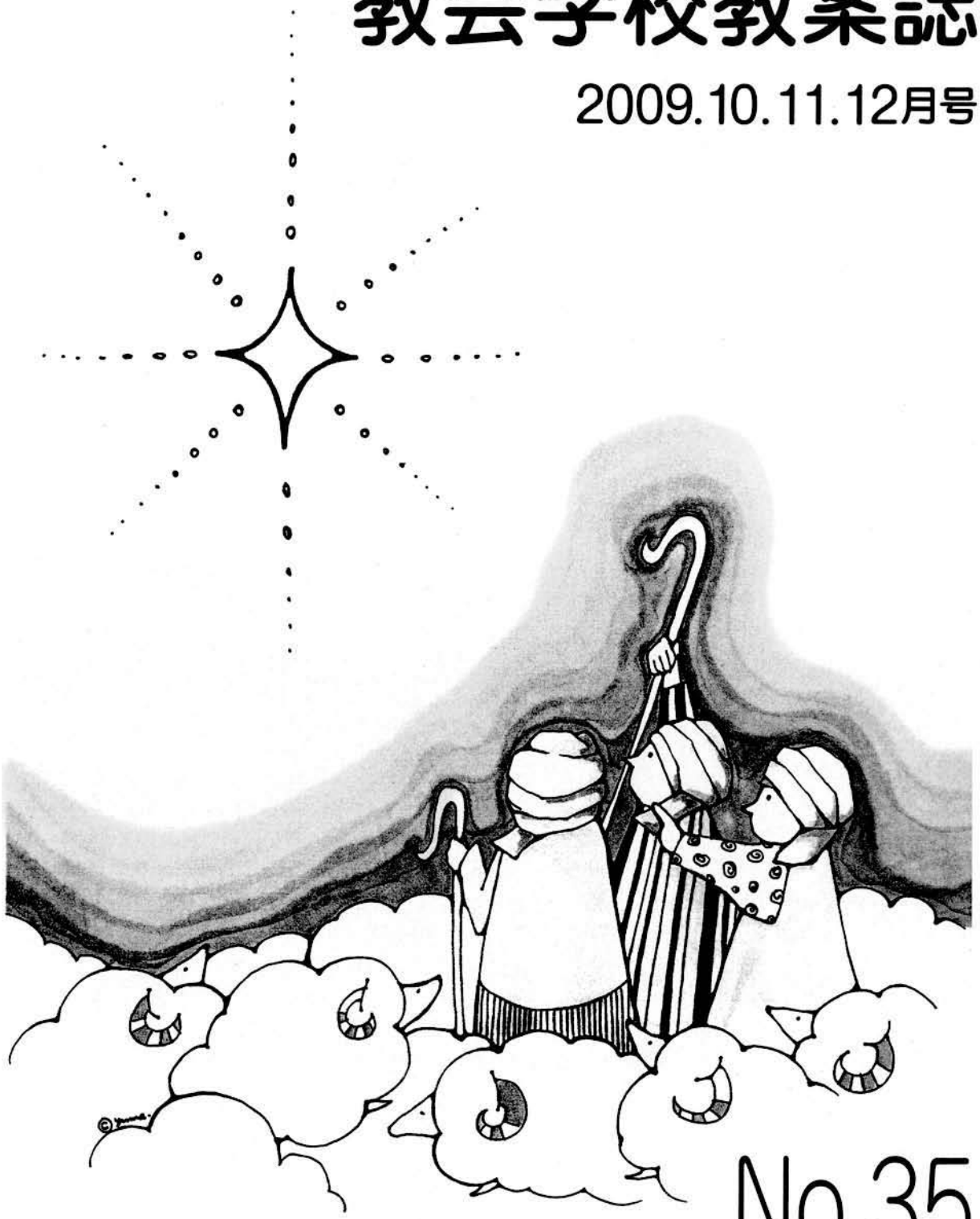
教会学校教案誌

2009.10.11.12月号



No.35

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2009年10〜12月カリキュラム（第35号）

―『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年―

月　日 教会暦・行事	主　　題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
10月4日	生ける神の御言葉	問69	ウ小89、ハイデ155
		ルカ24:13－35	ルカ24:27
	主イエス・キリストの語りかけに耳を傾けて、心燃やされる幸いに生きる		
11日	御言葉への聴従	問70	ウ小90、ハイデ156－160
		ヤコブ1:19－25	ヤコブ1:22
	神への愛と奉仕として、御言葉に聴き従い、御言葉を行う歩みに励む		
18日	礼　典	問71	ウ小91－93、ハイデ66－68
		ルカ24:13－35	ルカ24:30－31
	礼典によってわたしたちの信仰が強められる。聖霊の祝福をいただて生きる		
25日 宗教改革記念	宗教改革	－	ウ小33
		ローマ1:16－17	コリント一1:18
	宗教改革とわたしたちの教会の歴史を学び、その精神を受け継いで歩む		
11月1日	洗　礼	問72，73	ウ小94，95、ハイデ69－74
		使徒2:37－42	使徒2:38 一部
	子どもも洗礼を受けることへと招かれている。洗礼の恵みを知り、受洗を志す		
8日	聖　餐	問74，75	ウ小96，97、ハイデ75－82
		使徒2:37－42	使徒2:42
	教会は聖餐共同体である。聖餐の恵みと喜びを知り、あこがれを持とう		
15日	祈りとは何か（一）	問76	ハイデ117
		創世記12:1－9	創世記12:8 後半
	神の御言葉に聴き従い、主の御名を呼ぶことこそ祈りである。主の御名を呼ぼう		
22日	祈りとは何か（二）	問76	ハイデ128
		使徒12:1－17	使徒12:5 後半
	わたしたちの祈りは神に確かに聞かれている。神に信頼して祈る幸いを知る		
29日 アドベント	待降・ダビデとの契約	－	－
		サムエル下7:8－17	サムエル下7:13
	ダビデの子孫として、救い主メシアが与えられた。ダビデの子をほめたたえる		
12月6日 アドベント	待降・キリストの系図	－	－
		マタイ1:1－17	ルカ19:9
	神の民の歴史はキリストへと至る。キリストが与えられていることを喜ぶ		
13日 アドベント	待降・ヨセフへの告知	－	－
		マタイ1:18－25	ルカ1:32
	「神は我々と共におられる」。インマヌエルのおとずれを喜ぼう		
20日 降誕祭	降誕・東方の学者たち	－	－
		マタイ2:1－12	ヨハネ黙示録22:16
	キリストの前にひれ伏し、すべてをささげて、神をほめたたえよう		
27日 年末	一年の感謝	－	－
		詩編124	詩編124:8
	一年の歩みを振り返り、主に感謝をささげよう。主の導きと助けに感謝する		

日本キリスト改革派教会中部中会　2009年10・11・12月号
教会学校教案誌　第35号

もくじ

2009年10・11・12月カリキュラム
まえがき……望月　信……4
牧師の声……金田幸男……5
日曜学校・教会学校訪問
　高蔵寺教会教会学校の紹介……　高蔵寺教会教会学校牧師会……8
特別寄稿　諸教会の教会教育事情
　日本基督教団全国連合長老会の
　『カテキズム教案』について ……関川泰寛……13
副読本のご案内……18

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例……19
　10月 4日……21
　10月11日……28
　10月18日……36
　10月25日……44
　11月 1日……52
　11月 8日……60
　11月15日……68
　11月22日……76
　11月29日……84
　12月 6日……91
　12月13日……98
　12月20日……105
　12月27日……112
　幼稚科視覚教材 ……119

2010年1・2・3月カリキュラム……129
2010年度年間カリキュラム ……130
執筆者よりひとこと・あとがき……132

ま え が き

望月　信（高蔵寺教会牧師）

2009年7月22日（水）、日本の各地で日食が観測されました。日本の南部の島々で、日本の陸地で46年ぶりの皆既日食になるということで、マスメディアは日食の話題で持ちきりでした。わたしたちの教会の地域でも、部分日食を見ることができました。夏休みが始まっていて、子どもたちと一緒に朝の祈祷会を行ったあとで、一緒に空を見上げました。ピンホールレンズの原理で観測するための準備をしていたのですが、当日は曇り空で、役に立ちませんでした。けれども、ときおり雲間に部分日食の太陽が見えて、子どもたちは「あれが部分日食か」と、喜んで見ていました。

日食のような天文ショーがあると、心が宇宙のことへと向かいます。わたしの小さい頃には、アメリカの宇宙開発はすでにアポロ計画を終了し、スペースシャトルの時代に移り変わっていました。けれども、アポロ計画について本などで読み、見聞きするたびに、幼い心で宇宙のことを夢見たものです。

20世紀最大の出来事は何かと問われるなら、その一つとして、人類が宇宙に飛び立ったことを挙げることができるでしょう。と言いましても、科学技術の発展、人類の力を喜びたいのではありません。宇宙へと飛び出して、人類ははじめて自らの住む星を離れたところから見るまなざしを持ちました。それが人類にとって大切な意味を持つのだと思います。

地球を離れた宇宙飛行士たちは、自らの星を一つの対象として眺めるという体験をとおして、地球という星のかけがえのなさに目覚めました。今では、宇宙に打ち上げられた人工衛星の画像によって、わたしたちも、離れたところから地球を見つめることができます。地球は青く美しい命にあふれる星であり、暗黒の宇宙のただ中に存在するのはまさに奇跡的です。地球にはそもそも国境はないのであり、人類が争うことはむなしいとも思わされます。わたしたちは、宇宙からのまなざしで地球を見つめてはじめて、地球という星の大切さを知りました。20世紀は宇宙開発の時代でしたが、地球という星の大切さに気づくために、人類ははるばる宇宙へと旅立たなければならなかったのかもしれません。遠く離れてはじめて客観的に眺めることができる、そして、その大切さや意味に気づかされるということがあるのです。

信仰を持つことは、これと似ています。信仰において、自分を中心にしたものの味方、価値観からの転換を迫られることが起こるからです。わたしたちは、自分の価値観や一般的な常識の世界から飛び立ち、自分の思いから離れて、創造主なる神がわたしたちをどのように見ておられるのか、神がわたしたちに何を願っておられるのか、神のまなざしを知る者とされます。いったん自分を離れて、神がわたしたちをどのように見ておられるのか、そのことを知ってこそ、本当の意味で自分を知ることができます。

仕事や家族、自らの国や文化なども、離れて眺めるまなざしを持っていたいものです。大切であるがゆえに、愛するがゆえにこそ、離れる勇気を持つべきです。子どもは親を離れ、親も子どもを離れ、仕事を離れ、国を離れ、そうして、自分の立つべきところ、なすべきことを知るということがあるでしょう。愛するとは盲目的に埋没してしまうことではありません。主なる神を畏れ敬い、まことの神の愛を知ってこそ、自分をも本当に愛することができるでしょう。

（教案誌編集部員）

牧師の声

あの、輝く目を持った子どもたちの教会学校

金田幸男（甲子園教会教師）

伝道不振の時代です。打破するために、どうすればいいのか、信徒も牧師も、自問自答しない日はありません。教会学校も同様です。生徒がいない。どうすれば集めることができるだろうか。

若い人を教会に招くために四苦八苦しています。それが現状だということを十分認識しています。だから、たとえば、教会音楽、礼拝音楽（賛美歌）を工夫する試みも貴重でしょう。現行の「讃美歌」はいよいよ著作権もなくなるほど教会で長く使用されてきましたから、その古めかしいあり方は目だってきました。歌詞が文語調で、若い人には分からなくなってきている。曲も多くは18、19世紀のアメリカ・プロテスタント教会で歌われたもので、現代感覚から離れている。そういう批判や論評は当然のことで、何とかしなければならないという主張が多くなされています。わたしはそういう考え方を否定しません。賛美歌は時代と共に変化し、新たな賛美歌集を教会はいつも作成する努力をやめてはならない、と思います。特に、賛美歌はその教会の信仰を歌い、告白する特質を持つものですから、変化する教派の教会が特別な賛美歌集をもって歌うことは意味あることと思っています。

わたしは今から約50年前、信徒が家庭で開いていた教会学校（日曜学校）に行き始めました。あのころを思い出します。教会学校の生徒であった友人たちの中で、その後、洗礼を受け、今も教会員としてとどまり、奉仕をしている人も何人かあります。しかし、多くはいつの間にか教会からいなくなりました。いつの時代でも教会学校の生徒を確保することはやさしくありません。しかし、わたしには気になることがあります。人数を集めることに躍起となっているけれども、かつて教会学校に来ていた、ある種の生徒がいなくなってきたのではないか。そういう生徒は、まじめにものを考える生徒でした。人生の不条理を直感し、社会の矛盾を多少なりとも感じて問題意識を持ち、いろいろな本を読み、静かに自分で考えるような生徒たちが今、教会学校から、そして、青年会や学生会からいなくなってしまったのではないか。いないと断定するのは早計かもしれません。ただ、そういう人の影が極めて薄くなっているといえないでしょうか。

青年会や学生会の修養会の主題に興味を持っています。そのときどきの若い人たちの関心を知ることができて面白くもあります。昔ながらの、いつも変わらぬ主題を掲げていると苦笑することもあります。だから、一概に変わったとは言えませんが、それでも、まじめに人生を深く考え込み、生きること、死ぬことを自分の課題として引き受け、壁にぶつかり、そこで聖書を開いて何とか答えを見つけようとしてはすぐに答えを見出せず、思索の森を彷徨するといった、若い人特有のまじめさが希薄になってはいないか。

それが教会学校についても言えるのではないかと思います。そして、その原因は、教会学校の教勢の減少をばかり心を奪われて、教会がまともに真剣に、そのような生徒たちの疑問に答えられなくなってきている。それは牧師たちだけの問題ではないと思います。多くは教会学校の教師も校長も信徒が担っています。信徒たちが、まじめに真理を追究する生徒たちの思いに

応えられなくなってきているのではないか。

たとえば、若い人は死について考えます。そんなことを考えることもない人も多くなってきているでしょうが、なかには、死について正面から受け止め、その不条理さに思い悩む人がいます。そういう人が教会に来たとき、誰が死の問題について語ることができるのでしょうか。せいぜい自殺はいけないというだけでしょうか。死にたくなるほど悩む若者は少しも減っていないはずです。教会学校の問題点は人数が少なくなったとか、生徒が集まらなくなったとか、教師のなり手がいないとか、の問題以上に、かつて教会の門前の佇み、このようにして教会学校に何かを求めて足を向けた子どもたちがもう教会に来なくなったことのほうが深刻だと思います。そういう子どもはどこに行ったのか。おそらく教会の前を通り過ぎ、自分の部屋で、本を開き、日記を書き、手紙を書き、パソコンに向かい、ケータイで友人を見つけようとしているに違いありません。まじめで、ほとんど口を開かないおとなしい子どもたちが教会学校にいま果たして出席しているでしょうか。信徒の子どもたちでももう教会学校に魅力を感じなくなっているということはないのでしょうか。わたしは、そういう子どもたちに帰ってきてほしいと願っています。人数が少なくてもいいのです。真剣に教会学校の教師の目を見つめ、何かを吸い取るように聞こうとしている子どもたちが一人、二人と来てほしいと思います。

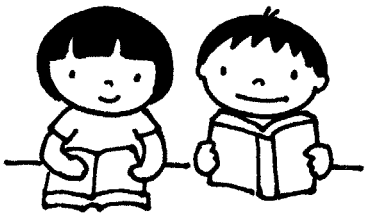
軽薄なことを嫌い、真実に本質を見極めようと願う若い人が皆無になったわけではありません。今でもそんな若者はたくさんいます。中学生どころか小学生にもいます。多くをしゃべらないかもしれません。ただはっきりしていることは、そういう若い人は、文語だから賛美歌は古いなどといって歌わないとか、歌えないとかはいいません。賛美歌が歌っている信仰の深みを感じることができる人たちです。現代語に変えようが、変えまいが、その人たちは神を信じることが人生にとっていかなる価値があり、意味があることをすぐに感じる感性を持っています。古い歌でも、想像力をたくましくすれば、その時代のキリスト者の信仰のあり方に共感できます。真理は時代を超えることを彼らはよく知っています。

教会学校の教育の内容も同じことでしょう。聖書を読みながら、ありきたりの解釈、どこでも転がっているような教訓、ばかばかしくなってくるような日常生活への適用、こういうことを教えている限り、あのまじめで誠実に発想する少年は教会に足を向けることはないでしょう。わたしにとって深刻な問題はここにあります。

この問題に対する対処策はあるか。だれでも、「福音を語っておれば」、と通り一遍の答えを持っていることでしょう。その福音が問題です。福音はいったい何であったのでしょうか。福音という言葉を知っているだけでは福音を語ったことにはなりません。牧師はかならず、説教は福音の説教でなければならない、という主張は知っていますし、そのつもりで努力をするものです。では、福音とは何か。その福音を信じるとはどういうことなのか、そこまで突き詰めていけば、福音の説教とは中身のない空虚な代物であってはならないはずです。恵みを語ればいい、という正答を語ることも簡単です。わたしたちの教会の信条は恵みのみを強調しています。だから、教理問答を教えましょう、ではまったく答えにはなっていません。その恵みとは何か。その恵みに生き、生かされるとはどういうことか、それが問題です。教会学校も同様でしょう。福音を語らなければならない、恵みを語らなければならない、信仰を語らなければならない。これは主題としてはその通りです。その通りでありながら、あの、教会学校にまで来て、生と死について答えを求めてくる少年に、少女に、果たして答えを準備しているかどうか。そして、まともに向き合って答えられるかどうか。

難問です。そう簡単に答えなどないし、今から急に解答を見つけられる性質の問題ではありません。わたしは、聖書を読み、そこから話をし、分かりやすく語ろうとしている努力を貴いものとしますが、もうそこでとどまっているのはやめてほしいと願います。問題の答えはその向こうまで行かなければ何の手がかりもありません。

若い人に、分かりやすい歌を歌わせ、現代風のリズムで酔わせることが、根本的な解決策ではない。このことを少しでも自覚していただきたい。誰に。教会学校の生徒に関わる人たちに、です。



日曜学校・教会学校訪問

高蔵寺教会教会学校の紹介

高蔵寺教会教会学校教師会

1. はじめに

高蔵寺教会は、愛知県の北西部に位置する春日井市の東北部、JR中央線高蔵寺駅南口近く、高蔵寺駅前の商業地区にあります。

高蔵寺駅の北側に、東西約4km・南北約4kmにわたって高蔵寺ニュータウンがあります。1960年代に開発され、入居が開始された、日本で二番目に古い大規模ニュータウンです。そのニュータウン開発にともない、JR中央線勝川駅近くにある春日井教会で高蔵寺伝道の幻が温められてきました。その春日井教会によって、1989年に伝道が開始され、1992年に現在地での礼拝が始まり、2002年に教会設立が許されました。

数年前より、会堂建築の幻が与えられ、昨年（2008年）から今年（2009年）にかけて建築を実施し、今年の5月より、新しい礼拝堂で礼拝をささげています。9月に献堂式を行い、10月には伝道開始20周年を迎えます。

2. 子ども礼拝と分級

教会学校の営みは、現在地で礼拝をささげるようになって始まり、途絶えることなく続けられてきました。初期の頃は、おもに役員たちによって営まれました。2000年頃から、信徒の教師も加わった教師会を組織するようになり、教会全体で子どもたちの信仰の成長に取り組んでいます。

いつも出席する子どもたちは、幼児4名、小学生4名、高校生1名の計9名です。

日曜日の朝9時から子ども礼拝が始まります。礼拝は、さんび／祈り／主の祈りか十戒／子どもカテキズム／聖書朗読／説教／祈り／さんび／献金／感謝祈祷／黙祷、という式次第です。司式と説教の全体を1名で行い、通常、牧師と長老1名が交代で担当しています。聖書朗読と献金奉仕、感謝祈祷は、子どもたちの奉仕の場です。

礼拝風景

7月19日、集合写真

高蔵寺教会では、この教会学校の礼拝を教会の公的な礼拝に準じるものとして位置づけて、子ども以外の方々にも出席を呼びかけています。そのため、教会学校教師だけではなく、比較的多くのおとなの方々が出席しているのではないかと思います。朝・夕の礼拝に出席できない事情がある場合に子ども礼拝に出席する方もおられます。このことは、教会全体で子どもたちへの信仰の継承に努める姿勢を養うことに益していると考えています。

子ども礼拝は9時25分までを目処として終わり、引き続いて9時55分頃まで、分級が行われます。現在の分級のクラス編成は、年齢の低いほうから、ユリ科（～年少）、ブドウ科（年中・年長）、アーモンド科（小学校低学年）、オリーブ科（小学校高学年）、ナルド科（中学校・高校）となっています。年齢と男女構成によって柔軟に対応する方針であり、年齢構成によって一律に区切らないため、聖書の植物の名称を用いてクラス名にしています。この分級について、クラス編成をして年齢に応じた信仰教育をするという点で「学校」と呼ばれますが、互いに祈り合い、信仰生活のために励まし合う、「牧会」のイメージを大切にしています。礼拝の説教の復習だけではなく、主にある交わりと分かち合いを大切にして、互いに祈り合う関係をはぐくむことをねらいにしています。

この分級に並行するかたちで、9時30分から15分程度、成人科を行っています。長老2名による輪番で担当し、子ども礼拝に出席したおとなの方々を中心に、朝の礼拝に早めに来てくださった方々が加わって、テキストの朗読と分かち合いによる学びをしています。内容は、おもに教理の学びですが、しばらく以前には、聖書各巻の概論的な学びをしたこともあります。現在は、木下裕也牧師執筆の『主は羊飼い』や、日本基督教団出版局の『信仰30問30答』などをテキストにしています。信仰の揺るがない土台を据えて、骨太なキリスト者として成長させられるための継続教育の場であり、多くの出席者が与えられることを祈り願っています。

3. おもな行事

教会学校のおもな行事は次のとおりです。

①進級式

4月には進級式を行い、昨年度の表彰と新しい一年に向けた祈りの時を持ちます。

②夕涼み会（夏のお楽しみ会）

その年の事情によって、行ったり行わなかったりですが、7月末か8月初め頃に、子どもたちの主にある交わりを願って、夕涼み会を行います。内容も、一緒に料理をしたり、レクリエーションをしたり、その年によってさまざまです。

7月18日、上級生を中心とした交わり会

③子どもクリスマス会

毎年12月の第二日曜日の午後に子どもクリスマス会を行っています。地域の子どもたちを教会に招き、福音を宣べ伝えることがおもな目的です。近くの二つの小学校の一斉下校時に、校門前で案内を配布しますが、事前に小学校に連絡して行うようにしています。毎年、恒例のこととして受け止めていただけるようになってきました。

おもな内容は、前半が礼拝であり、後半がお楽しみ会と称して、簡単なゲームとレクリエーション、そして、何かクリスマスにちなんだ工作を一つ行います。このクリスマス工作が目的で来る子どもたちもいるようです。そして、お菓子の時間があり、教会学校紹介をして、終了です。終了時には、長老がサンタクロースに扮して、子どもたちにプレゼントを贈ります。サンタクロースと一緒に写真に収まって帰る子どもたちもいます。

参加者は、毎年、30名くらいです。この子どもクリスマス会には多くの地域の子どもたちが集まります。昨年は、教会の子どもたちと地域の子どもたちで40名になりました。保護者の方も参加してくださいと呼びかけていて、4名の方が来られました。そのように大人数であ

るため、教会全体に奉仕者を募っていて、昨年は20名の奉仕者で行いました。子どもクリスマス会は、教会全体で行う行事になっています。

こうして、多くの子どもたちが与えられ、毎年、教会学校の紹介をしますが、その後、教会学校に引き続いて出席する子どもは起こされておらず、ここに大きな課題があります。けれども、年に一回とはいえ、少なくない人数の子どもたちが継続して参加しています。昨年は、小学校の分割によって遠くの小学校に通うようになり、子どもクリスマス会の案内を受け取る機会のなかった子どもたちが、「毎年12月の第二日曜日」と覚えていて、電車に乗って駆けつけてくれた、嬉しい出来事もありました。毎年、同じ日に行うことの大切さを示されると同時に、この年に一回の機会を大切にしなければならないということを思わされます。年に一回といえども、毎年続けてきてくれる子どもたちは、「クリスマスにお生まれになったイエスさまは、まことの神さま」ということを知る子どもとされていきます。ですから、たとえ続けて来てくれないとしても、子どもクリスマス会は真剣勝負の日です（もちろん、毎主日もそうです)。この与えられた機会に、しっかりと主イエス・キリストの福音を伝えることができたら、それが積み重なって、やがて自覚的に教会に来て、信仰者として生きることが始まる。その日を祈り求めて、これからもていねいに子どもクリスマス会の営みを続けていきたいと願っています。

そのほか、教会全体の営みとして、花の日、一泊修養会、敬老の日などがあります。その際には、執事会や修養会委員会などと協力して、カードを作成したり、子どもプログラムを行ったりしています。クリスマス記念礼拝後に行われるクリスマス祝会では、各クラスの発表の時を持っています。また、行事ではありませんが、毎月第四主日の朝の礼拝では、説教の冒頭で子ども向けのメッセージを行うようにしています。その日の聖書箇所から、子どもたちに対して短い説教をします。朝の礼拝においても子どもの居場所がある、主なる神が子どもたちを礼拝に招いておられる、そのことの意識付けの機会として、大切にしたいと願っています。

4. 教師の構成と教会学校教師会

現在、子ども礼拝と分級を担当する教師が8名であり、内訳は牧師1名、長老1名、執事2名、信徒4名です。また、成人科を2名の長老で担当していて、計10名で教師会を構成しています。教会学校校長は、牧師が務めています。

高蔵寺教会の教師会で大切にしていることは、子どもたちの状況について分かち合い、祈ることです。そのため、いわゆる教師会は開催を限っており、2008年の場合、4回の開催でした。おもな内容は、教会学校全体の課題について話し合うこと、行事の計画について話し合うこと、そして、教会学校に関する学びの時を持つようにしています。学びは、教会学校教案誌に掲載された講演録などを用いています。

教師会の回数が限られる代わりに、子ども礼拝と分級を担当する教師は、教師会が行われる前後を除いて、毎月第一主日に祈祷会を行っています。2008年の場合、これが6回の開催でした。おもな内容は、子どもたちの状況について分かち合い、祈ることです。また、子ども礼拝と分級についても分かち合い、事務的な連絡も行っています。教師会とは区別するかたちで祈祷会を行うことにより、短時間で必要なことを取り扱い、また子どもたちの牧会ということを意識して取り組むことが比較的できているのではないかと感じています。ここ数年、試みてきた方法ですが、定着してきたように思います。

ただ、この方法では、教師会の回数が限られることもあって、カリキュラムの単元ごとの内容について学ぶことができません。それぞれの教師が教会学校教案誌から学ぶことにゆだねて

いて、教師会で配慮することはできていないのが現状です。礼拝の司式・説教を教師みなが輪番で行うのではなく、牧師と長老1名がおもに担当していますので、かろうじて許されている方法であるかもしれません。

5. 分級の教師から

分級の教師から、各クラスの様子を簡単に紹介いたします。

①ユリ科

保育園・幼稚園の年少さんの女の子二人のクラスです。保育園や幼稚園に行くようになって、おイスに座ってお話を聞くことができるようになりました。自己主張が強くなってきて、シール、色鉛筆、座るイスにいたるまで取り合いになり、トラブルに発展することも……。そんなときには、「分級はお友だちと先生がいて、その真ん中にイエスさまがいてくださる交わりです」と伝えます。「じゅんばんこ」というルールがあることなども、分級をとおして学んでいます。短い時間ですが、泣いたり、起こったり、笑ったりしながら、楽しく過ごしています。

ユリ科

②ブドウ科

保育園・幼稚園の年長さんのクラスです。分級では、暗唱聖句、お祈り、手話賛美をし、紙芝居を読んだり工作をしています。手話賛美はレパートリーが4曲になり、昨年のクリスマス祝会では「ささげましょう」と「主われをあいす」を歌いました。今、夏休み中は、十戒の暗唱を頑張っています。

ブドウ科

③アーモンド科

小学校低学年の男の子を中心としたクラスです。礼拝で聞いたイエスさまや神さまのお話の復習を中心に、工作やゲームをして楽しんでいます。にぎやかすぎて、先生はちょっと困っています。少しずつお祈りできるといいなと思っています。

④オリーブ科

小学校高学年の女の子を中心としたクラスです。まず、学校の様子やふだんの生活のことを互いににぎやかに報告して、守られた一週間の感謝をします。また、礼拝の聖書の箇所を輪読して振り返ります。今年から、聖書の通読にチャレンジし始めました。分級の中で読み始めて、続く御言葉を家庭に帰って読むようにしています。マタイ福音書の通読が終わり、マルコ福音書に進んでいます。分級は限られた時間ですが、気兼ねなく子どもたちが話してくれるよう、くつろいだ分級を展開していきたいです。

⑤ナルド科

中学生・高校生を対象としたクラスです。現在は、高校生1名と一対一のクラスになっています。礼拝の御言葉を振り返ることを中心に、分かち合いと祈りの時を大切にしています。聖書を読むことの喜びを知り、身に着けることをねらいとして、取り組んでいます。

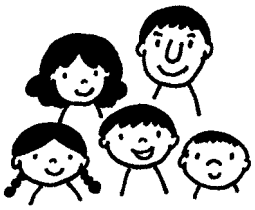
オリーブ科・ナルド科のクリスマス発表

6. 課題

教会学校の課題はいろいろありますが、一番は、与えられた子どもたちが自らの口で信仰を告白し、自らの足でキリスト者として歩み始めることです。分級のオリーブ科では、信仰告白を目指して取り組んでくださっていますが、その取り組みを継続していくことが課題です。また、子どもたちに中会などによって開催される修養会やキャンプに積極的に参加してほしいと願っています。高蔵寺教会だけでは人数も少なく、同世代の信仰の友との交わりも限られますので、信仰の交わりを広げていくことが課題です。互いに祈り合い、励まし合う信仰の仲間と出会ってほしいと願いますし、信仰の友との交わり、中会などのキャンプなどでの学びが信仰を告白する道のりの益となることを確信しています。

もう一つ、大きな課題は、この大切な営みのための奉仕者が起こされること、教会学校教師が与えられることです。教会役員、子どもの親たちだけでなく、広く奉仕者が起こされて、教会全体で取り組むことが大切です。

教会学校の営みに加わっていると、子どもたちを教えるというのではなく、子どもたちをとおして主なる神の恵みと配慮に気づかせられて、多くのことを教えられます。子どもたちと共に成長させられる教会学校、教会でありたいと願っています。



特別寄稿・諸教派の教会教育事情

日本基督教団全国連合長老会の『カテキズム教案』について

関川泰寛（日本基督教団全国連合長老会出版委員会）

1. 全国連合長老会とは

全国連合長老会は、日本基督教団にあって、改革・長老教会の伝統を重んじながら、健やかな教会形成を目指す各地域連合長老会の共同体です。全国連合長老会の規約第二条は、全国連合長老会が、「聖書を基準とし、使徒信条、ニカイア・コンスタンティノポリス信条、アタナシオス信条、カルケドン信条に準拠し、改革教会の諸信仰告白に言い表された信仰を継承し、1890年に制定された日本基督教団信仰の告白に基づいて、1954年に制定された日本基督教団信仰告白を告白する」とうたって、加盟する諸教会と地域連合長老会の一致の根拠がどこにあるかを明確に規定しています。

ご存じのように、日本基督教団（以下教団と略します）は、第二次大戦中の1941年に三十余のプロテスタント諸教派の合同によって設立された合同教会です。全国1700余りの諸教会の教派的伝統は多様で、歴史的に見れば、メソジスト教会、組合教会、バプテスト教会、長老教会、ディサイプル教会など、職制も信仰告白についての理解も異なった諸教会が合同して成立しました。

戦後、外国のミッションとのつながりの深い諸教会は、一早く教団を離脱しました。さらに旧日本基督教会の一部の教会は、会派の公認が退けられると、教団から離脱して、日本キリスト教会を結成しました。

連合長老会は、戦後も教団にとどまり続け、旧教派の信仰告白である1890年の信仰告白の内容とその規範性を重んじつつ、教団の教会として自己形成する諸教会の群れと言えます。

全国連合長老会は、九つの地域連合長老会からなり、そこに所属する教会は、全部で90教会となっています。さらに同じ志を持つ教団の諸教会が、改革長老教会協議会を結成し、同心円の外周部分に結集しています。

全国連合長老会は、年に一度全国会議を開催するとともに、全国教師会、宣教協議会などを通して、牧師の研修や自己研鑽の場を設けています。さらに「宣教」という月間の小冊子を機関紙として発行し、その主張や働きを諸教会に発信する広報活動、教会の形成と伝道に益する書物の出版などを行ってきました。さらに改革長老教会協議会は、定期的に全国協議会や牧師会を開催し、教会形成の志を同じくする諸教会が一致して伝道と教会の形成にあたっています。そのために、『季刊教会』を発行し、牧師、長老、教会員に改革・長老教会の神学的啓蒙にもつとめています。

日本基督教団は、1960年代より半世紀近く紛争に明け暮れてきた歴史があります。その中で、全国連合長老会は、たとえ内外の状況がどのようであっても、変わることのない聖書のみ言葉と信仰告白に固く立って、教会の形成に一致協力しようという志を共有する諸教会の群れを形成しつつあります。その際、わたしたちは、改革・長老教会の伝統をしっかりと継承しつつ、いわゆる教派主義に陥ることなく、宗教改革以来の福音的な公同教会の信仰にたって、教団の中での伝道協力を推し進めています。

2. 全国連合長老会とカテキズム教案

日本基督教団の諸教会は、各教区の現状に

よって、置かれたた状況も様々であるゆえに、直面する教会形成の困難さの度合いもまたさまざまです。わたしたちは、この困難さにもかかわらず、信仰と職制の確立と一致を求めて、いわゆるプレスビテリー形成に努めていますが、その信仰的、法的な基盤を確立していくことは容易な作業ではありません。

現時点で、完全な職制の確立が不可能であるとしても、信仰による諸教会の一致を教団内の諸教会とともに確立し、次世代への信仰の継承をはかることはできますし、その努力を怠ってはならないと思います。

全国連合長老会は、先に挙げた1890年の信仰の告白と教団信仰告白という二つの信仰告白の関係の理解、教憲教規における各個教会の総会と長老会の関係づけ、地域連合長老会の会議の整頓、聖書と信仰告白に生きる諸教会の形成、戒規の執行の問題などの神学的課題に直面していますが、同時に子供たちへの信仰の伝達を緊急の課題として共有し、諸教会が一致協力して、次世代への信仰の継承をおしすすめていく必要を自覚することが求められています。

とりわけ、子供たちや青年たちの減少という深刻な事態を諸教会は抱えるとともに、現代社会の深い病が、社会の様々な局面に現われ出ている現象を見聞きしている事態の中で、一刻も早く、子供たちのための信仰の養育のプログラムを造り上げる必要がありました。

その意味でも、全国連合長老会日曜学校委員会が、三年の歳月をかけて、委員の祈りと働きによってカテキズム作成を実現し、そのカテキズムに基づく、日曜学校教案発行を決断したことは、画期的なことと言うことができるでしょう。わたしは、まずカテキズムの注解作成にあたって、あらためてカテキズムの本質に触れる経験をしたこと、また注解執筆を通してカテキズムのすばらしさと特質を再認識した点などを以下で紹介してみましょう。

3. 日曜学校委員会編「カテキズム教案」の特色

全国連合長老会の日曜学校委員会は、まず委員たちの地道な作業によって、「明解カテキズム」を作成しました。わたしたちの「明解カテキズム」は、宗教改革時代のカテキズムと同じく、問いと答えを積み重ねて、信仰内容を会得するという形式をとっています。『ハイデルベルク信仰問答』や『ジュネーヴ信仰問答』とその意味では同じです。さらにまた、カテキズムの各問いと答えには、関連する2ないし3つの小問が付されています。そしてそれらの問いに関連する多様な聖句が掲げられています。単に聖書箇所の指摘ではなくて、実際の聖書の一節が自分の目で読めるように工夫されています。

このような形式を取ることによって、カテキズム学習者は、聖句を繰り返し読みながら、カテキズムの言葉を味わい、理解することができるようになります。ちょうど聖書という深く豊かな森の中に、一本の小径がつけられて、その周辺が照らし出され、旅人は安心して森の中に分け入ることができるかのようです。

この「明解カテキズム」に註解を付して、出版したものが、『明解カテキズム』（キリスト新聞社）です。現在は、『続・明解カテキズム』も出版され、使徒信条、十戒、主の祈りとともに、洗礼と聖餐についての信仰問答も完成しました。『明解カテキズム』『続・明解カテキズム』の解説はいわゆる語句の説明ではなく、原則として選択された聖句を辿りながら、一つの小説教黙想のようになっています。ですから、日々の日課としてこの部分を読むこともできますし、家庭の礼拝でも用いることができます。日曜学校教案の説教テキストは、ここで選ばれた聖句と連動しています。

わたし自身が、『明解カテキズム』の解説を執筆していて気づいたことがあります。それは、聖書箇所の適切な選択は、カテキズム学習者だけではなく、実際にはカテキズムの理解と解説の執筆に多大な便宜を与えるということです。

わたしが、カテキズムの注解を書くように依頼を受けたときには、すでに日曜学校委員会の委員によって作成されたカテキズムには、詳細な関連聖句が付されていました。聞くところによれば、まずカテキズム本文のたたき台となる文案を作成し、日曜学校委員会の牧師たちが手分けをして、それに修正・加筆を行い、さらに聖句を選択し、委員会の場で、聖句の妥当性とカテキズム本文の整合性を検討するという大変地道な作業をしたそうです。はじめは気の遠くなるような作業で、各委員の胸中には、実際にできるのだろうかという不安もあったと聞いています。しかし、『小教理問答』『ハイデルベルク信仰問答』『ジュネーヴ信仰問答』『みんなのカテキズム（アメリカ長老教会)』などを参考にしつつ、自身の仕えている教会の子供たち、求道者たちの顔を思い浮かべながら、日本の諸教会のためのカテキズムが少しずつ整えられていきました。文字通り、教会のわざとしてのカテキズム作成なのです。

さらに該当聖句の選択は、日曜学校委員会の「日曜学校の説教のために」（季刊教会にしばらく連載されました）で、カリキュラムが作成され、聖句の基づくポイントと解説が記されるという長い積み重ねを継承しています。これら連合長老会の諸教会の共通の営みの成果が、今回のカテキズムにも反映しているように思います。

わたし自身のカテキズムの注解は、日曜学校委員会の委員による聖書箇所の適切な選択によって、実にスムーズに行われました。聖書箇所をそのまま辿っていくと、この聖句を選択し、その聖句を生きている連合長老会の牧師たちの共通した信仰が明解に立ち現われてきます。その明解さは、まさに神の啓示とそれに基づく教会の教理の「明解」そのものであります。わたし自身は、「このようにカテキズムと聖書は、密接に結びつくのだ」ということを身をもって経験することができました。この密接な関係は、カテキズムに参加する学習者にとって益があるだけではなく、そもそもカテキズム作成そのものの可能性と関わります。

しかし、真の課題はこれからです。カテキズムは完成しましたが、2006年より日曜学校委員会編カテキズム教案は、年二回のペースで出版されていきます。説教教案、分級教案は、連合長老会の教職を中心にして執筆されていくわけですから、わたしたちの信仰の一致の真価がこれから問われることになります。それは、わたしたちの祈りと協力なくしては、できない作業でありましょう。立派な「神学」を唱えているだけではだめなのです。汗をかき、時間をささげることが、特にわたしたち教職には求められています。すでに、連合長老会外の諸教会からもぜひ教案を使用したいという申し込みと問い合わせも届いています。日本の諸教会の信仰育成というより大きな課題に答えるためにも、連合長老会諸教会の教案誌の採用と教案誌の充実、またカテキズムに基づく子供たちの信仰育成の活性化に取り組みたいと考えています。

さて、分級教案と説教例は、必ずしも一致していません。しかし、両者がずれているところに逆に使い易さがあるように思います。ちょうど大きい歯車と小さい歯車がかみ合って、少しばかり、分級の学びが予定をオーバーして継続しても、小さい歯である説教教案の回転とかみ合うように全体が設計されています。

また、分級教案は用いる教師の自由な工夫や取捨選択を前提にして構想されており、教会の実情や子供たちの人数などによって、臨機応変に対応できるように工夫されています。同時に、カテキズムに基づく聖書箇所の選定とともに、クリスマスやイースター、ペンテコステには、教会の暦に沿った聖句が選ばれています。また、夏休み期間もまた、特別な枠を設けています。きちっとした構造を持ちながら、ゆとりとすきまを併せ持っているのが、説教テキストと分級教案を併せたカリキュラムの全体の印象です。

4. 伝道と教会形成の要としてのカテキズム

わたしたちの全国連合長老会の諸教会にとって共通の課題は、若い人々、そして日曜学校の子供たちへの伝道です。次の世代への信仰の伝達です。何とかして、若い世代に福音の喜びとそれによって生きることのすばらしさを伝えたいとわたしたちは等しく思っています。今回のカテキズムは、若い人々への伝道をただ単発的な工夫に終わらせるのではなく、信仰の初歩から洗礼へ、そして陪餐にいたる大きな流れと計画の中で、信仰育成をはかろうとするものです。

ですから、カテキズムを重んじる教会は、日曜学校の教師や一部の教会員の個人プレイでは終わりません。牧師と長老の関与は言うを俟たず、全教会員の祈りと参与を引き起こします。全教会員が洗礼から聖餐へという道筋を意識して、子供たちや求道者の信仰育成に取り組む心構えが与えられるだろうと思います。新しく教会の中に入ってきた子供たち、生徒たちは、礼拝出席者であるとともに、やがて洗礼志願者へと導かれ、聖餐共同体の一員となるのです。

教会員がこの一連の流れに参与することによって、子供も大人も、ともに改革長老教会の伝統に連なり、福音伝道の最前線にいるとの認識を新たにすることに繋がります。わたしたちの教会では、どれほど長老会が、子供たちの信仰の育成に関心をもち、力を注いでいるでしょうか。教会には、どれくらい子供たちがおり、どういう問題や課題をかかえているかに注意しているでしょうか。地域への伝道をどれほど力を入れて実践しているでしょうか。

こういうきわめて具体的な課題とカテキズムによる信仰育成は結びついていると思います。はじめに指摘しましたように、連合長老会日曜学校委員会編のカテキズム教案は、地域の子供たち、教会員の子弟たちが、まず礼拝で神の言葉に触れ、その豊かさと喜びを教師の指導によって再び魂に響かせることを目的としています。そこから、一人ひとりが成長して、大人の礼拝に連なり、洗礼を受け、聖餐に与るようになる……こういう一連の流れが強く意識されています。

ですから、カテキズム教育は、日曜学校の先生たちにただ委ねておけばよいのではありません。長老会が責任を負い、奉仕をする必須の事柄となります。その場合、長老会も、ただ教える姿勢ではなくて、教会に伝えられてきた信仰の言葉を響かせ、神を讃美する姿勢を保つことが求められます。長老会自体が、讃美と感謝を絶やすことのない信仰の共同体、神を愛し、人に仕える共同体であることを自覚することが大切です。そのとき、大人も子供たちも、共通して改革長老教会の伝統に連なる幸いを知るようになるでしょう。わたしたちの日本基督教団は、残念ながら、聖餐の乱れ、信仰告白の理解の不一致などでますます混迷を深めていく可能性が増しています。他教団の方々には、想像がつかないかもしれませんが、今もっとも深刻な問題が、教団の教職の一部の聖餐理解が変質しつつある点です。

聖餐は、平等と差別のない共同体の在り方の象徴であるゆえに、洗礼を受けていない人にも、聖餐のパンとブドウ酒に与ってもらおうという主張が広がっています。ある神学教師は、聖餐のパンは、私たち人間が経験する労苦のしるしであり、ブドウ酒は、わたしたちが流してきた涙のしるしであると言って憚りません。そう主張するだけではなく、新しい式文を作成して、いわゆる未受洗者陪餐を実践していくのです。

教会内に侵入してくるヒューマニズムの力に弱体化しつつある教団の諸教会は、信仰の中心、教会の中心までも変質させていく危機に直面しています。

わたしたちは、そのような教団の現状にあって、一致して、改革・長老教会の原点に立ち戻って、こどもたちの信仰育成に全教会挙げて取り組んでいきたいと願っています。その願いの最初のステップが、『明解カテキズム』『続・明解

カテキズム』の出版であり、それらに基づく「カテキズム教案」（年二回発行）の発行です。

これらは、相互に有機的に関連し、日曜学校教育をただ単に子供のための特別なプログラムに終わらせることなく、教会の営みとして位置付け、全教会挙げて、日曜学校から大人の礼拝へと導くカリキュラムの作成を目指しています。「カテキズム教案」によって、子供たちは、日曜学校の礼拝から大人の礼拝へと導かれ、さらに洗礼を受け、聖餐の奥義へと導かれる一貫した信仰の養育が、目指されているのです。その意味で、わたしたちのカテキズムは、「伝道と教会形成の要」となるでありましょう。

（十貫坂教会牧師・東京神学大学教授）

『カテキズム教案』7月号。8号（10月～2010年3月）は、8月中旬発行予定です。

カテキズム教案のサンプルは無料で贈呈しています。お申込みは、メールかファックスで以下まで。郵便番号、住所、お名前、お電話番号を明記してください。

関川泰寛宛　メール：m7sekikawa@nifty.com
ファックス：03-3380-1744

副読本のご案内

『主は羊飼い―中高生のための教理入門―』

価　格　800円
著　者　木下裕也
（名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師）

再刷発行いたしました。ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

❶ 人生の目的――神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に通い始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときたまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問１を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました―わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのとでは、やはり生きかたが大きくことなってくるのではないでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

4

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問１を見ましょう。

問　人のおもな目的は何であるか。
答　人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーヴ教会信仰問答の問１はこうです。

問　人生の目的は何ですか。
答　神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身の何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりでです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

人生の目的　5

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

10月4日　「生ける神の御言葉」　聖書研究

テキスト　ルカによる福音書　24章13〜35節

〈背景と文脈〉

主イエスが葬られてから三日目の早朝、婦人たちが遺体に香料を塗るために墓を訪れた。しかし墓に遺体はなかった。そこに天使たちが現れ、主イエスは復活された、と告げた。婦人たちは、11人とほかの弟子たちにそのことを伝えたが、彼らにはたわ言のように思えた。しかしペトロはその話を聞くと墓へ走って行った。見たところ、そこには亜麻布しかなく、彼は驚きながら帰って来た。

今日の箇所に出てくる二人の弟子（十二使徒に含まれていない弟子の中の二人）も、婦人たちのその報告を聞いていた。またペトロから、墓が空であったことを知らされていた(24:9, 22)。他の弟子たちと同様に、彼らも過去数日間の一連の出来事に接し、失望、困惑していた。そのような彼らに、復活された主はご自身を現され、彼らの信仰に火をつけ、強められた。

〈二人の弟子への顕現（24:13〜24)〉

「ちょうどこの日」とは、主イエスが復活された週の初めの日を指す(24:1)。この日、クレオパともう一人の名を記されていない弟子が、エルサレムから60スタディオン離れたエマオという村へ向かっていた。1スタディオンは185メートルなので、60スタディオンは約11キロメートルに相当する。クレオパともう一人の弟子は、主イエスに関する一連の出来事について話しながら歩いていた。そのときイエスご自身が近づかれて、一緒に歩き始められた。しかし、このとき彼らの目はさえぎられていて、復活された主とは分からなかった。イエスの「その話は何のことですか」(17) という質問に、彼らは驚いて「あなただけはご存じなかったのですか」(24:18) と言った。主イエスに関してエルサレムで起こった出来事は、多くの人々に知られていたことがわかる。彼らは、話している相手が主とは知らずに話し始めた。ナザレのイエスは行いにも言葉にも力ある預言者であり、イスラエルを解放してくださるお方として望みをかけていたこと、それにもかかわらず、祭司長や議員たちが死刑にするために引き渡して十字架につけてしまったこと、また死んでから三日目に婦人たちが墓に行ったら、遺体はなく、天使から「イエスは生きておられる」と告げられたことなどである。彼らの言葉には、やりきれない失望感が表れている。彼らはイエスこそイスラエルが待望していたメシアである、と信じ、従ってきた。だからこそ、主イエスの捕縛、十字架上での死を理解できないでいた。また主の復活を信じることができず、天使の告げた言葉に困惑していた、と思われる。

〈御言葉の説き明かしと信仰の回復 (24:25〜35)〉

そのような彼らに、主イエスは、聖書全体にわたりご自分について書かれていることを説き明かされた。メシアについて起こった一連の出来事は、すでに聖書に書かれていて、その通りになったのである。メシアが苦しみを受けて栄光に入ることは、すでに預言されていた。そのようにして主は、霊的に鈍くなっていた彼らを御言葉によって導かれた。

エマオの村に着き、主は彼らと一緒に食事をされた。そのとき彼らの目が開かれ、その旅人は復活された主であると分かった。そのとき主の姿は見えなくなった。「聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか。」(24:32) 主の御言葉の説き明かしは、彼らの心のもっとも深いところに触れ、揺り動かし、燃やした。それはご自身の啓示にほかならない。

復活の主は生きておられて、今この時も、御言葉を通して、また教会での御言葉の説き明かしを通して私たちにご自身を現してくだっている。御言葉を通しての復活の主との出会いは、霊的な活力の源泉である。　（後藤公子）

10月4日　「生ける神の御言葉」　　カテキズム研究

カテキズム　子どもカテキズム　問69

子どもカテキズム
問69　御言葉とは何ですか。
答　生ける神の言葉、イエス・キリストです。
書かれた神の言葉である聖書と、
聖霊なる神さまが語られる神の言葉としての教会の説教を通して、
私たちは、イエスさまと一つに結び合わせられます。
証拠聖句　　ヨハネ1:1〜5、ヨハネ一1:1〜4
参考教理問答　ウ小教理89、ウ大教理155

〈恵みの手段〉

「(キリストの) 贖いに伴う様々な益を私たちに分かち与えられる外的手段」(ウ小88、松谷訳) として、「御言葉」が第一に挙げられています。聖書については、すでに子どもカテキズム問5、6で取り上げられました。そこでは、キリスト教信仰において知るべきことが、すべて聖書に記されていることが示されていました。

問69では、特に御言葉とイエス・キリストの関係に注目しています。御言葉はイエス・キリストそのものなのだと教えます。問5、6と合わせて考えるならば、私たちが、キリスト教信仰において知るべきことは、聖書にすべて記されているのであり、その聖書の内容はイエス・キリストに集約されることになります。

〈生ける神の言葉、キリスト〉

キリストと御言葉との関係は、聖書の中で繰り返し語られています。例えば、ヨハネ1章1〜14節は、神である「言」が肉となり、私たちの間に宿られたことを教えます。また、キリストご自身が「聖書はわたしについて証しをするものだ」(ヨハネ5:39) と教えておられます。今回の聖書箇所ルカ24章27節では、キリストご自身が「聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明」されました。キリストが来臨された「この終わりの時代」においては、旧約預言者など様々な形でなく、「御子によってわたしたちに語られました」(ヘブライ1:2) とあります。

〈神の言葉としての説教〉

書かれた聖書の言葉が「神の御言葉」であるだけでなく、教会で語られる御言葉の説教が「神の御言葉」です (ウ小89)。聖霊なる神様は、書かれた御言葉を私たちに照らし出してくださるだけでなく、説教者の賜物や人格をも用いて、今の時代に生きる神の民に語りかけられます。聖霊は、書かれた「神の御言葉」(聖書朗読) をも、語られた「神の御言葉」(説教) をも、「罪人に罪を自覚させて回心させ、さらに信仰を通して、彼らを清さと慰めにおいて造り上げ、救いにいたらせるのに有効な手段とされます」(ウ小89)。

〈キリストに結ばれる〉

「神の御言葉」により、私たちはキリストがどなたかを知り、キリストがしてくださった御業を知り、キリストへの信仰へと導かれます。他の「恵みの手段」である「礼典」の恵みをも知らされ、キリストとの「祈り」の交わりへと導かれます。そのようにして、御言葉によって、実際にキリストへと結び合わされるのです。　　(大西良嗣)

10月4日　「生ける神の御言葉」　　説教展開例

テキスト　　ルカによる福音書　24章13〜35節
カテキズム　子どもカテキズム　問69

〔単元のねらい〕

主イエス・キリストの肉声を聴くことのできない今日、主が、聖書と聖霊によって子どもたちに語りかけてくださることをまず教師自身が確信したい。特に今日は、教会学校の礼拝において、教師が聖書の御言葉を読み、説き明かすことで、教師自身の声を用いて、主が御語りくださることをおぼえたい。また、主は、礼拝だけでなく、聖書を自分で読む生活においても豊かに語りかけてくださるので、その際、聖書を黙読することよりも音読することの大切さも教えることができればと願う。

「イエス様からの語りかけを聴こう」

愛する子どもたち、おはようございます。

今日の日曜日も、まず、みんなと一緒に神様を礼拝できて、聖書の御言葉に聴くことができますから、先生は、とてもうれしいです。

さて、先生は、聖書を読む時に、時々、イエス様のお弟子さんたちっていいな〜と思うことがあります。それは、この二人のお弟子さんたちもそうですが、ペトロさんのようなお弟子さんたちは、イエス様の肉声、なまのお声を聴くことができたからです。イエス様って、どんなお声でお話しされたのでしょうね？　いろいろと想像してしまいます。

ところで、さっき、今日の聖書の御言葉を読みましたが、エマオという村に向かう二人のお弟子さんたちに、復活なさったイエス様がお会いくださったことが書いてありました。最初、この二人のお弟子さんたちは、近づいておいでになって一緒に歩まれたのがイエス様だとは分かりませんでした。その理由が、16節に「しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった」と書いてあります。彼らは、まだこの時、イエス様の復活を信じることができていなかったのです(22節)。ですから、一緒に歩いておられるのがイエス様だと分からなくて当然でしょう。お声も聞き慣れていたと思うのに、イエス様への不信仰が邪魔してしまって、一緒に歩いておられるのがイエス様だとは分からなかったのです。

エマオへと向かう途中、イエス様は、聖書全体から、この「聖書」は今の旧約聖書ですが、御自分について書かれていることを二人のお弟子さんたちに説明なさいました（27節)。その時、二人の心はだんだんと熱くなって行ったのです（32節)。顔つきも、最初は、暗かったのですが(17節)、心がだんだんと熱くなることで、明るい、笑顔となって行ったのではないでしょうか。

エマオの近くまで来ると、既に太陽も沈みかけていたので、お弟子さんたちは、一緒にお泊まりくださるようにとイエス様にお願いしました。イエス様はなおも先に行かれる様子だったのです。夜の旅も危険だし、何よりも、もっとイエス様のお話を聴きたくて、そのようにお願いしたのでしょう。イエス様が、一緒に食事の席に着かれて、パンを取られ、賛美の祈りをなさって、パンを裂いてお弟子さんたちに渡された時、「すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった」(31節）と書いてあります。二人の心から不信仰が完全に取り除かれて、イエス様の復活を信じることができるようにされたので、目の前のお方がイエス様だと分かったのです。この二人のお弟子さんたちは、イエス様のなまのお声を聴きながら、イエス様の復活を信じることができるようにされて行ったのです。ですから、私は、この二人のお弟子さんたちって、イエス様のなまのお声を聴けていいな〜と思うことがあり

ます。

みんなの中で、イエス様のなまのお声を聴いたことがあるというお友だちはいますか？　そういうお友だちはいませんよね。今、イエス様は、この地上での、みんなの罪からの救い主のお働きを終えられて、天の王座についていらっしゃいます。ですから、今は、イエス様を見ることはできないし、まして、イエス様のなまのお声を聴くことはできませんよね。けれども、今も、イエス様は、二人のお弟子さんたちへのように、みんなへも近づいておいでになって一緒に歩まれて語りかけてくださるのです。そのことを今、みんなは、この教会学校の礼拝で体験しているのです。

今朝は、私が、聖書のお話（説教）をしています。教会学校の礼拝では、週毎に教会学校の先生たちが順番で聖書のお話をしてくださいますが、実は、イエス様が天の王座にいらっしゃる今は、私や他の先生たちの声を用いて、イエス様がみんなに語りかけてくださるのです。ですから、天の王座という、とてもかけ離れたところではなしに、今も、みんなの目の前で、イエス様は語りかけてくださっています。また、教会学校の礼拝だけではありません。みんなが、聖書を持って歩くところならば、どこででも、イエス様は近づいておいでになって、語りかけてくださいます。それは、どのようにしてか？　その聖書を読むならば、みんなの声を用いて語りかけてくださるのです。ですから、学校の授業中とか通学・帰宅途中の満員電車の中は無理かも知れませんが、たとえば、毎日、朝起きて、自分のお部屋でお祈りする時に聖書を読むと思いますが、その時は、声に出して聖書を読むことです。そうすれば、自分の声でイエス様からの語りかけを聴くことができます。また、月刊「リジョイス」（日本キリスト改革派教会大会教育機関紙）の「いのちのパン」を音読することでも、イエス様からの語りかけを聴くことができるのです。

このように今は、聖書が読まれること（聖書朗読）と、特に聖書のお話（説教）を用いて、イエス様はみんなに語りかけてくださいます。そして、二人のお弟子さんたちへのように、みんなへも働きかけてくださって、みんなの心から不信仰を取り除いてくださって、御自分が、みんなの罪からの救いのために、十字架の死からよみがえられたことを信じることができるようにしてくださいます。ですから、今も、イエス様は、目には見えませんが、御自分の御霊、聖霊なる神様によって、みんなの近くにおいでになって一緒に歩いてくださるのです。そんな時、二人のお弟子さんたちの心が熱くなったように、みんなの心も、もし、元気がないなら元気が与えられます。恐れがあるなら勇気が与えられます。

イエス様のなまのお声は聴けないけれども、今でも、イエス様は、聖書が読まれること、特に聖書のお話を通して語りかけてくださいます。なんてすばらしいことでしょうか！　さあ、祈りをもって、耳を澄ませて、聴いてみましょう。特に教会学校の礼拝で、聖書のお話に聴いてみましょう。「イエス様、どうか、今、私に語りかけてください」と。必ず、イエス様は、みんな一人ひとりに語りかけてくださいます。　（長谷川潤）

〔今週の暗唱聖句〕　ルカによる福音書 24章27節

そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、
御自分について書かれていることを説明された。

10月4日　「生ける神の御言葉」　幼稚科

〈ねらい〉

物語（絵本）を通して、エマオへの途上でおこった出来事を知り、味わう。

〈展開例〉

物語（絵本）の読み聞かせ（119ページ参照）。

※10月18日も同じものを使います。作り方は10月18日を参照（40ページ参照）。

場面ごとの対比を強調するため、見開きのページを最初から見せないで、お話に合わせて開くと良い。

【エマオへの道】

①イエス様は、十字架にかかって死なれました。そして、イエスさまのお身体は、お墓に葬られました。イエスさまといつもいっしょにいたお弟子さんたちや、女の人たちはみんなとても悲しみました。クレオパさんともうひとりのお弟子さんもとても悲しんでいました。二人は、イエスさまが死なれてからちょうど三日目の朝、田舎のエマオの村に帰ることにしました。二人とも、とっても悲しそうです

②「とぼ、とぼ、とぼ」。二人が、歩きながらイエスさまのことを話し合っていると、なんと！死んだはずのイエスさまが近づいて来て、いっしょに歩きはじめました。でも、二人はイエスさまだと、わかりません。

③イエスさまは、二人に声をかけられました。「あなたたちは、誰のことを話しているのですか？」でも、二人はまだイエスさまだとはわかりません。二人はがっくり肩を落とし、顔はしょんぼりと元気がありません。クレオパさんは、十字架にかかって死んでしまったイエスさまのことを話しました。

④すると、イエスさまは、聖書にかかれているご自分のことを話しはじめました。それでも、二人は、まだイエスさまだとはわかりません。ただ、歩きながらお話しを聞いていると、二人の心は、じんわりほかほかあたたかくなり、だんだん元気になってきました。二人は、もっともっとお話しを聞きたくなりました。そこでエマオの村に着いたとき、もっと先へ行こうとするイエスさまをひきとめて、「どうか、いっしょに泊まってください」とお願いしました。

⑤そして、みんなが夜ごはんの席に座ったとき、イエスさまは、パンを手にとって讃美のお祈りをし、パンを裂き、クレオパやもう一人のお弟子さん、そしていっしょに食事をする人達に渡しました。

⑥そのときです！　ふたりの目が開け、イエスさまだとわかりました。すると、イエスさまは見えなくなりました。ふたりは、わかりました。イエスさまは、本当に復活されたということが。

⑦「てく、てく、てく」。ふたりは、来た道を元気に戻って行きます。他のお弟子さんたちにもこのことを伝えるためです。「るん、るん、るん」。ふたりのこころは嬉しい気持ちでいっぱいです。「やったー!!」

【ポイント】

聖書に書かれているお話（御言葉・説教）が語られ、それを聞くとき、わたしたちの心は燃やされ喜びに溢れ、元気になる。今、絵本を通してお話しを聞いている子どもたちが、その喜びに満ちるよう祈り備えたい。

〈暗唱聖句〉

小さな子どもたちでも覚えられるよう、言葉を短くしたり、他の聖句にしているときがあります。

「イエスさまがお話ししてくださったとき、
わたしたちの心は燃えていたではないか」

ルカによる福音書24章32節

〈お祈り〉

てんのおとうさま。今日、教会に来れてありがとうございます。〇〇ちゃんといっしょに、イエスさまのおはなしをきけて、うれしいです。つぎの日曜日まで、先生も〇〇ちゃんも毎日、神様の御言葉を聞いて元気で過ごせますように。イエスさまのおなまえによって、アーメン。

10月4日　「生ける神の御言葉」　　小学科下級

〈ねらい①〉

聖書そのものに親しむことで、神の御言葉に生かされるという恵みを生活化する。

〈展開例①〉

今日のお話では、「イエス様からの語りかけを聞こう」とありました。では、どうすればイエス様の御言葉を聞けるでしょうか。それはまず、聖書を読むことです。イエス様の御言葉を聞きたいと真剣に祈りながら聖書を読めば、聖霊が私たちの心を照らしてくださって、イエス様の語りかけを聞かせてくださいます。

だから、毎日聖書を読みましょう。聖書を肌身離さずもって、たくさん開いてみましょう。聖書と友だちになりましょう。

では、聖書速開き選手権をはじめます!!　○○書○章○節（どこでもいいが、その日の大人の礼拝説教箇所がいいでしょう)、だれが一番速いかな？（※筆者の教会ではこんな遊びをしていますが、子どもたちのスピードアップは目覚しいです。）

〈ねらい②〉

説教に親しむことで、神が今ここで語りかけていてくださることを体感する。

〈展開例②〉

イエス様の御言葉を聞きたいと願う人には、もうひとつ大事なことを教えましょう。それは、説教をよく聞いてください、ということです。神様は説教者を通して、聖書を解き明かしてくださって、今この時代に、小学生として生きるあなたたちに、今一番必要なことを語りかけてくださいます。これは聞かなきゃもったいないですね。今週一週間を精一杯生きることができるように、イエス様が与えてくださる勇気と希望、慰めと励ましの言葉なんだから。だから子どもの礼拝の説教も、大人の礼拝の説教も大切です。真剣に聞こうと思うと、全然退屈じゃなくなるよ。子どもにだって絶対分かる。だって真理を知りたいと願う者には、聖霊が必ず分からせてくださるから。

そこで皆さんに宿題です。今日この後の礼拝で、牧師さんが取り次いでくださる説教をよく聞いて、神様がどんな御言葉をくださったか考えて、後で先生に教えてください。必ず一つは分かることがあるから。もしも全然意味が分からなかったら、一緒に牧師さんに教えてって言いにいこう。

〈祈り〉

神様、今日も御言葉を与えてくださってありがとうございます。小さな私たちの心を開いて、あなたが今日与えてくださる慰めと希望を、受け取ることができるようにしてください。イエス様がいつも近くにいて語りかけていてくださることを、はっきり見ることができるようにしてください。

10月4日　「生ける神の御言葉」　　小学科上級

〈ねらい〉

イエス・キリストの語りかけに心燃やされた弟子たちの姿を学ぶ。

〈展開例〉

エルサレムからエマオまで行く途中、二人の弟子たちは、一緒に歩いてくださっている方に（それは復活されたイエスさまでした！）エルサレムで起こった出来事を話しました。ただし、彼らの説明は間違っていました。

第一の間違いは彼らがイエスさまを「預言者」と呼んでいるところです。第二の間違いは彼らがイエスさまのことを「イスラエルを解放してくださる方」、つまりユダヤ人をローマ帝国から解放する政治家だったと言っているところです。

つまり、彼らはイエスさまのことを立派な人(偉人）としてしか見ていなかったのです。心から尊敬していたわたしたちの先生が殺されてしまったことが残念で仕方ない。ところがその方が復活なさったと、女性たちが言っている。そのようなことはとても信じることができない。本当のところはどうなのか。

そのように考えている彼らを、イエスさまは愛情をこめてお叱りになりました。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち！」。そしてその後イエスさまは、徹底的に聖書の御言葉の全体を彼らに語って聞かせてくださいました。

そうしているうちに旅は終わりました。歩き疲れ、しゃべり疲れて、少し休みたいし、お腹もすいてきた。しかしまだ学び足りない。聖書を熱心に教えてくださるこの方の話をいつまでも聞いていたい。学び続けたい。別れが寂しい。彼らはそのような思いを抱いたのです。

そこで彼らはイエスさまを無理に引き止めました。イエスさまはその求めに応じてくださいました。そしてみんなで食事の席に着いたときに、イエスさまがお始めになったことは給仕の仕事でした。歩きつかれた弟子たちをやさしくねぎらってくださるように、御自分の手でパンを裂いて、一人ひとりに渡してくださいました。

そのとき彼らはとても驚きました。その方がパンを裂く姿は彼らがこれまで何度も見てきたのと同じものだったからです。「これはわたしの体である」と言われながら手渡されたあのパン。「これはわたしの血である」と言われながら手渡されたあのぶどう酒。十字架にかけられる前の夜に十二人の弟子のまえでイエスさまがしてくださったことのすべてを、二人の弟子たちも見たのです。そして彼らは自分の目の前にいるこのお方はあのイエスさま御自身であるということが、そのとき初めて分かったのです。

しかし、それが分かった途端、イエスさまの姿が見えなくなりました。それでも彼らは全く失望しませんでした。そして互いに言いました。「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか！」

そのとき彼らは、イエスさまが復活されたことの意味、そして復活されたイエスさまのお姿を見ることの意味がやっと分かったのです。

復活とは非科学的な「ありえない話」として片付けてしまえるものではありません。生きておられるイエスさまが聖書のみことばを正しく分かりやすく説明してくださるという不思議なことが起こるのです。そして、みことばを聞く人々の心が燃えるということが起こるのです。そのようにして、あのイエスさまがこのわたしたちの心の奥深いところに今も生きておられるということが実感として分かる。それが「復活」なのです。

〈お祈り〉

神さま、復活なさったイエスさまが弟子たちに分かりやすく聖書のお話をしてくださったことを今日学びました。どうか、わたしたちも、この弟子たちと同じように、聖書のみことばを聞いて感動することができますように。イエスさまの御名によって、アーメン。

10月4日　「生ける神の御言葉」　中学科

〈ねらい〉

〇どのような方法で神の御言葉を聞くことができるかを知る。

〇神の御言葉を聞いた時、どのようなことが起こるかを知る。

〈展開例〉

質問１　二人の弟子たちは、エマオへの途上で何をしていたか。

質問２　イエスが話の内容を聞かれると彼らは何と答えたか。

質問３　それを聞いてイエスはどうされたか。

質問４　弟子たちとイエスが泊まった宿屋でイエスは何をされたか。

質問５　その結果どうなったか。弟子たちはその後どうしたか。

まとめ

エルサレムからエマオへの途上で、二人の弟子たちは、イエスの十字架の死について話し合っていた。彼らは、イエスが預言者であると信じていたが、その方がメシアとしてイスラエルを救うどころか、祭司長や律法学者たちの策略にはめられて十字架上で殺されてしまったことにひどく失望していた。イエスが死んでから三日目、婦人たちが天使にイエスの復活を告げられたが、空の墓を見ても彼らは復活を信じることができないでいた。復活されたイエスは、御自身彼らに近づき、話の内容を聞いてから、聖書全体にわたってメシアについての預言を説明された。彼らが引き止めたため、イエスも共に宿屋に入り、そこで食事のために讃美の祈りを唱え、パンを裂いた時、イエスだとわかったが、イエスの姿はそこで消えてしまった。彼らは、イエスの解き明かしの間、心が燃えていたことを思い起こし、エルサレムに引き返して、他の弟子たちに復活したイエスと出会った次第を話した。

弟子たちは、最初は不信仰によって、隣で歩いていたイエスを認めることができなかったが、御言葉の解き明かしにより、その心の目が開かれた時に、復活のイエスを見ることができた。私たちの心の目も様々な罪によって閉ざされていて神を見ることができない状態に陥っている。書かれた神の御言葉である聖書や教会で聴く解き明かされた神の御言葉である説教に接する時、私たちの閉ざされた心の目は開かれ、神の御心を悟ることができるように変えられる。神は、聖書を通し、説教を通して私たちに今も語られる。常に御言葉に接する生活に励む者とされたい。

〈祈り〉

神様、私たちに恵みの手段を与えてくださり、ありがとうございます。エマオ途上の弟子たちが、イエス様の御言葉の解き明かしを聴いた時、暗く閉ざされていた心が燃やされて、失望から熱心へと変えられました。私たちも聖霊なる神様に祈りつつ、聖書を読み説教を聴く時に、神様の御声を聞くことができます。どうかいつも聖書を読み、説教を聴いて、あなたの御声に聞き従う者となれるようお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。

10月11日　「御言葉への聴従」　聖書研究

テキスト　　ヤコブの手紙　1章19〜25節

〈背景と文脈〉

ヤコブの手紙は一見、パウロが説いた信仰義認の教理と相容れないように見える。とくに、「人は行いによって義とされるのであって、信仰だけによるのではありません」(2:24) というヤコブの言葉は誤解を与えかねない。パウロは「人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです」(ローマ3:28)、と言ったが、パウロは救いの手段として律法を守ることを否定したのであり、ヤコブが主張する行いは、救いの実としての行いであり、両者は矛盾しない。

1章18節でヤコブは、「御父は、御心のままに、真理の言葉によってわたしたちを生んでくださいました」と言っている。御言葉には生まれながらの人を新生させ、霊的に成長させる力がある。御言葉を聞き、それを行うことによって、それが可能になる。また真の信仰は行いにおいて現れてこなければならない、とヤコブは言う。

〈悪を素直に捨て去りなさい (1:19〜20a)〉

神は、真理の御言葉を手段として読者を新生させられた (18)。この御言葉について21節後半から再び言及している。すなわち「心に植えつけられた御言葉を受け入れなさい」という忠告である。その前にまず悪を捨て去る必要がある。「聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい」(19) と似た忠告は箴言にも見られる (10:19, 13:3, 17:27)。ヤコブは感情をコントロールし、愚かな言葉を避けるように忠告している。「人の怒りは神の義を実現しない」(20)、すなわち神のご性質である義を全うできなく、従って神を喜ばせることはできないからである。「あらゆる汚れやあふれるほどの悪を捨て去」(21a) ることは、「御言葉を受け入れ」(21b) るために必要なことである。

〈御言葉を行う人になりなさい (1:20b〜25)〉

「心に植えつけられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉はあなたがたの魂を救うことができます」という忠告は、まだ信じていない人々に語られているのではなく、ヤコブの手紙の読者である信者に語られている。だからこの場合の魂の救いは、再臨のとき完成する完全な救いを意味する。救いは神のみわざであるが、信者はその中でなすべき責任が与えられている。「御言葉を受け入れなさい」とは、御言葉を行いなさい (22)、と同じ意味であると考えられる。救いの初めに植えつけられた御言葉を行うことが完全な救いに導く。その御言葉を生活の指針として行うことにより、救いの恵みを最大限に受ける。御言葉に注意を払い、学び、黙想し、行うことは霊的な成長に必要不可欠である。

御言葉を聞くだけで行わない人は、鏡に自分の姿を映して見るが、その場を去ると、鏡に映った自分の姿を忘れてしまう人に譬えられる。ここで御言葉が鏡にたとえられている。鏡に向かうとき、鏡はその前に立っている人のありのままの姿を映し出す。同様に、私たちは、御言葉を読むと、私たちのありのままの姿を知る。「立ち去ると、それがどのようであったか、すぐに忘れてしまいます」(24) とあるように、御言葉によってありのままの姿を映し出され、どうすべきか指針を与えられても、それに従うことをしないから、鏡を見る意味がない。

それと反対に御言葉を行う人は「自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ、これを守る人」(25) と表現されている。「自由をもたらす完全な律法」は「真理の言葉」(18) であり、22、23節で言及されている「御言葉」を指す。御言葉を一心に見つめ、守るとは、積極的な聴従である。そのような人は「その行いによって幸せになります」(25) と約束されている。この幸せは神から来る幸せを意味している。神は、神の御言葉に従順に生きる人々に喜んで祝福を与えてくださるお方である。

(後藤公子)

10月11日　「御言葉への聴従」　　カテキズム研究

カテキズム　子どもカテキズム　問70

子どもカテキズム

問70　御言葉は、どのようにしてあなたに救いの恵みを与えるのですか。

答　私たちが、神の御言葉である聖書と説教に正しく聞き従うことによってです。
御言葉をよく聞くことこそ、神さまへの愛と奉仕です。

参考教理問答　ウ小教理90、ウ大教理156〜160

〈恵みの手段〉

ウ小教理89が教えるとおり、聖霊なる神様が、聖書と説教を、恵みの手段として有効に用いられます。しかし、聖霊は、私たちに乗り移って、私たちの意識を無くした状態にして、それをなさるのではありません。聖霊は、私たちが意識的・自覚的に御言葉に聞くように導かれるのです。ですから、私たちがどのような態度で御言葉に聞くべきかを学び、実行することは重要なことです。

ウ大教理が、私たちが聖書と説教に聞く態度について丁寧に解き明かしていますので、それに沿って記すことにします。

〈聖書〉

聖書は日本語に翻訳されています。これによって、個人、また家庭で、聖書を読むことができるようにされています。改革派教会の教育機関誌『リジョイス』などの手引きが、日々、御言葉に聞くために用いられることも、良いことでしょう。

同時に、教会の礼拝における聖書朗読も重要です。個人としてだけでなく、信仰の共同体として神の言葉に耳を傾けることになります。

聖書を読むときには、それが神様の言葉そのものであるという敬虔さ、信仰、熱心、祈りをもって読むことが大切です。単なる知識として読むこともできますが、そのような読み方は、恵みを受け取る手段として有効ではありません。

〈説教〉

「説教」は、通常、教会において任職された牧師が行うものを指しますが、日曜学校において教師たちが行うものもこれに準じるものとして理解すべきでしょう。ウ大教理159は説教者のあるべき態度を教えます。健全な教理を、熱心に、忠実に、「神と神の民の魂への燃え立つ愛をもって」説教すべきであるとあります。日曜学校でお話をする教師にとっても、神様への愛と、子どもたちへの愛が大切であるということが分かります。

説教を聞く者の態度としては、熱心と準備と祈りをもって耳を傾けることが重要です。そして、聞いたことを聖書によって吟味し、真理は「神の言葉」として「信仰・愛・謙遜・素直さ」をもって受け入れるべきです。さらに、神の言葉を瞑想し、語り合い、心に蓄え、生活の中で実を結ばせることが求められています（ウ大教理160）。このようにすることで、説教が、恵みを受け取る手段として豊かに用いられることでしょう。

（大西良嗣）

10月11日　「御言葉への聴従」　　説教展開例

テキスト　　ヤコブの手紙 1章19〜25節
カテキズム　子どもカテキズム 問70

〔単元のねらい〕

まず御言葉に聴くことが、主から求められているが、それは、単に〈聞く〉ことでなく、〈聴き従う〉ことであることを教えたい。そして、まず御言葉に聴き従うことは、聖書全体の御言葉に聴き従うことであって、それは、主イエス・キリストの十字架の血潮と聖霊による、罪の赦しと聖化の恵みの中での聴従であることを教えたい。

「まず御言葉に聴く」

愛する子どもたち、おはようございます。

先週、今は、日曜日の教会学校の礼拝を中心に、聖書が読まれること（聖書朗読）、特に聖書のお話（説教）を用いて、イエス様がみんなに語りかけてくださるというお話をしました。イエス様のなまのお声を聴くことはできませんが、教会学校の先生方の声を用いられて、イエス様が語りかけてくださるのです。なんてすばらしいことでしょう。

さて、イエス様は、今は、天の王座にいらっしゃいますから、みんなの目には見えません。けれども、イエス様は、御自分の御霊、聖霊なる神様によって、確かにみんなの近くにおいでになって一緒に歩んでくださいます。そのようにイエス様が一緒に歩んでくださる一週間の生活の最初にあるのが、教会学校の礼拝です。この礼拝で、イエス様からの語りかけを聴いて、一週間の生活、お家や幼稚園、学校での生活が始まることになります。今朝の聖書の御言葉に「わたしの愛する兄弟たち、よくわきまえていなさい。だれでも、聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい」(19節）とあります。それならば、何に聞くのに早くなのでしょうか。それは、まず何よりも、イエス様からの語りかけ、聖書の御言葉に聞くのに早くということです。まず御言葉に聴きなさいということです。

そのように礼拝で、まず御言葉に聴くことで、一週間の生活が始まります。そうすると、教会学校の礼拝で聴いた御言葉を暗唱する、おぼえることをしていると思いますが、そのようにして心に蓄えた御言葉に導かれながら、一週間の生活をすることになりますね。そのような生活こそ、イエス様が一緒におられ歩んでくださる生活にほかならないのですが、この生活は、今朝の聖書の御言葉だと、「御言葉を行う人」(22節）の生活ということになります。次のように教えられています。

「御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。御言葉を聞くだけで行わない者がいれば、その人は生まれつきの顔を鏡に映して眺める人に似ています。鏡に映った自分の姿を眺めても、立ち去ると、それがどのようであったか、すぐに忘れてしまいます。しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ、これを守る人は、聞いて忘れてしまう人ではなく、行う人です。このような人は、その行いによって幸せになります」(1：22〜25)。

もう、みんなの心の中には、礼拝で聴いて、そして、おぼえた御言葉がたくさんあると思います。それで、大事なのは、そのようにして心に蓄えられている（植え付けられている）御言葉を一週間の生活の中で、いや、一週間だけでなくて、いつでもどこでも行うことなのです。ですから、まず御言葉に聴くことは、まず御言葉に聴き従うことです。

たとえば、以前に、礼拝で聴いて、おぼえた御言葉の一つに、イエス様の御言葉で、「敵を愛し、

自分を迫害する者のために祈りなさい」（マタイ5:44）があると思います。たぶん、この御言葉は、みんなの心に特に強烈に焼き付いているのではないでしょうか。ですから、いつでも、すぐに思い出すことができると思います。特に敵と出会った時なんかです。そう、自分に不利益をもたらすような人と出会った時です。そんな時、いつも思い知らされることは、この御言葉を行うことの難しさではないでしょうか。敵を愛せないことです。そうならば、御言葉を行うことにはなりませんよね。ですから、落第なのでしょうか？それで、もし、この御言葉は、聴いても行うことができないから、私には関係ないわ！　と言ったり、諦めたりするならば、それは、イエス様がとても悲しまれることなのです。なぜって、イエス様は、敵を愛することを福音として語ってくださったからです。「福音」は、良い知らせ、グッドニュースです。誰にとって良い知らせなのでしょう。もちろん、みんなにとって、です。特に罪があって、御言葉を行えないみんなにとって、です。ですから、敵を愛しなさいという御言葉は行えないので、自分とは関係ないと決め込んだり、諦めたりしないことです。それなら、どうしたら良いのでしょう？敵を愛しなさいという御言葉も福音である以上、自分の力で愛そうとするのでなしに、自分の力を捨てて、敵をも愛されるイエス様におすがりすることです。ですから、たとえば、次のようにお祈りをすることが、実は、御言葉を行うことになるのです。「いつくしみ深いイエス様、敵を愛しなさいとの御言葉を行えない、罪深い、弱い自分です。どうか、御言葉を行えない私をお赦しください。そして、〇〇さんを少しでも愛することができるように助けてください」。

それから、こんなお話を聞いたことがあります。まだ東ドイツが民主化されていない頃のお話ですが、愛する仲間を警察に逮捕されたり、苦しめられて、怒りや憎しみで心がいっぱいの教会員の人たちに対して、ある牧師先生が言ったそうです。教会の入り口の部屋の中に積んである道路舗装用の小石を礼拝堂に持って来て、それに怒りや憎しみを託して祭壇に置いて、祈るようにと。祭壇に小石を置くということは、敵をも愛するイエス様の十字架の下に小石を置くということでしょう。そのようにして、人に対する怒りや憎しみをイエス様にあずけてしまいなさいということだと思います。この牧師先生は、そのようにして、教会員の人たちが、敵を憎むのでなく、イエス様の御言葉を少しでも行うことができるようにご指導なさったのです。

罪ある人間が、敵を愛するという御言葉を行うことは、とても難しいことです。イエス様のお力なしには無理なことです。それで、もし、少しでも、この御言葉を行うことができたとするならば、たとえば、敵のためにお祈りすることができたとするならば、それは、イエス様のおかげです。ですから、イエス様への感謝の思いでいっぱいになることでしょう。ところで、敵を愛しなさいとの御言葉だけでなしに、実は、「御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません」との御言葉に生きることができるのも、すべて、イエス様のおかげなのです。私たち罪人が自分の力で行える御言葉は、一つもないのです。すべては、イエス様のお力をいただいて、はじめて行えるのです。ですから、礼拝で聴いて、そして、心に蓄えた御言葉を行う生活は、イエス様への感謝の思いでいっぱいになることでしょう。

そこで、みんなにお願いです。ぜひ、礼拝そして分級を終える時、お祈りしてください。あるいは、先生方にお祈りしてもらってください。「イエス様、どうぞ、今日、礼拝で聴いて、覚えた御言葉をこれからずっと行うことができるように、聖霊なる神様によって助けてください」と。

（長谷川潤）

〔今週の暗唱聖句〕　ヤコブの手紙 1章22節

御言葉を行う人になりなさい。

10月11日　「御言葉への聴従」　幼稚科

〈ねらい〉

物語を通して、神様の御言葉を聞いて行うことの幸せを知り、神様の御言葉を聞いてお祈りすることへと導く。

〈展開例〉

物語（絵本）の読み聞かせ（120ページ参照）。

場面ごとの対比を強調するため、見開きのページを最初から見せないで、お話に合わせて開くと良い。

【御言葉を聞いて行う人】

①日曜日の朝です。ひよりちゃんは、いつものように教会へ行きます。お父さんとお母さん、妹のあさきちゃんもいっしょです。

②今日は、こんなお話しを聞きました。「イエスさまは言われました。『わたしがあなたにしたように、誰にでもやさしくしなさい』」。

③夜になりました。ひよりちゃんは、いつも寝る前にはお母さんといっしょにお祈りします。「てんのおとうさま。ありがとうございます。イエスさまのように、だれにでもやさしくできますように。アーメン」。

④次の日です。ひよりちゃんは、お友だちのゆりちゃんと遊びました。ひよりちゃんが、おきにいりのスコップであそんでいると、ゆりちゃんが、「ひよりちゃん。スコップかして」と言いました。ひよりちゃんは、本当はもっとスコップであそびたかったけれど、ゆりちゃんに「いいよ」と言ってかしてあげました。

⑤夜になりました。ひよりちゃんは、お母さんといっしょにお祈りします。「てんのおとうさま。イエスさまの言われたようにゆりちゃんにやさしくできました。ありがとうございます。アーメン」。

⑥次の日です。ひよりちゃんがあそんでいると、ちょっとおこりんぼうのたかしくんがやってきました。たかしくんは、ひよりちゃんのスコップをぎゅっとつかんで、「そのスコップかせよ」と言いました。ひよりちゃんは、たかしくんにはかしたくありません。「ダメーっ!!」ひよりちゃんは、たかしくんをおいて、にげてきてしまいました。

⑦夜になりました。ひよりちゃんは、お母さんといっしょにお祈りします。ひよりちゃんは、お母さんにたかしくんのことをおはなししました。お母さんは、やさしく「イエスさまは、『わたしがあなたにしたように、誰にでもやさしくしなさい』って言われていたね」と言いました。「てんおとうさま。ごめんなさい。あしたは、イエス様の言われたように出来ますように。アーメン」。

⑧ちゅん。ちゅん。ちゅん。次の日の朝、ひよりちゃんはことりさんの声を聞いて、元気いっぱいに起きました。「お母さん。朝のおいのりしようよ」。ひよりちゃんは、大好きなお母さんといっしょに、おいのりしました。「てんのおとうさま。イエスさまの言われたように、わたしたちもだれにでもやさしくできますように。アーメン」。

【ポイント】

御言葉を行う人になるよう、御言葉に背を向ける心とたたかって、イエスさまといっしょにお祈りする。失敗しても、あきらめない。

〈暗唱聖句〉

「御言葉を行う人になりなさい」

ヤコブの手紙1章22節

〈お祈り〉

てんのおとうさま。今日も、〇〇ちゃんといっしょに聖書のお話しを聞けてうれしいです。ありがとうございます。いじわるな心とたたかって、イエスさまといっしょにおともだちにやさしくできますように。愛する力をください。イエスさまによって、アーメン。

10月11日　「御言葉への聴従」　　小学科下級

〈ねらい①〉

御言葉に聞き従う人のモデルを提示する。

〈展開例①〉

御言葉に聞き従い、御言葉を行う人になりなさいと教えられました。みんなの周りには、そんな立派な人はいるかな？ 一人だけいらっしゃるね。イエス様です。フィリピの信徒への手紙2章1～11節にも、イエス様を模範としなさいと教えられています。

「イエス様なら、こんな時どうするかな？」そう考えると、みんなの毎日の生活も変わってくるよ。教会の牧師さんや長老さん、教会学校の先生たちも、みんな罪深くて全然完璧じゃないけど、イエス様のようになりたいと願いながら一生懸命生きています。そんな大人たちのいい所も悪い所もよく見つめて考えてください。

〈ねらい②〉

自己吟味をすすめ、新しい服従を促す。

〈展開例②〉

みんなは今日の御言葉を聞きながら、胸に迫ってくるものはなかっただろうか。自分は御言葉を行うことができていないな、イエス様のようになれないなと、しょんぼりしてしまった人もいるかもしれない。御言葉を完全に行うことは、罪人にはできません。そういう自分のダメさをしっかり知ることが人間には必要です。でも落ち込む必要はないよ。

もしあなたの心の中に、「イエス様のようになれたら……」という思いが少しでもあることが確認できるなら、あなたは確実に聖霊にとらえられています。そして変えられつつあるのですよ。今は御言葉を行うことがまるでできなくても、少しずつ少しずつ、イエス様に似せられて、御言葉を行う人になっていくのです。あなたの中で、そんな素晴らしいことがもう始まっているのです。

できるだけ怒らないようにする。人を傷つけない。困っている人のお世話をする。人を差別しない、分け隔てしない。友だちを冷たく裁いたりせず、憐れみ深くゆるしてあげる……ヤコブの手紙に書かれていることは、耳の痛いことばかり。でも一度やってみればいい。好きになれそうもない人を、好きになる努力をしてみるといい。きっと、できないでしょう。でもそうやって失敗してはじめて、神様が自分のことをどれだけ愛してくださったのかも、よく分かってくるのですよ。私たちは怒られて裁かれて当たり前だったのに、神様は赦してくださいました。わたしにはとてもできないことを、神様はわたしにしてくれたんだね。

〈祈り〉

神様、御言葉に聞き従うことができるようにしてください。イエス様のように、あなたを愛することができるようにしてください。人を愛することができるようにしてください。わたしは御言葉を行うことができない罪人です。でも、そんなわたしを愛してくださる、あなたの愛にこたえることができますように。

10月11日　「御言葉への聴従」　　小学科上級

〈ねらい〉

神のみことばは、ただ聴くことだけではなく、従うことが求められているということを学ぶ。

〈展開例〉

今日の礼拝の中でわたしたちが学んだことは、「御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません」ということでした。神さまのみことばを聴いた人には、それを行うことが求められているのです。

聖書には、たとえば「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」（ヨハネによる福音書15：12）というイエス・キリストのみことばが記されています。

このみことばを読んだときに、わたしたちがもし、「こんなことをイエスさまがおっしゃったようだけど、私には大嫌いな人が何人もいる。あの人もこの人も許せない。みんな悪いやつらだ。あんな人たちを愛することなんて、私には絶対に不可能だ」と言い張るとしたら、イエスさまの命令に背いていることになります。どう考えても今すぐには無理だと感じることはあるでしょう。無理なことを無理やり行うと、自分が苦しくなるだけでしょう。そのようなわたしたちの側の我慢の限界については、イエスさまはよく分かっておられます。

しかし、です。イエスさまがお命じになる愛を実践することは「今すぐには」無理であるとわたしたちが感じることと、だからわたしたちが愛を実践することはそもそも無理なことだと語ることは、別の話です。

この違いについては、わたしたち人間はなぜこのような（長い）人生を送っていかなければならないのかを考えると理解できるようになるでしょう。わたしたちはこの人生のなかで「今すぐには」できないと感じることであっても、それはきっと「将来的には」できるように（神さまによって）していただけるにちがいないという希望をもって生きています。ちょうどそれは、子どものときにはできなかったことが大人になったときにできるようになったということがたくさんあるのと同じです。わたしたち人間は人生の時間の中で成長していくのです。昔はできなかったことが、できるようになるのです。

「私は他人を愛することができない」ということで悩んでいる大人の人もいます。その人の話をよくよく聞いてみると「子どもだった頃に親から愛された思い出がない」とか「親や兄弟や学校の同級生や先輩からいじめられていた」ということを打ち明けられることがあります。皆さんも同じでしょうか。

なるほど、その人たちの言い分はよく分かるものです。親や他人からの愛情を感じたことがない人は、自分以外の人をどのように愛すればよいかが分からない、だから私は他人を愛することができないのだというのは、デタラメではなく本当の話です。

しかし、それで終わりにしてよいでしょうか。私はそうは思いません。この世の中には不幸な人はたくさんいますし、誰からも愛されたことがないという事実に苦しんでいる人もいます。しかし、その人々に私が言いたいことは、そのあなたのことを、天の父なる神さまは、愛してくださっています、だから「私は“だれからも”愛されたことがない」とは言わないでください、ということです。わたしたちの神さまは現実に生きておられる方であり、そのような方として、今ここに生きているわたしたちを現実に愛してくださっているのです。

そして、神さまの愛を知ることができた人は、親からも誰からも愛されたことがないときでも、他の人を愛することができるようになるのです。ですから、どうか愛することをあきらめないでください。

〈お祈り〉

神さま、どうか、あなたのみことばを聴いて行なうことができる人間にならせてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

10月11日　「御言葉への聴従」　中学科

〈ねらい〉

〇御言葉の持つ力について学ぶ。

〇御言葉を聞くだけの者とそれを行う者の違いについて学ぶ。

〈展開例〉

質問１　19節でヤコブは何と命じているか。

質問２　自分自身はそれを守れていると思うか。

質問３　21節で御言葉は何をする力があると書かれているか。

質問４　22節ではヤコブは何と命じているか。

質問５　御言葉を聞くだけの者とそれを行う者の違いはどのようなことであると書かれているか。

まとめ

私たち人間は、ここで勧められている戒めとはいつも逆のことをしてしまう愚かな者たちである。私たちは、聞くのに遅く、話すのに早く、怒るのに早い。ヤコブは、人間の怒りは神の義を実現しないものであると言う。人間は、怒りの中でたやすく罪に足をからめとられて、神の義を実現するつもりでいながら、その実、悪魔の思うつぼにはまり、するつもりもなかった他の罪まで犯してしまう。ヤコブは、ここでそうした心に満ちる悪を捨てて、御言葉に従うよう私たちを招く。神の御言葉には、私たちの魂を救う力がある。さらにヤコブは、御言葉をただ聞くだけの者にならずに、従う者になるようにと勧める。御言葉を聞くだけの者は、鏡に自分の姿を映して立ち去るようなもので、自分自身の欠けが鏡によって示されても、それを変えることをしないで、そのうちそれさえも忘れてしまって、何の霊的成長もしない。それに対し、御言葉を行う者は、戒めを一心に見つめて、それを守る者に似ている。その人は、全神経を集中させて戒めを見つめ、それを守ろうと最善の努力をする。そうした人は、霊的に大きく成長し、神からの豊かな祝福に与る。パウロが言うように、救いそのものは、私たちの行為に何の関係もなく、神から一方的に無償で与えられる恵みであるが、ヤコブが言うように、その神から与えられた救いが真実なものであるならば、必ず御言葉を守るという形になって外に現れ、実を結び、その人の内外に神の祝福を及ぼすものになっていく。私たちも心を尽くして神の御言葉を守る者にさせていただきたい。

〈祈り〉

神様、救いの恵みを私たちに与えてくださって、ありがとうございます。私たちがあなたに救われた感謝をもって、心を尽くして御言葉を守ることができるようお助けください。それによって、私たち自身がいよいよイエス様に似た者と変えられ、周りの人々にあなたを証しする者とさせていただくことができるようお導きください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。

10月18日　「礼　典」　　聖書研究

テキスト　　ルカによる福音書　24章13〜35節

今日学ぶ聖書箇所と10月4日「生ける神の御言葉」の聖書箇所は同じなので、10月4日の「聖書研究」も参照してください。

〈二人の弟子への顕現（24:13〜35）〉

前々回学んだように、クレオパともう一人の弟子が、エマオの村へ歩きながら一連の出来事について話し合い論じあっていたとき、イエスご自身が近づいてきて、一緒に歩き始められた。「しかし二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった」（24:16）とあるように、その時点では、神によって隠されていた、と考えられる。そのような認識は自然な認識力ではできない。著者ルカはその緊張感を読者に与えつつ、物語の後半で次のように記している。主は「パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった」（30）、「すると、二人の目が開け、イエスだと分かった」（31）。これがこの物語のクライマックスである。

当時、イスラエルはローマ帝国の支配下に置かれていた。ユダヤ人は、そのような状況の中で、旧約聖書で約束されていたメシアを熱烈な思いで待望していた。それは、ローマ帝国からイスラエルを解放し王国を建て上げる強い政治的なメシアへの期待であった。ナザレのイエスは「行いにも言葉にも力ある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長や議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです」（19, 20）という言葉に、彼らの主イエスに対する絶大な期待と、それにもかかわらず死んでしまわれたことに対する深い失望感を感じ取ることができる。メシアが死ぬということは考えられないことだった。それだけに困惑し、また「イエスは生きておられる」という天使の御告げも単純に信じられなかったであろう。

主はそのような彼らに旧約聖書を説き明かされた。メシアに起こった苦難と死と復活は、まさに旧約聖書に預言されており、それは起こるべくして起こった預言の成就である。

〈主の食卓への招きと弟子の認識（24:28〜35）〉

エマオの村に近づいたとき、主はなおも先へ行こうとされる様子であったが、彼らは「一緒にお泊まりください」と引きとめた。それこそ主の御心であった。主はその願いを聞きいれ、共に家の中へはいられた。そして一緒に食事の席についたとき、客人であるイエスが主人の役割を果たされ、パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて二人の弟子にお渡しになられた。そのとき弟子たちの目が開かれ、主イエスであると分かった。そして主の姿は見えなくなった。二人の弟子への顕現はこの時点で目的を達した、と言える。彼らとの晩餐における主の一連の行為は、最後の晩餐の時と同じである（22:19、ただし、この二人の弟子は十二弟子ではないのでその場にいなかった）。五千人養いの奇跡の中でも主は同じやり方で、パンを弟子たちに渡された（9:16）。彼らが他の弟子たちに「パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった」（35）、と話したように、その行為が彼らの認識と関係があったと考えられる。

復活の主に出会った喜びは、彼らをそこに留めてはいなかった。宿泊の計画を変えて、時を移さずエルサレムに戻った。一刻も早く他の弟子たちに知らせるためであった。エルサレムに戻ってみると、11人と他の弟子たちは、「本当に主は復活してシモン（ペトロ）に現れた」と言っていた。復活の主はそのようにたびたびご自身を現され、ご自身が生きておられるメシアであることを示された。そして弟子たちの信仰は強められていった。

復活の主は、今も御言葉とその説教を通して、また教会の礼典を通してご自身を現してくださり、私たちの信仰を強めてくださる。主のご臨在がまさにそこにあり、復活の主との出会いを体験するからである。　　（後藤公子）

10月18日　「礼　典」　　カテキズム研究

カテキズム　子どもカテキズム　問71

子どもカテキズム
問71　礼典とは何ですか。
答　洗礼と聖餐です。
神様は、聖霊のお働きによって、目に見える物を用いて、
私たちをイエスさまと一つに結び合わせ、教会の枝としてくださるのです。
キリストの祝福のすべてを受けていることを表し、保証し、しるしづける、
目に見える御言葉です。
参考教理問答　ウ小教理91〜93、ハイデルベルク66〜68

〈洗礼と聖餐です〉

ローマ・カトリック教会では七つの礼典を主張します。しかし、主イエスが直接御言葉において制定された新しい契約の礼典は、「洗礼と聖餐」の二つだけです（マタイ28:19、26:26〜28を参照）。聖書に規定されていない方法で神を礼拝することは誤りです。「洗礼」と「聖餐」にはそれぞれの恵みがあり、大きな相違点もありますが、十字架と復活の主イエス・キリストと「一つに結び合わ」されるという『霊的結合』の確信を強化していく点で共通しています。またキリストとの霊的結合は、すなわちキリストの体である教会との結合ですから、私たちそれぞれが「教会の枝」であるという事実が、礼典を通していよいよ強く想起させられるのです。

〈目に見える御言葉〉

私たちを信仰と悔い改めに導いてくれる恵みの手段は、御言葉と礼典と祈りであると先に確認しました（問66〜68）。しかし、礼典は信仰を生み出す役割は持っていません。それは、御言葉の説教の役割です。礼典は、御言葉によって生み出された信仰を増進し、強化し、堅固にするために、その本来の役割を果たします。それは、救いの約束を聞くだけでは確信を保ち得ない、私たちの信仰の小ささ弱さを憐れんで、神が与えてくださった「見える御言葉」です。御言葉によって約束された「キリストの祝福のすべて」という内的霊的な見えない恵みがあります。神はそれを、水やぶどう酒やパンという「目に見える」外的感覚的なしるしを用いることで、『これほどに救いは確実なのだ』と「表し、保証し、しるしづけて」くださるのです。このようにして神は礼典を通して、私たちの揺れ動く信仰に配慮してくださり、確信を強化してくださいます。その憐れみが満ちています。ですから、私たちもまた、礼典に際し、聖霊により頼んでいよいよ『霊の目』を開いていただいて、聖霊においてそこに臨在される生けるキリストを、その十字架の犠牲と復活の栄光を、そして約束された再臨の日の祝宴を、はっきり『見る』ことに思いを集中したいものです。「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです（ヘブライ11:1）」。　（坂井孝宏）

10月18日　「礼　典」　　説教展開例

テキスト　　ルカによる福音書　24章13〜35節
カテキズム　　子どもカテキズム　問51、52

〔単元のねらい〕

教会学校にだけ参加する子どもたちにとって、礼典は恐らく未知であろう。以後の礼典のお話を通じて、礼典が行われる大人の礼拝式への参加を促すことも可能であろう。百聞は一見にしかず。また、洗礼を受けるのにふさわしい年齢の子どもたちに対しては、主御自身が、何よりも洗礼、そして洗礼に続く聖餐へと招いていらっしゃることを愛をもって伝えたい。

「イエス様が一緒に歩んでくださることのしるし」

愛する子どもたち、おはようございます。

先々週、エマオという村に向かう二人のお弟子さんたちに、復活なさったイエス様がお会いくださったことが書いてある聖書の箇所からお話をしました。今朝は、もう一度、同じ箇所からのお話となります。

最初、エマオへと向かう二人のお弟子さんたちは、近づいておいでになって一緒に歩まれたのがイエス様だとは分かりませんでしたね。だけど、エマオへと向かう途中、イエス様が、聖書全体から、御自分について書かれていることをこのお弟子さんたちに説明なさると、二人の心は次第に熱くなっていったのでした。エマオの近くまで来ると、既に太陽も沈みかけていたので、お弟子さんたちは、一緒にお泊まりくださるようにとイエス様にお願いしました。それで、イエス様は、お弟子さんたちと一緒に泊まることになさいましたが、食事の席に着かれて、パンを取られ、賛美の祈りをなさって、パンを裂いてお弟子さんたちに渡された時、「すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった」(31節）のでした。この時、二人の心から不信仰が完全に取り除かれて、イエス様の復活を信じることができるようにされたので、目の前のお方がイエス様だと分かったのですが、彼らは、パンを取られ、賛美の祈りをなさって、パンを裂いて渡されるという、イエス様の仕草を見ることでも、目の前のお方がイエス様だと分かったのだと思います。この二人は、いったい、いつ頃から、イエス様に弟子入りして、従うようになったのでしょうか？　よく分かりませんが、イエス様といつも一緒に食事をして、その時のイエス様の仕草が心に焼き付いていたのだと思います。

さて、今朝、特におぼえてもらいたいのは、イエス様がお弟子さんへと、さらにやがて誕生して世界中に広がって行く教会へと、行うようにと命じられた、二つの礼典のことです。礼典というのは、イエス様が一緒におられ歩んでくださることの目に見えるしるしです。そういう礼典として、イエス様は、二つ、定められました。洗礼と聖餐です。まず、洗礼の礼典では、イエス様を信じて従うことへと導かれた人の頭に、あるいは、イエス様を信じる人に与えられた赤ちゃん（子ども）の頭に、牧師先生が手で水をすくって、かけることをします。キリスト教会の中には、頭に水を注いだり、教会堂の中にある浴槽みたいなところとか海とか川とかで水の中に浸かったりするところもあります。そして、聖餐の礼典では、パンを食べたり、ブドウの実で作った飲み物を飲んだりします。みんなの中には、教会学校だけの出席というお友だちもいるので、言葉で説明されても、あまりピンと来ない人もいるかも知れませんね。ですから、そんなお友だちは、大人の礼拝式で洗礼とか聖餐の礼典が行われる時、出席してみて、よく見てくだされば と思います。再来週の日曜日には、大人の礼拝式で聖餐の礼典を行うので、出席

して、どんなことが行われるのか、よく見てみると良いでしょう。

ところで、二人のお弟子さんたちが、イエス様の食事の仕草を見て、イエス様だと分かったように、洗礼や聖餐の礼典では、「目に見える物」をよく見ることがとても大事なのです。たとえば、洗礼では、頭から水がかけられる（注がれること）様子、聖餐では、牧師先生がパンを裂いて、杯を取って、役員の方にそれぞれのお皿を手渡し、それが配られるという様子をじっくり見ることが大事です。どうしてかと言えば、礼典で用いるように定められている「目に見える物」は全て、十字架の死からよみがえられたイエス様を指差しているからです。そうするならば、イエス様がまさに私の罪の赦しのために十字架で死んでくださって、肉体裂かれ、血を流して、死んでくださったこと、さらに私のよみがえりと永遠の命のために十字架の死からよみがえられて、今も生きて働いておられ、一緒におられて歩んでくださることが、よく分かるようにされるのです。

でも、この礼典でも、一番大事なことは、まずイエス様の御言葉に聴くことです。二人のお弟子さんたちは、イエス様が、聖書全体から、御自分について書かれていることを説明なさることで、不信仰がだんだんと取り除かれて行って、イエス様の食事の仕草を見た時に完全に取り除かれて、イエス様の復活を信じることができるようにされました。ですので、礼典では、まず何よりも、イエス様が礼典をお定めになった時の御言葉（制定の御言葉）が、牧師先生によって読まれます。今、その御言葉に聴いてみましょう。

洗礼では、「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ28:18～20）。

聖餐では、「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。『取って食べなさい。これはわたしの体である』。また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。『皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。言っておくが、わたしの父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい』」（マタイ26:26～29）。

これらの御言葉にまずしっかり聴いて、行われていることをじっくり見るならば、聖霊なる神様のお働きによって、本当に豊かな祝福を受け取ることができるのです。イエス様が一緒におられ歩んでくださるという、本当に豊かな祝福です。それで、礼典も、やはり、御言葉中心ですから、よく、「目に見える御言葉」と呼ばれています。

さあ、みんなの中にも、イエス様を信じて従いたいという思いがもう既に与えられているお友だちがいるかも知れませんね。あるいは、やがてそういう時が来ることでしょう。そういう時が来たら、ぜひ、牧師先生に願い出て、洗礼を受ける準備をしてください。そして、洗礼を受けてください。そうしたら、イエス様がいつでもどこでも共におられ歩んでくださる、長い長い人生のスタートです。よく、信仰生活は、長距離走、マラソンにたとえられますが、ゴールは天国です。ゴールするまで、疲れ果ててリタイアしないようにと、イエス様は、日曜日ごとの礼拝、特に聖餐の礼典を定めてくださったのです。ここにいるみんなが洗礼に導かれて天国を目指すことを、先生はもちろんですが、誰よりもイエス様が願っておられることをおぼえてください。　（長谷川潤）

〔今週の暗唱聖句〕　ルカによる福音書 24章30、31節

一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、
パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かった。

10月18日　「礼　典」　　幼稚科

〈ねらい〉

物語を通して、イエスさまがパンをさいてひとりひとりにそれをお渡しくださったとき、目が開けてイエスさまだと分かったことを知る。

〈展開例〉

物語（絵本）の読み聞かせ（119ページ参照）。

場面ごとの対比を強調するため、見開きのページを最初から見せないで、お話に合わせて開くと良い。

【エマオへの道】

省略。

【ポイント】

目に見えるもの（洗礼・聖餐）を用いて、イエスさまはわたしたちの目を開いてくださる。

〈暗唱聖句〉

「すると、二人の目が開け、イエスだと分かった」

ルカによる福音書24章31節

〈お祈り〉

てんのおとうさま。せいしょだけではなく、目に見えるように洗礼や聖餐の恵みをくださってありがとうございます。わたしたちも、神様のみこころのとおりに、洗礼（信仰告白）を受けることができますように。イエスさまによって、アーメン。

☆絵本について☆

〇掲載しているサイズは、B5用紙を縮小したものです。

〇実際には、B5サイズの厚紙に両面コピーをして、色をぬり、綴じ線をホッチキスでとめて作成します。

〇絵本の番号数字は、物語の丸数字に対応しています。

10月18日　「礼　典」　　小学科下級

〈ねらい①〉

礼拝における礼典の位置づけを確認し、関心を促す。

〈展開例①〉

礼拝ではどんなことをするかな？（子どもたちに自由に挙げてもらう）お祈り、御言葉の朗読と説教、賛美歌、献金、信仰告白、報告……etc。子どもの礼拝ではやらないことも色々あるね。聖餐式と洗礼式も、子どもの礼拝では行われないですね。洗礼式は、洗礼を受ける人がいなければ行われないけど、聖餐式はだいたい月に一回行われていますね。毎週行われている教会もあります。これは信仰告白した陪餐会員でないと参加できないのですよ。

〈ねらい②〉

説教の補助として、「見える御言葉」が与えられている恵みを覚える。見えないものに信頼することに貧しい、私たちの弱さをも考える。

〈展開例②〉

皆さんの多くは目が見えると思います。想像してみてください。あなたは目が見えません。でもパーティーのために、とてもきれいな洋服を着させてもらいました。ハンサム（美女）なあなたの素敵な格好を見て、周りの人たちは「素敵だねー」「あこがれるわー」といっぱい声をかけて、写真を撮ってくれます。でも目が見えないあなたには、自分の姿が見えません。あなただけが、自分がどれだけ素敵なのか見えないのです。あなたならどうでしょう？ それでも、ほめられて喜べるでしょうか？

……そんな具合に私たちは、どれだけ言葉で教えてもらっても、目で見たり、体で体験してみたりしないと、どうしても心もとないものです。今日の御言葉に出てきた二人の弟子もそうでしたね。「イエス様は十字架にかかられたが、復活して栄光に入られた」。このすばらしい知らせをすでに聞いていたのに、喜ぶことができない。イエス様がいっしょに歩いてくださって、食事をしてくださって、ようやく二人は、本当にすばらしい出来事が自分たちに与えられたのだって、気付いたわけです。

礼典というのは、そんな弱い私たちのために、イエス様が与えてくださった「見える御言葉」なんですよ。（その後の展開は、筆者が担当したカテキズム研究を参考にしてください。）

〈祈り〉

神様。信仰の弱い私たちのために、礼典を与えてくださってありがとうございます。私たちの信仰の目を開いて、イエス様がいつもいっしょにいてくださることを、はっきり見させてください。そして私たちも礼典に参加できるように、確かな信仰を与えてください。

10月18日　「礼　典」　小学科上級

〈ねらい〉

礼典、とくに聖餐式の意義を学ぶ。

〈展開例〉

先々週の日曜日にわたしたちが学んだ聖書の個所には、エルサレムからエマオに行く途中の弟子たちの前に復活なさったイエス・キリストが現れてくださったという話が出てきました。そして、そのイエスさまと弟子たちが同じ宿にとまったときに、イエスさまがパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを割いてお渡しになるということをなさいました。そのとき弟子たちは、彼らと共におられるその方はイエスさまであると分かったのでした。

この「パンを割いて弟子たちに手渡すこと」を、今のわたしたちの教会でも行っています。礼拝の中で行うあの聖餐式です。

日曜学校の皆さんの中には、聖餐式の様子をまだ見たことがないという人もいると思います。聖餐式で配られるパンとぶどう酒は、イエス・キリストを救い主と信じる信仰を告白している人々だけが取って食べることができるものです。しかし、洗礼を受けていない「求道者」と信仰を告白していない（幼児洗礼を受けている）「未陪餐会員」は、聖餐式の様子を見守ることができます。まだ見たことがない人たちには、実際にどんなことがなされているかをぜひ見ていただきたいと願っています。

そして、見たことがある人には、あのパンとぶどう酒が配られ、教会のみんながそれを食べたり飲んだりしているときにどんなことを感じたかを質問したいです。ぜひ教えてください。

配られるパンとぶどう酒は、どちらも小さいものです。なかにはとても大きなパンを配っている教会もあるようですが、大きさは関係ありません。お店で買ってきたパンか、自分の家や教会で焼いたパンであるかも、関係ありません。味はおいしいほうがいいに決まっていますが、贅沢な材料が使われている必要はありません。安くて、貧しくて、まずいパンでも構いません。ぶどう酒も同じです。お酒でなければならない理由はありませんし、お酒が苦手な人や未成年の人への配慮からぶどうジュースを使っている教会もたくさんあります。

大切なことは、もう一度言いますが、イエス・キリストを救い主として信じる信仰があなたの心の中にあるかどうかです。信じる心を持たず、洗礼を受けないままで聖餐式のパンとぶどう酒を食べたり飲んだりしても、何の意味もないのです。

しかし、信仰をもって聖餐式に参加するときには、大きな慰めと励ましを神さまから与えられます。それは本当のことです。聖餐式のたびに牧師が読む言葉は、「これはわたしの体です」「これはわたしの血です」というイエスさまのみことばです。イエスさまはそのみことばを、十字架にかけられる前の夜、弟子たちにパンとぶどう酒を手渡されながら言われました。そのときイエスさまがおっしゃりたかったことは、このわたしの命をあなたがたに与えるということです。イエスさまは、愛する弟子たちのために、御自身の命をささげてくださったのです。

そして、とても大事なことは、イエスさまが愛してくださったのは、今から二千年前の弟子たちだけではなく、その後の長い歴史のなかでイエスさまを信じる信仰をもって生きてきたすべての人たちでもあり、またこれからイエスさまを信じて生きていこうとしている人たちでもある、ということです。つまり、その中には、ここにいるわたしたちも含まれているのです。

ですから、聖餐式のたびにわたしたちが知ることができるのは、イエスさまの深い愛です。わたしたちはイエスさまに愛されているのです。

〈お祈り〉

神さま、わたしたちも聖餐式に参加することができるように、イエスさまを救い主と信じる信仰をお与えください。イエスさまの御名によって、アーメン。

10月18日　「礼　典」　中学科

〈ねらい〉

〇二つの礼典とは、何を指しているかを理解する。
〇礼典は、何のために私たちに与えられたものであるかを理解する。

〈展開例〉

質問１　子どもカテキズム問71によると、礼典とは何であると書かれているか。

質問２　洗礼式では、どのようなことが行われるか。

質問３　聖餐式では、どのようなことが行われるか。

質問４　何のために神はこうした礼典をお定めになったのか。

質問５　エマオ途上を歩いていた二人の弟子たちとイエスが泊まられた宿屋でイエスが讃美の祈りの後でパンを裂かれた時、何が起こったか。

まとめ

カテキズムでは、礼典と呼ばれるものは、二つであるとある。カトリック教会では、七つとされているが、イエス御自身がお定めになった礼典は、洗礼と聖餐の二つのみである。洗礼においては、受洗希望者の上に水が注がれ（浴槽のようなところに全身を浸す教会もあるが）、罪の赦しと神の体なる教会への受け入れが宣言される。ここでは、水というものが、神が罪を洗い流しきよめてくださるという象徴的な意味を担っている。また、聖餐式においては、パンとブドウ液が配られ、教会の信者がそれを食べることによって、イエスと結び合わされて一つの体とされたことを体感する。ここでは、パンは、イエスの十字架上で裂かれた体、ブドウ液は、流された血を表している。私たち人間は、抽象的な話ではなかなか心から納得することができないし、一旦理解したと思っても、時が経てば忘れてしまう存在である。礼典は、こうした私たちが、何度も体の五感を使って神の恵みと契約を思い起こすために、神が制定してくださったものである。目の前にある水やパンやブドウ液を見たり、触れたり、嗅いだり、味わったりしながら、私たちは、「なるほど、この目の前にある物と同じくらい確実に神様は私たちを救ってくださるのだ」と確信するのである。イエスが、二人の弟子たちと共に宿屋で讃美の祈りを唱えパンを裂かれた時に、弟子たちの目は開け、イエスを認めることができた。この時のパンは聖餐式のパンと同じ意味を持っていたと思われるが、パンは、イエスの恵みを弟子たちに理解させる大きな役割をここで果たしたのであった。そのように礼典は、私たちの信仰を強め、支える役目を果しているのである。

〈祈り〉

神様、礼典を私たちのために定めてくださって、ありがとうございます。私たちは、時間が経てば、あなたの恵みをすぐに忘れ、信仰が弱くなってしまう愚かな者であります。どうか、礼典に接するたびに、私たちの弱い信仰を強めて、あなたの救いの恵みにしっかりと確信を持ち続けることができるようお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。

10月25日　「宗教改革」　聖書研究

テキスト　　ローマの信徒への手紙　1章16〜17節

〈福音－神の力〉

「わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです」(1:16)。

パウロは、わたしは福音を恥としないと言います。なぜ彼はわざわざこのような言いかたをするのでしょうか。それは、そもそも福音が恥である、この世にとっては恥であるということがあるからではないでしょうか。

パウロは別の手紙では、十字架の言葉は愚かであるとも語ります。けれども、その「十字架の言葉こそ「神の力」だと、そこでも語っているのです（コリントー1:18)。

人が自分の力で自分を救うことができると考えているうちは、福音はわからないのです。また救いにおいて自分も神の手助けができると思っているうちは、やはり福音はわからないでしょう。なぜなら福音は「神の」力だからです。

福音において示された神の力は、神の子イエス・キリストが歩まれた道をわたしたち自身もまた歩むことによって、すなわち私たち自身も弱く、貧しく、無力になることによってはじめて見出すことのできる力です。神はまことに不思議なことをなさるお方です。実に神はこの世が恥とし、つまずかざるを得ない十字架の言葉のうちに、命と自由の道を用意されたのです。

〈福音－神の義〉

「福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。『正しい者は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」(1:17)。

人はイエス・キリストを信じる信仰によって義とされます。自分の力で義なる者となるのではありません。自分が神の前に、神のためになした何ごとかを認めてもらうというのでもありません。神がわたしたちのためになしてくださったみわざによって、神の恵みによって義としていただくのです。従って信仰によって義とされるということは、ただひたすらに恵みによって義とされるということを意味しています。

17節の「神の義」とは能動的な義ではなく、受け身の義です。福音の中に神の義が啓示されたとは、福音において無価値な者をただ信仰によって義としてくださる、神の受け身の義があきらかにされたということです。「神に従う人は信仰によって生きる」（ハバクク2:4）のです。

神の義とは人がみずから獲得しなければならないものではなく、人が神から譲り受ける義なのです。イエス・キリストは十字架に死んで、わたしたちの身代わりに罪の報酬を支払われることによって、神の前に義と認められました。そしてキリストはご自身がかちとられた義を、無力な罪人にそのままプレゼントしてくださったのです。上等の上着を着せてくださるようにして、わたしたちにまとわせてくださったのです。そして、これをあたかも私たち自身がかちとった義であるかのように見なしてくださったのです。

神はひとり子イエス・キリストを通して、わたしたちが救いを受けることに必要なすべてをなしとげてくださいました。わたしたちはこの大いなる贈り物を感謝して受け取るなら、それでよいのです。マルティン・ルターが発見したのはこの事実です。このことによってルターは神が恵みの神であられることを知りました。そのときルターの魂に、はじめて喜びと平安とがやってきたのです。

（木下裕也）

10月25日　「宗教改革」　　カテキズム研究

カテキズム　ウェストミンスター小教理問答　問33

子どもカテキズム

問33　義認とは、何ですか。

答　義認とは、神の一方的恵みによる決定です。
それによって神は、私たちのすべての罪をゆるし、
私たちを御前に正しいと受け入れてくださいます。
それはただ、私たちに転嫁され信仰によってだけ受けとるキリストの義のゆえです。

人が義とされるのは、神に従うことによってです。人が命を得るのは、律法を守り行うことによってです。しかし、始祖アダムにあって、全人類は律法を守り行うことにおいて無力となりました。わざの契約に背いた始祖アダムにあって、彼の子孫である全人類は罪におち、本来あるべき神との関係、すなわち義なる関係を失いました。その罪による無能力ゆえに、人は律法を守り行うことができません。今や律法すなわち神の言葉は人の罪をあきらかにし、人を死に追いやるほかないものとなりました。

しかし、憐れみ深い神は人を救いに導くために、わざの契約にかわって恵みの契約を立ててくださいました。そしてイエス・キリストはこの恵みの契約を完成し、成就してくださるお方として来たりたもうたのです。恵みの契約における神と人との仲立ちであられるイエス・キリストは、アダムにあって救いにおいて無能力となってしまったわたしたちのために、わたしたちにかわって律法を守り抜くお方として来られたのです。

イエス・キリストはふたつの意味において、わたしたちの代わりに律法のもとにその身を置いてくださいました。ひとつは、律法に従い通されたということです。キリストは生涯にわたって、神のみ言葉、神のみこころに従い通されました。完全に従い通されました。律法の要求を完全に果たされたのです。

ふたつめには、律法の呪いのもとに身を置かれました。つまりご自身は罪なきお方であったにもかかわらず、律法が罪の報酬は死である、罪は命をもって贖われねばならないとの律法の定めに従って十字架にかけられ、死なれたのです。

本来は、このふたつのことはわたしたち自身がなさねばならないことでした。律法を守り行わねばならなかったのはわたしたち自身でした。おのが罪をおのが命をもって贖うことも、わたしたち自身がしなければならないことでした。けれどもイエス・キリストは、それをなし得ないわたしたちにかわって、すべてをなしとげられたのです。そして神のみ前に獲得してくださったご自身の義を、わたしたちに無償で授けてくださったのです。

義とされるとは「今まで罪人であった者が、有効召命を受け、再生され、信仰を与えられてイエス・キリストに結合され、キリストとその救いの恵みを与えられた時起こる、神のみ前に立つわたしたちの地位、身分の変化」（矢内昭二『ウェストミンスター信仰告白講解』）です。わたしたちはイエス・キリストのなしたもうたみわざによって、わざによらず、ただ恵みによって罪ゆるされ、命を得たのです。イエス・キリストを信じる信仰によって、天の法廷において晴れて無罪判決を得たのです。　（木下裕也）

10月25日　「宗教改革」　説教展開例

テキスト　ローマの信徒への手紙　1章16〜17節
カテキズム　カテキズム研究「宗教改革」、子どもカテキズム　問28

〔単元のねらい〕

今回は宗教改革記念日にちなみ、マルティン・ルターの「塔の体験」もおりまぜながら信仰義認について学ぶ。聖書の教える信仰義認の真理は、教会が福音の恵みに生きるにさいして文字通り鍵となる教理である（それは子どもたちにとっても同じである）。恵みの神への感謝と讃美をあらわしつつ、聖書に則して正しく学び取りたい。

「喜びの再発見」

10月31日。何の日か知っていますか。教会のたいせつな記念日です。「宗教改革記念日」といいます。どうぞ覚えておいてください。

今日はその宗教改革という出来事についてお話しします。宗教改革のはじまりは、16世紀のドイツです。実はその頃の教会は、人がどのようにして救われるのかということを聖書の教える真理から離れて、まちがったしかたで理解していました。そしてそういう時代が長く続いていました。そういう有り様であった当時の教会をもういちど聖書の真理にたちかえらせるために起こされたのが宗教改革です。

この宗教改革の口火をきったのがマルティン・ルターという人で、その日が1517年の10月31日だったのです。世界中の教会は、宗教改革によって教会が聖書にかえり、救いの真理にかえったことを心に深く刻んで、この10月31日を覚え続けているのです。

ルターは宗教改革を始めるまでは修道士でした。当時の教会（ローマ・カトリック教会といいます。それに対して、宗教改革によって新しく生まれた教会をプロテスタント教会といいます。わたしたちの教会もプロテスタント教会のひとつです）は、人が救われるためには神さまの前にいろいろな善いことを積んで、その自分の善い行いによって神さまにあなたは正しい人だと認めていただくことで人は救われると教えていました。

ルターも神さまに救っていただきたいと心から願っていましたし、神さまによって魂の安らぎを得たいと願っていました。それで、教会が教えるとおりに毎日善い行いに励みました。徹夜でお祈りすることや、断食すること、その他さまざまなことです。そういう修行をすることは苦しみもともないましたが、ルターは救いをいただくためならと苦しみに耐えました。

そのような修行を続けるなら、きっと神さまは自分の魂に安らぎを与え、喜びで満たしてくださるにちがいないとルターは信じていました。ところが、厳しい修行をかさねるたびに、かえってルターの心には平安がなくなり、悩みが深まりました。なぜなら、神さまに喜ばれようとする努力の中に、自分を自慢し、ほかの人を見下げるみにくい心があることに気づいたからです。

ルターは神さまが正しいお方であるということを深く恐れるようになりました。なぜなら、神さまの正しさは100パーセントの正しさです。けれども自分は正しくありません。生まれながらにみにくい心、きたない心を持っています。それなのに、神さまの100パーセントの正しさにまで自分の足でのぼりつめていかなければならないとしたら、そして、それができなければ救われず、神さまの刑罰を受けて滅びなければならないのだとしたら、これほどつらいことはありません。神さまは愛のお方、恵みのお方だと思っていたのに、神さまはわたしを責めたて、ついには滅ぼしてしま

われるためにわたしに近づかれたのだろうか。そのように考えて、ルターはとうとう深く絶望してしまったのです。

けれども、神さまはルターに聖書の救いの真理を示してくださいました。

ルターは修道士であるとともに聖書を教える先生でもありました。その日、ルターはいつものように聖書を調べていました。そしてひとつの発見をしたのです。

ルターが調べていたのは、使徒パウロが書いたローマの信徒への手紙の1章です。パウロはそこで、人間を救う正しさについて書いています。ルターが発見したのは、パウロの言う、この正しさとは、人間が自分でかちとらなければならない正しさのことではなく、イエスさまが父なる神さまのみ前にお立てになった正しさのことであったということです。

その時までは、みんなが、この正しさとは人が自分で立てなければならない正しさだと思っていました。世界中の教会がそのように教えていました。

しかし、そうではありませんでした。この正しさとは神さまがイエスさまのみわざをとおして、わたしたちにプレゼントしてくださる正しさのことであったのです。

わたしたちは生まれながらに罪人です。しかしイエスさまは、わたしたちの罪の身代りとなって十字架の上に死なれました。このイエスさまの贖いの血潮によって、神さまはわたしたちを無罪としてくださったのです。

それだけではありません。生まれながらに神さまの御言葉を守り行うことのできないわたしたちのために、イエスさまは神さまの御言葉に100パーセント従い通されました。イエスさまこそ、ただおひとり完全に正しいお方です。イエスさまは、ご自身がかちとられたこの正しさを、わたしたちの正しさとしてくださり、ちょうど上着を着せてくださるようにして、わたしたちにまとわせてくださったのです。

そのように、わたしたちが神さまの前に正しいとされ、神さまと和解して救われるために、イエスさまはすべてのことをなしとげてくださいました。それゆえにわたしたちは何もしなくてよいのです。ただイエスさまの救いの恵みを感謝しておしいただいたならよいのです。

そのことを知って、ルターは神さまが愛と恵みの神さまであることを再発見しました。その肩から重荷は取り除かれ、自由にされました。ルターは、文字通り、イエスさまにある新しい人として生まれ変わったのです。苦行をやめ、修道院を出て、家庭を築き、神さまの恵みをほめたたえるたくさんの歌をつくりました。

この福音の再発見は、ルターひとりを救っただけではありません。世界中の人々をイエスさまの救いの恵みと自由のもとにときはなつことになったのです。わたしたちも今、同じ恵みと喜び、また自由のもとにあるのです。聖書の真理に生きることはすばらしいことです。　　（木下裕也）

〔今週の暗唱聖句〕　コリントの信徒への手紙 一 1章18節

十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、
わたしたち救われる者には神の力です。

10月25日　「宗教改革」　幼稚科

〈ねらい〉

生まれながらに罪人のわたしたち。そのわたしたちのかわりに、イエスさまが十字架にかかって死んでくださり、わたしたちを神様の子どもとしてくださった。そのことを感謝し、神様を讃美する。

〈展開例〉

絵を見せながら（121ページ参照）、お話しをし、イエスさまによって、神様の子どもとされていることを知る。

はじめに、神様は、天と地をお造りになりました。そして、ご自分に似せて人を造りました。男の人と女の人です。その名前は……

①アダムさんとエバさん。神様は、アダムさんにひとつだけ大事な命令をしていました。「園の真ん中にある“善悪の知識の木”の実は、ぜったいに食べてはいけない。食べると必ず死んでしまう」。ふたりは、はじめは神様の命令を守って、神様の作ってくださった本当にすばらしい“エデンの園”というところで、毎日、楽しくくらしていました。

②ところがある日、蛇がやってきて、エバさんに言いました。神様が食べてはいけないと言われた“善悪の知識の木”の実を食べても、決して死んだりしないさ」。エバさんは、そう言われたら、なんだかその木の実がとってもおいしそうに見えてきました。

③そして、とうとう命令をやぶり、その食べてはいけないと言われていた実を食べてしまいました。いっしょにいたアダムさんもエバさんからその実をもらい、食べてはいけないと言われていたのに、食べてしまいました。

アダムさんとエバさんは、神様のたったひとつの命令を守ることが出来ませんでした。そして、そのアダムさんとエバさんの子どもの子どもの、そのまた子どもの……人間はみんな、生まれたときから、神様の御言葉を守り、行うことが出来ないものとなりました。

みんなも、まだ小さいけれど、神様の言われたとおりに出来ないことがあると思います。イエスさまは、「わたしがあなたにしたように、だれにでもやさしくしなさい」と言われるけれど、いじわるしたくなったり、やさしく出来ないときもあるんじゃないかな？　このままでは、天国へ行けません。どうしたらよいのでしょうか？　そのかわりに、いっぱいいっぱい善いことをしたら天国へ行けるのでしょうか？

④……いいえ。行けません。神様は、このままでは天国へ行けないわたしたちに、神様のひとり子のイエスさまを送ってくださいました。

⑤そして、このイエスさまが、わたしたちの罪を全部背負って、十字架にかかり、神様の罰を受けて死んでくださいました。

そのことによって、わたしたちの罪は全部ゆるされました。イエスさまが、わたしのかわりに十字架にかかって死んでくださったことを信じるお友だちは、イエスさまの白い衣を着て、神様の子どもとしてずっと生きていける道を作ってくださったのです。神様ありがとう。

【讃美】

プレイズワールド（いのちのことば社）
14番「イエスさま、ごめんなさい」

〈暗唱聖句〉

「わたしは福音を恥としない」
ローマの信徒への手紙1章16節

〈お祈り〉

てんのおとうさま。このままでは、天国へ行けないわたしたちに、イエスさまの白い衣を着せてくださってありがとうございます。うれしいです。いつも、イエスさまのこと忘れないでいさせてください。イエスさまによって、アーメン。

10月25日　「宗教改革」　小学科下級

〈ねらい①〉

年号の確認により、自らが立つ教会の歴史の重みを知る。

〈展開例①〉

1517年10月31日が宗教改革のはじまった日だと教えていただきました。その時、日本は何時代？

じゃあ、質問を変えましょう。織田信長が生まれたのは何年でしょう？　正解は1534年です。武田信玄が生まれたのだって1520年。1517年はそれよりも前なんだね。私たちの日本キリスト改革派教会の源流は、そんな昔にさかのぼることができるんですよ。私たちの教会は500年の歴史、もっともっとさかのぼれば、イスラエルがはじまった時から考えて3000年の歴史に耐えてきた教会なんです。

〈ねらい②〉

行為義認のむなしさと、信仰義認の喜びを確認する。

〈展開例②〉

神様の前で、完全であることのできる人は、イエス様以外ひとりもいません。確かに、みんなは素晴らしい子どもたちです。神を愛し、隣人を自分のように愛するという心をもっている。みんなの周りにも、素晴らしいお友だちや大人の方がいると思う。思いやりや正義感にあふれている人も多いよね。でも、神様の前では完全ではありません。本当に素晴らしい人格者ほど、自分には欠点が多いことを知っているものです。説教に出てきたルターのように、自分がよい行いをすればするほど、人を見下したり、裁いたりする心も生まれてきたりする。

行いがどれだけ素晴らしくても、救われません。救われるためには、ただイエス様を信じることです。（正確な信仰義認の教理については、カテキズム研究・説教展開例で確認してください。）ただ信じるだけでいい、そう聞くとずいぶん虫のいい話に聞こえる。でも、それでいいのです。実に図々しい話です。

たとえば凶悪な殺人犯がいました。何人もの子どもたちを無差別に殺しました。先生はその人を赦せそうもありません。ところで、もしその人がイエス様を信じたら、救われるのでしょうか？それほど悪いことをしても、信じるだけで救われるのでしょうか？……先生は、考え込んでしまいます。でも絶対に確かなことは、もしその人が本当にイエス様を信じたのに救いに入れてもらえないとしたら、私だって救いに入ることなど絶対にできないということです。私たちは、それほどの罪人です。そんな私たちが、イエス様を信じるだけで救われるのです。

〈祈り〉

神様。この罪深いものが、イエス様を信じるだけで救われる。感謝します。ありがとうございます。どうかこの私をも救いに入れてください。憐れんでください。

10月25日　「宗教改革」　小学科上級

〈ねらい〉

宗教改革の意義を学ぶ。

〈展開例〉

今日は「宗教改革記念礼拝」でした。礼拝の中ではドイツの宗教改革者マルティン・ルターの話を聴きましたので、分級では別の人を紹介します。フランス生まれの宗教改革者ジャン・カルヴァンの話をします。

今年（2009年）はカルヴァン（1509年7月10日～1564年5月27日）が生まれてちょうど500年になります。そのため、「カルヴァン生誕500年記念行事」が世界中で行われています。このことは、わたしたちにとってはとても喜ぶべきことです。なぜならカルヴァンは「改革派教会」とその中で学ばれ教えられてきた「改革派信仰」の基礎を築いた人だからです。

カルヴァンはフランスに生まれました。大学時代は法律や文学や哲学を勉強し、また「神学」という学問を学びました。そして学者になったカルヴァンが最初に書いた本は聖書やキリスト教とは直接関係ない哲学についての本でした。その本は、ほとんど注目されませんでした。

カルヴァンが「突然の回心」を経験したのは、その売れない本を書いた翌年のこと（1533年頃）でした。そのとき具体的に何が起こったのか、はっきりしたことは分かりません。しかし、そのとき以来、カルヴァンの心を満たすようになったのは「神さまのことば」でした。

そして、カルヴァンはその翌年（1534年）に起こった大きな出来事をきっかけにして、当時のローマ・カトリック教会の人々から憎まれるようになり、スイスに亡命し、各地を逃げ歩く生活をしなければなりませんでした。そして、その2年後の1536年3月、スイスのバーゼルという町で『キリスト教綱要』という本を最初に出版しました。この本はその後5回も書き直されました。書き直されるたびにページ数が増えていき、最後はとても分厚い本になりました。

カルヴァンは『キリスト教綱要』を最初に出版したのと同じ1536年から、スイスのジュネーヴという町の教会で働いていたギョーム・ファレルという改革派教会の牧師の働きを手伝うようになりました。しかし、そのわずか2年後の1538年にはファレルとカルヴァンはジュネーヴの町から嫌われて、市外に追い出されてしまいました。そこでカルヴァンはやむをえず、約半年間はバーゼル、その後三年間はストラスブールに滞在しました。そして1541年、カルヴァンはもう一度ジュネーヴ市に戻ることができました。その後のカルヴァンは、死ぬまでジュネーヴにとどまり、宗教改革を強力に指導しました。

ジュネーヴでカルヴァンは、教会の仕事だけではなく社会の仕事にも取り組みました。社会全体が「聖書の教え」に基づいて成り立つようになることを願いました。

このように見ていただきますと、カルヴァンという人は本当に苦労した人であるということに気づいていただけると思います。カルヴァンは教会の牧師でもあり、たくさんの本を書いた作家（文筆家）でもあり、また、社会の問題に取り組む政治家でもありました。

わたしたちの教会（日本キリスト改革派教会）は、このカルヴァン先生の生き方や教えを大事にしてきた教会です。ヨーロッパやアメリカなどでは「改革派教会」（リフォームド・チャーチ）といえば「カルヴァンの教えを重んじる教会」のことを指して言うほどです。

カルヴァンが書いた『キリスト教綱要』は、小学生には難しすぎて読めないと思いますが、すべてが日本語に訳されていますので、高校生くらいになれば、なんとか読めるようになると思います。ぜひがんばってください。

〈お祈り〉

神さま、今日は宗教改革について学びました。わたしたちの先輩であるルターやカルヴァンの働きを深く知ることができますように。イエスさまの御名によって、アーメン。

10月25日　「宗教改革」　中学科

〈ねらい〉

○キリストの義によってのみ、私たちは神の前に義と認められるということを理解する。

○キリストの義は、信仰によってのみ受け取ることのできるものであることを理解する。

〈展開例〉

質問(1)　パウロによれば、福音は何だと言っているか。

質問(2)　福音に示されている神の義とは具体的に何を指しているか。

質問(3)　神の義が、信仰を通して実現されるとは具体的にどういうことを指しているか。

質問(4)　子どもカテキズム問33によれば、義認とはどうされることを指しているか。

質問５　なぜ私たちは、神によって義と認められるのか。

まとめ

パウロは、福音は信じるすべての者に救いをもたらす神の力であると言う。福音に啓示されている神の義とは、私たち人間の義ではない。人間は、生まれた時から罪に汚れており、どれほど努力しても、完全に律法を守ることによっては神の義を獲得することができない。パウロによれば、すべての人は、罪を犯したために神の栄光を受けることができなくなっている。では、ここで啓示されている神の義とは何か。それは、十字架上で成し遂げられたキリストの義である。キリストは、完全なる人であると同時に神である御方で、地上の生涯を十字架上の死に至るまで完全なる服従をもって神に従い通された。私たち罪人が、このキリストの義を自分のためであったと信仰によって受け入れる時、神は、それをあたかも私たち自身の義であるかのようにみなしてくださる。カテキズムに記されているように、義認、義と認められることとは、神が一方的に罪人である私たちに授けてくださる義であり、汚れた私たちを正しい者として受け入れてくださることを指す。この義認は、私たちが神から与えられる信仰によって、キリストの義を神からの贈り物として受け入れる時にのみ、私たちに与えられる恵みなのである。

〈祈り〉

神様、私たちのためにキリストの義を与えてくださって、ありがとうございます。私たちは、どれほど努力しても救いを自分自身の力で勝ち取ることはできませんが、イエス様の救いを私たちのためであったと信じる時にのみ、その義を私たちのものとしていただくことができます。私たちにはそれ以外にあなたに正しい者として受け入れられ、天国に入る方法はありません。あなたの一方的な恵みと憐れみに心から感謝いたします。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。

11月1日　「洗　礼」　　聖書研究

テキスト　　使徒言行録　2章37〜42節

使徒言行録第2章には、主イエスが約束してくださった聖霊が弟子たちに降り、それによって教会が誕生したその日の出来事が語られています。14〜36節では聖霊の賜物を受けたペトロの説教が語られ、それに応答した人々の様子が今回の個所である37節以降に記されています。

〈どうしたらよいのですか〉

ペトロは説教の最後で、「あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさった」(36) と告げました。人間の罪を鋭く指摘しつつも、そこで裁いたのではなく、主イエスはそのようなあなたがたの救い主となってくださったという福音を告げ知らせるのです。それゆえに、御言葉を聞いた者たちは、深く心を刺し貫かれながらも、その場を立ち去ることなく、ペトロたちに「兄弟たち」と親しみをもって問いかけることができたのです。「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」(37)。聖霊の働きによって御言葉が語られ、聞かれる時、それは私たちの心を大いに打ち、揺さぶり、それまでのままではいられなくなります。自分は今のままでいることはできない、変わらなければならない、変えられたいという願いが生まれるのです。

〈悔い改めと洗礼〉

人々の問いに対して、ペトロは次のように答えました。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます」(38)。「悔い改める」というのは、心の向きを180度方向転換して、神さまの方に向けることです。自分の心ばかり覗き込み、いくら自分の罪を悔やみ、忘れようと努めても、人間は新しく生まれ変わることはできません。人間の内に罪の解決を見いだせない私たちは、自分の外へ、すなわち、罪の赦しを与えてくださるたったおひとりの方、神さまのもとへ立ち帰ることが求められます。それが悔い改めであり、「洗礼」は悔い改めの具体的な形の表われです。

「イエス・キリストの名」によって洗礼を受けるということは、神の独り子であられるイエス・キリストを自分の救い主と信じ、その十字架の死と復活とにあずかり、罪の赦しと新しい命をいただくことです。洗礼を受け、罪の赦しの恵みをいただいた者は、聖霊を賜物として与えられることが約束されます。信仰は自分が信じるということですが、それは同時に聖霊によって与えられた賜物なのです。

〈主が招いておられる〉

そして、この約束は、昔のイスラエルの人々やその子孫だけでなく、遠くにいるすべての人、つまりそれまで神の救いから遥かに遠いとされた異邦人にも与えられます。それは、神さまが招いてくださる者ならだれにでも与えられるということです (39)。ここに、私たちが神さまの救いの約束にあずかることのもっとも深い根拠が示されています。それは主の招きです。「わたしたちはどうしたらよいのですか」という問いへの根本的な答えは、神さまの招きに応え、それを受けることです。私たちが本当に変わるために必要なのは、自分で何かをすることではありません。罪を悔い改めることも、主イエス・キリストの名による洗礼を受けることも、私たちが何かをするというよりも、イエス・キリストによる神さまの招きに応え、それを受けることなのです。そこにこそ、今までとは違う、新しい人生が与えられます。「邪悪なこの時代から救われなさい」(40) との神さまの招きを受け入れた人々は、それに応え、洗礼を受けました。その数は三千人ほどだったと言います (41)。神さまの招きに応えた人たちの群れである教会がここに誕生したのです。(藤井　真)

11月1日　「洗　礼」　　カテキズム研究

カテキズム　子どもカテキズム　問72、73

子どもカテキズム

問72　洗礼とは何ですか。

答　父・子・聖霊なる神さまの御名によって、
教会の信仰を自分の信仰として告白した人に、水を用いて、
イエスさまと共に十字架に死に、イエスさまと共に復活して、
新しい人として生きるようにする礼典です。
こうして、私たちは教会員とされます。

問73　赤ちゃんにも洗礼を施すのですか。

答　はい。
キリスト者の子どもは、恵みの契約によって、教会の中に入れられていますから、
洗礼を施します。
そのほかには、信仰を告白して、教会に許された人でなければ、
洗礼を施してはなりません。

参考教理問答　ウ小教理94、95、ハイデルベルク69〜74

〈イエスと共に死に、復活する〉

礼典は『キリストとの霊的結合』の確信を強化するものだと先に確認しました（問71）。問72では、洗礼という礼典の恵みが、死と復活のキリストとの結合であることが強調された答えが用意されています。キリストをわが救い主と告白する者は、「キリストがわたしの内に生きている（ガラテヤ2:19,20）」と言い得るほどに、罪に死にキリストの命に生かされます（コロサイ2:20〜3:17も参照）。洗礼はその霊的恵みを確認するもの。この意味で洗礼式は『古い人の葬儀、新しい人の誕生式典』と言うこともできます。それは「聖霊によって新しく生まれさせ、新たに造りかえる洗い（テトス3:5）」であり、その霊的恵みを感覚的に表すために「水を用いて」行います。ちょうど体の汚れが水によって洗われるのと同じように、確実に現実に、私たちの罪もキリストの血と霊によって洗われることが、表され、保証され、しるしづけられているのです（ハイデルベルク問73）。

〈恵みの契約によって〉

問73で扱う幼児洗礼は、神の主権的・先行的恩恵のみを救いのよりどころとする改革派信仰のエッセンスが凝縮されたものです。確かな知識も信仰の自覚もない生まれたばかりの幼子であっても、ただ神の恵みによって契約に入っている者と見なされて、契約の祝福のしるしとしての洗礼にあずかるわけですから。もちろん幼児洗礼には、信仰告白がともなうことが絶対的に必要です。後払いで商品を購入するようなものです。しかし、どこまでも神の恵みが先行する事実を忘れてはなりませんし、実は成人洗礼においても事柄は同様です。「洗礼はたしかに、わたしたちの信仰告白の機会であり、『イエス・キリストによって自分を神にささげて新しい命に歩む』ことのしるし、また印証です。しかしもっと根本的には、洗礼は、『あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである（ヨハネ15:16）』という、わたしたちの決意に先行する、変わることのない神の恩寵のしるし、また印証なのです」（矢内昭二）。　（坂井孝宏）

11月1日　「洗　礼」　　説教展開例

テキスト　　使徒言行録　2章37～42節
カテキズム　　子どもカテキズム　問72、73

〔単元のねらい〕

恵みの手段である礼典のうち、洗礼について学ぶ。洗礼について知ることは、神の招きを知ることである。神はわたしたちをご自分のもとに招いてくださっている。子どもたちもその招きにあずかっている。洗礼を受けること、また信仰告白への招きの時となるよう、祈って備えたい。

「洗礼を受けよう」

ペンテコステ（五旬祭）の時のことです。弟子たちが一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、家中に響き渡りました。炎のような舌が分かれ分かれに現れて、一人ひとりの上にとどまりました。そして、そんな不思議なしるしがある中で、弟子たちは聖霊に満たされて、いろいろな国々の言葉でイエスさまのことを証しし、宣べ伝え始めました(使徒言行録2章1～4節)。こうして、聖霊が降って、新約の教会が生み出されたのです。

その使徒言行録の2章37節からの御言葉を一緒に聞きました。その前のところに、使徒ペトロさんの説教が書き留められています。ペトロさんは、「十字架につけられて死んでくださったイエスさまこそがまことの救い主です」とお話ししました。十字架で死んでくださったイエスさまを信じて受け入れなさいと教えて、こう言いました。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます」。

ここに「洗礼」ということが出て来ます。今日は、この洗礼について学びましょう。

子ども礼拝のあとの朝の礼拝に出ている人は、「洗礼式」を見たことがあるでしょう。洗礼の仕方は、いくつかの仕方があります。わたしたちの教会では、長老さんが水の入った洗礼用の器を持っています。そして、牧師先生がその器に手を伸ばして、手を水に浸して、洗礼を受ける人の頭に水を注ぎます。そのときに、牧師先生は、「父と子と聖霊の名によって洗礼を授ける」と言います。これは、神さまのみわざだからです。イエスさまが命じておられることだからです（マタイ福音書28章19節)。このようにして、神さまの御名によって水を注がれることが、「洗礼」です。

この洗礼について、今日は、みっつのことを知っていただきたいと思います。

ひとつは、洗礼というのは、漢字で「洗礼」と書きます。そこには「洗う」という言葉が使われていますね。洗礼というのは、「洗う」、これは、神さまによって洗われるということなのです。わたしたちが水で体を洗って、体のよごれを洗い流します、そのように、神さまがイエスさまの霊、聖霊によってわたしたちの心のけがれ、魂のけがれを洗い流してくださる、ということです。わたしたちの罪をすっかり洗いきよめてくださる、そのこと自体は、目に見えない聖霊のお働きなのですけれども、それを目に見える仕方であらわして、水を頭に注ぎます。その仕草で、聖霊なる神さまがわたしたちの罪のけがれをすっかり洗いきよめてくださることをあらわしています。

ふたつには、洗礼は、聖霊なる神さまがわたしたちの罪のけがれを洗い流してくださること、聖霊なる神さまのみわざなのですが、ほかでもないイエスさまのみわざでもあります。聖霊なる神さまがわたしたちを洗いきよめてくださる。それは、

わたしたちをイエスさまとひとつにしてくださることだからです。

ペトロさんは、このとき、イエスさまが十字架につけられたことをお話しして、「洗礼を受けなさい」と言いました。十字架のイエスさまです。イエスさまが、わたしたちの罪とけがれのすべてを背負って十字架につけられてくださいました。わたしたちの代わりに、神さまの怒りと刑罰を受けて、死んでくださいました。そして、もちろん、よみがえられたのです。イエスさまは、新しい命、永遠の命をいただいて復活されました。

聖霊なる神さまがしてくださることは、わたしたちをそのイエスさまに結び合わせてくださることです。イエスさまに結ばれて、わたしたちの罪が赦され、わたしたちは罪がない、きよい者であると認めていただけます。わたしたちは、イエスさまによって罪とけがれを背負われて、すっかりきれいにしていただくのです。洗礼は、このイエスさまの十字架と復活を指し示しています。イエスさまから、罪の赦しと新しい命をいただくことのしるしなのです。

みっつめ、最後になりますが、ペトロさんは、十字架につけられたイエスさまのお話を聞いた人たちに、イエスさまを信じて悔い改めなさいと言いました。そして、それだけではなくて、洗礼を受けなさいと言いました。

わたしたちは、イエスさまのお話を聞いています。イエスさまが罪を背負って死んでくださって、わたしたちは神の子どもとして生きることができます。何と幸いなことであろうかと思って、イエスさまを信じます。神さまの子どもとして生きていきたいと願います。そんなふうに、わたしたちは信じて悔い改めるのですけれども、ペトロさんは言いました。「洗礼を受けてください」。

それは、洗礼を受けることが、イエスさまがお命じになったことであり、洗礼を受けると、わたしたちの心が強められるからです。イエスさまを信じて、悔い改めて生きることは、ただ心の中のことだけではありません。外にあらわれることです。わたしたちの生き方が変わるのであり、態度や仕草、目に見えるところも変わるのです。だから、聖霊のお働きを目に見える仕方であらわして、洗礼を受けることが大切です。イエスさまに結ばれることを洗礼ということであらわすのです。そうすると、わたしたちの心が強められます。一生涯、イエスさまに結ばれて、聖霊によってきよめられて生きることができるのです。

みなさんは、お風呂に入って体を洗いますね。体を洗わないで、よごれたままでいるのは気分が悪いものです。神さまは、わたしたちに、心のけがれもすっかり洗いなさいとおっしゃっておられます。罪ということによって心の中に暗い闇があり、ゴミやホコリがたまってしまっています。神さまは、「わたしがあなたのその心をすっかりきれいにしてあげよう」とおっしゃっておられます。イエスさまを信じて生きるならば、イエスさまに背負われて、聖霊を注がれて、すっかりきれいにされるのです。その目に見えるしるしとして、洗礼を受けなさいと、神さまは招いておられます。神さまに罪のけがれを洗いきよめていただく。これは、とても感謝なこと、幸せなことです。

皆さんの中には、幼児洗礼を受けているお友だちがいます。小さい頃に、神さまが招いてくださっていることのしるしとして洗礼を授けられたのです。ぜひ、自分自身の口でイエスさまを信じていると告白できるように祈りましょう。洗礼をまだ受けていないお友だちも、ぜひイエスさまを信じて洗礼を受けましょう。イエスさまを信じているならば、イエスさまと一緒に生きていたいと決心するならば、分級の先生や牧師先生に言ってください。信仰を告白するため、洗礼を受けるために一緒にお祈りしましょう。教会には、洗礼を受けた先輩がいっぱいいて、みんなの信仰と洗礼のためにお祈りしています。　　（望月　信）

〔今週の暗唱聖句〕　使徒言行録 2章38節（一部）

めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。

11月1日　「洗　礼」　幼稚科

〈ねらい〉

成人洗礼・幼児洗礼・信仰告白の式を知り、神様がその恵みにひとりひとりを招いていらっしゃることを伝える。

〈展開例〉

絵を見せながら（122ページ参照）、お話しする。

今日は日曜日。5歳のさぐるくんは、教会へ行きます。お父さんやお母さん、弟のてつくんもいっしょです。

①日曜学校が終わると、大人もいっしょの礼拝です。さぐるくんもてつくんも、お父さんとお母さんといっしょにならんで座ります。さんびかを歌ったり、お祈りのさいごには、みんなといっしょにアーメンを言います。それがなんだか、とっても嬉しいのです。

だいたいいつも、座る席が決まっています。となりには、いつも遊んでくれる中学生のしんじおにいちゃんがいます。後ろには、同じ歳のめぐみちゃんとめぐみちゃんの妹のかおりちゃん。かおりちゃんは、まだ赤ちゃんでいつもお母さんに抱っこしてもらってすやすや眠っています。そして、お父さんの前には、いつもじっとお話しを聞いている山田のおじさんが座っています。

ところが……、今日はなんだか様子が違います。いつもはとなりに座るしんじおにいちゃんも、後ろにいるめぐみちゃんの家族も、山田のおじさんもいつもの席にいません。ぐるっと、礼拝堂の中を見てみると……、みんな一番前の席に座っていました！（あれ～？今日はなんだかいつもと違う。どうしたんだろう？）と、さぐるくんは、ふしぎに思っていました。

②礼拝がはじまりました。そして、「洗礼式、信仰告白式を行います」と先生が言われると、最初に山田のおじさんが、先生の前に立ちました。そして、いつもは置いてあるだけのきれいないれものから先生が水をすくい、山田のおじさんの頭にびしゃっとかけました。おじさんの肩には、その水がぽたぽたっと垂れていました。次に、めぐみちゃんの家族がみんな、先生の前にたちました。今度は、先生はまだ赤ちゃんのかおりちゃんに水をかけました。可愛いかおりちゃんは、笑っていました。次は、さぐるくんの大好きなしんじおにいちゃんです。いつもと、違って真剣な顔をしています。先生は、しんじくんには、水をかけませんでした。

礼拝が終わりました。みんな、山田のおじさんや、めぐみちゃんのかぞくや、しんじくんの近くに行って、「おめでとう」「おめでとう」と言って握手をしたりしています。みんな、ニコニコして、いつもよりずっと嬉しそうです。山田のおじさんも、本当に嬉しそう。しんじおにいちゃんも、キラキラして見えます。

さぐるくんは、お父さんに聞きました。「今日は、なあに？ なんだか、いつもとちがうね」。お父さんは、教えてくれました。「今日は、洗礼式と信仰告白式があったんだよ。『神様のひとり子のイエスさまが、わたしの罪のために死んでくださった』と信じて、神様とみんなの前で告白した人に、行う式なんだ。山田のおじさんのは、洗礼式。かおりちゃんのは、幼児洗礼式。さぐるも、てつもめぐみちゃんも赤ちゃんのとき受けたんだよ。そして、しんじおにいちゃんのは、信仰告白式。しんじおにいちゃんは、赤ちゃんのときに、幼児洗礼を受けているから、信仰告白式なんだよ。さぐるも大きくなったら、自分の口で告白するときがくるよ。楽しみだな～お父さん」。

お母さんも言いました。「洗礼は、罪がゆるされて神様の子どもとされた印なんだよ。みんな、神様からこの恵みに招かれているのよ」。

「わかった」。さぐるくんは、そう言うと、山田のおじさんと、しんじおにいちゃん、かおりちゃんに「おめでとう！」を言いに走って行きました。

〈お祈り〉

てんのおとうさま。洗礼の恵みをありがとうございます。イエスさまによって、アーメン。

11月1日　「洗　礼」　　小学科下級

〈ねらい①〉

「十字架の主とともに古い自分が死に、復活の主とともに新しい自分が生まれる」という、子どもカテキズムの線での洗礼理解を確認する。

〈展開例①〉

みなさん、手のひらに墨で「罪」と書いてください。そして真っ黒になるまで色んな悪い言葉を書いてみよう。できましたか？　では、みんなで手を洗いに行きましょう。そして「このやろー」って気持ちで、ゴシゴシ洗ってください。

どうですか？　ピカピカになりましたか。罪にまみれた真っ黒な手が消えて、新しいピカピカの手が現れました。洗礼というのも、これと同じことを表しています。「罪にまみれた真っ黒なあなたはきれいに洗われて、新しいピカピカのあなたが生まれましたよ。イエス様がその血をもってすでに洗ってくれましたよ。」そういう霊的な真理をわかりやすく教えるために、水で体を洗うという洗礼の礼典を、イエス様が与えてくださったのです。

〈ねらい②〉

幼児洗礼を受けているということの喜び、契約の子として選ばれた光栄を確認する。

〈展開例②〉

みなさんの中には、幼児洗礼をすでに受けていて契約の子と呼ばれている人もいるね。それはとても素晴らしいことなんです。契約の子の中には、大人になってから「もっと確かな信仰をもってから洗礼を受けて、自分は本当に救われたのだって確認したかった」と思う人もいるようです。でも神様の救いは、あなたの信仰が確かかどうかで決まるものではありません。神様が、自由な恵みで私たちを選んでくださったから、私たちは救われるし、洗礼を受けることもゆるされるのです。幼児洗礼を受けているということは、皆さんが神様の特別な愛を受ける、選ばれた子どもたちであるというしるし。

そして選ばれたあなたたちは、神様との契約に生きる光の子として、闇を照らすために世に派遣されるのです。聖霊なる神様に力を与えていただいて、神様の御心をみんなに伝えて、神様の愛と正義を実現して、世界をよきものに変えていく。あなたは、そんな光栄ある使命を神様から与えられている、契約の子なのです。その数は少なくとも、決して恐れることはありません。強く雄雄しくありなさい。

〈祈り〉

神様。幼児洗礼を受けることがゆるされて感謝します。あなたに選ばれたことが、本当に私の喜びになりますように。そして、救われたことを確信して、信仰告白することができますように。

11月1日　「洗　礼」　小学科上級

〈ねらい〉

洗礼を受けることの恵みを学ぶ。

〈展開例〉

今から二千年前、使徒ペトロが多くの人々に力強く勧めたことは、それまで自分が犯してきた罪を悔い改めることと、洗礼を受けることでした。そのペトロの言葉を受け入れた人々は、洗礼を受けました。その日に三千人ほどが教会の仲間に加わったと聖書に記されています。

皆さんのなかには「幼児洗礼」を受けているという人もいると思います。それは生まれたばかりの赤ちゃんの頃に受ける洗礼のことです。この幼児洗礼の場合は、それを受けたとき自分の罪を悔い改めたという人はいません。そんなことをどんなに強く勧められても、赤ちゃんには無理なことです。

でも、今している話はそれとは別の話です。いろんなことが理解できる年齢になってから受ける洗礼のことを「成人洗礼」と言います。それを受ける場合には、自分が犯した罪を認めて悔い改める必要があるのです。

「悔い改め」とは、父なる神と救い主イエス・キリストへの信仰に生きる道に入ることです。神に背を向けて生きていた人が、正反対の方向を向いて、神さまのことを真剣に考えるようになることです。ですから、逆に言えば、神さまのことを真剣に考えるようになった人は洗礼を受けるべきなのです。

そして、洗礼を受けることは、教会の仲間に加わることを意味しています。「私は自分が犯した罪を悔い改めて、教会で洗礼を受けました。でも、教会の仲間には加わりません」というのは言葉の矛盾です。教会は「キリストの体」と呼ばれるものであり、神とイエス・キリストに従って生きることが「悔い改め」であり、悔い改めた人が受けるのが「洗礼」なのですから、洗礼を受けた人が教会のいろんな活動に積極的に参加することは、神さまから与えられる恵みの賜物であり、特権であると同時に、義務でもあるのです。

そしてペトロが勧めたことは自分の罪を悔い改めて洗礼を受け、その罪を赦していただいた人々には、「賜物としての聖霊」が与えられます、ということです。

聖霊とは何のことでしょうか。それは、少し難しい言い方をすれば、わたしたち人間の外側から内側へと入ってくるものです。そして聖霊は目に見えません。恵みの賜物として心の中に与えられるものです。「賜物としての聖霊」とは、神さまを信じる人々を励ましてくださるために、その人の心の中に住んでくださる神さまです。一度や二度反省したくらいでは、何度でも元に戻ってしまう弱い心を持つわたしたち人間が罪の泥沼に戻っていかないように、強く支えてくださるお方、それが「聖霊なる神」なのです。

「私の心の中に、聖霊なる神さまなんて方が本当に住んでおられるのだろうか。目に見えない方が住んでおられるかどうかを知るために、私はどうしたらよいのだろうか」と疑問に思う人もいるでしょう。

でも、どうか安心してください。大丈夫ですから。神さまを信じている人の心の中には必ず聖霊は住んでおられます。「私は自分が神さまを信じているかどうかが分からない」という人はいません。信じるとは自覚することです。私は神さまを信じているということをまだ自覚することができないということが自分ではっきりと分かる場合には、洗礼を受けることを急ぐ必要はありません。無理やり押し付けたりはしませんので、もう少しじっくり考えてみてください。

しかし、「わたしには信仰がある」ということを自覚できる人は、洗礼を受けましょう。ぜひ教会の仲間に加わってください。お願いします。

〈お祈り〉

神さま、わたしはあなたを信じています。どうか洗礼を授けてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

11月1日　「洗　礼」　中学科

〈ねらい〉

〇初代教会の人々がどのように神の民に加えられていったかを理解する。

〇洗礼が何を表しているかを理解する。

〈展開例〉

質問１　どうしたらよいのですか、とたずねられた時、ペトロはどうしなさいと答えたか。

質問２　ペトロの挙げた三つの事柄とは、それぞれ具体的にどういうことを意味しているか。

質問３　ペトロによれば、この約束はだれに与えられているものか。

質問４　ペトロの言葉を受け入れた人々は何をしたか。

質問５　彼らは、どういうことに熱心だったとあるか。

まとめ

エルサレムで聖霊が降臨した後、ペトロは、大勢の人々を前にキリストのことを証し、説教を行う。聞いていた人々の多くは、その心を刺され、ペトロにどうしたらよいのかと問うた。ペトロは、それに答えて、悔い改め・洗礼・聖霊を受けることの三つを挙げて人々に勧める。悔い改めとは、自分が今まで犯した罪を心から悔い、神に従う人生を選ぶという心の転換をするということ、洗礼は、キリストの約束に従って、父子御霊の御名によって水の洗いを受け、新約の神の民である教会に加えられるということ、そして聖霊を受けることとは、キリストを信じた結果として、聖霊なる神がその人の内に宿ってくだるということを意味する。そして、この約束は、旧約の時代のように神の民イスラエルだけに与えられているのではなく、神が招かれるすべての人々に与えられているということをペトロは明確に語る。彼の言葉を受け入れた人々は、この日だけで三千人にも上り、それらの人々は洗礼を受け、使徒の教え・相互の交わり・パンを割くこと・祈ることに熱心な神の民になった。私たちが神を信じることを選ぶのではなく、神が私たちを信仰へと招いてくださって、私たちはそれを受け取るのみである。洗礼とは、水が汚れを洗い流すように神が私たちの罪の汚れを洗いきよめてくださり、その結果、約束を受け継ぐ神の民に正式に加えられるということを目に見える形で表しているものである。

〈祈り〉

神様、私たちに洗礼を与えてくださって、ありがとうございます。あなたは、私たちの心に信仰を与えてくださり、水が汚れを洗いきよめるように、私たちの罪に汚れた心をきよめてくださいます。イエス様の尊い犠牲によって、私たちに罪の赦しを与えてくださったことを心から感謝いたします。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。

11月8日　「聖　餐」　　聖書研究

テキスト　　使徒言行録　2章37～42節

〈教会の仲間に加わる〉

主イエスが、弟子たちに約束してくださった聖霊がペンテコステの日に降り、そこから力強い福音宣教が始まります。使徒言行録第2章37～41節には、ペトロが語った説教を聞いた多くの人々が大いに心を打たれ、悔い改めて、洗礼を受けたことが記されていました。また、洗礼を受け、罪を赦していただくということは、同時にキリストの体である教会の仲間となるということでもあります。賜物として聖霊を与えられた私たちは、聖霊の働きによって生まれた教会に生きる者とされるのです。

42節には、生まれたばかりの教会とそこに生きる人々の姿が、どのようなものであったかが語られています。「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」。ここには四つのことが記されています。第一は、「使徒の教え」です。これは使徒たちが語るキリストの十字架と復活の証言を聞くことです。今日で言えば、御言葉の説教を聞くということです。第二は「相互の交わり」です。御言葉を聞くことは、兄弟姉妹たちとの交わりを大切にして生きることでもあります。44～45節に記されている、財産や持ち物を互いに分かち合うことには、そのことが具体的に表われています。

〈聖餐共同体としての教会〉

ここでさらに考えなければいけないことがあります。相互の交わりというのは、皆が仲良くなれば、それでよいということではありません。人間的な親しさだけを求める交わりは、親しくない者との間に壁をつくり、対立が生まれます。それでは「一つになって」(44, 46, 47) 教会を造り上げ、伝道することはできません。では教会の交わりにおいて、私たちが本当に分かち合うべきものは何でしょうか。それが、第三の「パンを裂く」ことです。「パンを裂く」とは、食事を共にすることですが、それは単なる会食や愛餐ではありません。これは主イエスが十字架につけられる前の夜、弟子たちとの食事の席において、パンを裂き、弟子たちに与えて言われた言葉に基づいています。「これはあなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」(ルカ22:19)。パンを裂くとは、キリストの体であるパンを裂いて共に食べることであり、今日の礼拝において私たちがあずかっている聖餐のことを意味します。ここに教会の交わりの中心があり、本質があるのです。ですから、教会員のことを「陪餐会員」と呼んでいます。聖餐に共にあずかっている会員という意味です。私たちは洗礼を受けたのち、御言葉を共に聞き続け、共に聖餐にあずかることによって、主イエス・キリストの十字架と復活の恵みを思い起こし、いよいよキリストに深く結ばれ養われていきます。このように、教会はキリストがいつも中心にいてくださる交わりであり、その恵みを分かち合いながら生きる共同体です。

また、教会には「祈り」が不可欠です。これが第四のことです。教会は「祈りの家」なのであり、祈りにおいても、主イエスと兄弟姉妹との交わりに生きるのです。御言葉を聞き、聖餐にあずかり、祈りを共にするという分かち合いの中で、主イエス・キリストとの豊かな交わりと恵みにあずかる時、私たちは人間的な親しさに左右されずに、必要なところに助けを注いでいく真実で具体的な分かち合いが可能になります。初代教会から受け継いでいる「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ること」に心を注いで生きることの中に、教会が教会として、人間が人間として立つことができる真実の道があるのです。教会は御国の完成の待ち望みながら、主が備えてくださる信仰の道をこれからも歩み続けるのです。(藤井　真)

11月8日　「聖　餐」　　カテキズム研究

カテキズム　子どもカテキズム　問74，75

子どもカテキズム

問74　聖餐とは何ですか。

答　イエスさまの言われた通りに、

パンとぶどうジュースを用いて、十字架で裂かれたキリストのお体と流された血を覚え、

信じる者と共におられるキリストを覚え、再び来られるキリストを覚えるための礼典です。

これによってイエスさまとの交わりが深められます。

問75　赤ちゃんは聖餐にあずかれますか。

答　いいえ、自分で信仰を告白するまではあずかれません。

洗礼を施されていない人や、教会が受けてはいけないと決めた人もあずかれません。

私たちは、一日も早く、救いの喜び、聖餐の祝いにあずかることができるよう、

聖霊のお働きを求めるのです。

参考教理問答　ウ小教理96、97、ハイデルベルク75〜82

〈今ここに確かにおられるキリスト〉

聖餐式は、今ここに確かに生きておられるキリストの臨在を、最も豊かに確かめうる時と場です。その聖餐の恵みは、汲めども尽きない泉のように、数え上げるとキリがありません。問73では、三つの点にしぼっています。

①キリストの十字架の記念・想起。「十字架で裂かれたキリストのお体と流された血を覚え」ることで、そこにあらわされた神の愛におののき、贖いの事実と罪の赦しを確認し、新しい契約に与る幸いを確信します。この想起・記念のために司式者の行為をはっきり見ることが必要です。②キリストの共在の確認。聖餐において我々は、聖霊を通して臨在される生ける主キリストに出会い、「主がまことにここにいます」と実感し、主とともに食事します。そして、聖霊によって天上のキリストの体と結ばれ、キリストの命に結ばれます。大切なのは、そのような聖霊のお働きを信じる信仰と、それを求める祈りです。③「再び来られるキリスト」を待ち望む。聖餐は、終わりの時に与えられる神の国の祝宴の地上における先取りでもあります。それは復活の主の再臨を待ち望む希望の食事であり、その希望に基礎付けられた喜びの食事です。

そしてこれら三つの恵みを通して、「イエスさまとの交わりが深められる」とあるように、聖餐においてもキリストとの『霊的結合』が大きな問題なのです。

〈真に恵みを受け取るために〉

コリントー11章27〜30節によれば、陪餐の条件として、「自分をよく確かめ」「主の体のことをわきまえ」「自分をわきまえる」ための霊的・知的理解力と成熟が要求されることは明らかです(ウ大教理問171もよい参考です)。また共同体への自覚的な参与と、共同体成員としての自己吟味が必要です。それゆえ、「まだ信仰を告白していない未陪餐会員、洗礼を受けていない求道者、陪餐停止あるいは除名の戒規の下にある者」は、聖餐にあずかることができません（日本キリスト改革派礼拝式文より)。聖餐式は、魔術的に神の恵みを提供してくれる儀式ではなく、信仰と悔い改めをもって受けなければ無意味です。子どもたちには、その霊的峻厳さを示しつつも、「救いの喜び、聖餐の祝い」への憧れが呼び起こされるよう配慮することが何より肝要でしょう。そのためには、言い尽くされていることではありますが、やはり教師自身が食事を喜んでいる姿こそが証しです。

（坂井孝宏）

11月8日　「聖　餐」　　説教展開例

テキスト　　使徒言行録　2章37～42節
カテキズム　　子どもカテキズム　問74、75

〔単元のねらい〕

恵みの手段である礼典のうち、聖餐について学ぶ。聖餐は、主イエス・キリストの御苦しみを思い起こすときである。主イエス・キリストは、わたしたちの罪のために死んでくださったのであり、罪の悔い改めを迫られるときである。しかし、同時に、聖餐の食卓は喜びの食卓にほかならない。天からのパンとしてのキリストの恵みにあずかるときであるからである。ここには、罪に対する悲しみと神の恵みにあずかる感謝と喜びがひとつに結ばれている。恵みの食卓に共にあずかることへと招きたい。

「神さまの恵みの食卓」

先週は、洗礼ということについて学んで礼拝をささげました。わたしたちがイエスさまに結び合わせられて、罪を赦され、きよめていただくことのしるしとして、水で洗われる洗礼を受けることを学びました。今日は、そのような目に見えるしるしがもう一つあることを学びましょう。

聖書の御言葉は、先週と同じところです。使徒ペトロさんが説教して、洗礼を受けなさいと勧めている御言葉です。そのペトロさんの説教によって心を動かされて、三千人もの人たちが洗礼を受けて、信仰者の仲間、教会の仲間に加わったと書いてあります。すばらしいですね。神さまが働いて、説教が用いられて、人の心が揺り動かされて、こんなふうに多くの人たちが神さまを信じるようにされるのです。この神さまのみわざは、いまも続いています。わたしたちの集められているこの教会でも、この神のみわざが行われています。三千人！　とはいきませんが、イエスさまを信じて悔い改め、洗礼を受ける人が起こされています。神さまのすばらしいみわざが、これからもたくさん行われるよう、お祈りしています。

さて、三千人もの人たちが仲間に加わって、聖書にこうあります。「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」。イエスさまを信じて洗礼を受けた人たちが、どのような信仰生活をしていたかが分かります。

「使徒の教え」とはイエスさまのことを宣べ伝える教えのことです。使徒たちがイエスさまのことを宣べ伝えて、それを受け継いで教えましたから、「使徒の教え」と言われます。今のわたしたちにとっては、聖書の御言葉から学ぶことです。教会は、その初めから、イエスさまの教えを学び続けてきました。そして、「相互の交わり」、「祈ること」も大切にしてきました。「相互の交わり」とは、イエスさまが中心にいてくださって、わたしたちが互いの交わりを建て上げていくことです。互いに物を持ち寄ったり、献金をささげて、互いを支え合って生活したのです。当然、神さまに依り頼んで祈る生活でもあります。神さまをほめたたえて熱心にお祈りしました。

こうして、ここには、最初の教会で、聖書から学ぶこと、主にある交わりを建て上げること、祈ることが熱心に行われていたことが書き留められています。そして、もうひとつ、今日、大切に学びたいことは、「パンを裂くこと」です。

この「パンを裂く」というのは、お食事をするためにパンを用意することとは違います。教会の礼拝の中でパンを裂くのです。朝の礼拝に出ているお友だちは、見たことがあるでしょう。牧師先生が、「取って食べなさい」と言う、あれです。

あるお子さんが、牧師先生のことを「取って食べなさいの人」と呼んでいることを聞きました。

子どもの皆さんにも、パンを裂いて「取って食べなさい」と言う姿がとても印象的で、心に残るのだなあと、あらためて思いました。

そのことを「聖餐式」と言います。ていねいに、「主の晩餐の礼典」と言うこともあります。

十字架につけられる前の夜のこと、イエスさまは弟子たちと一緒に食事をされました。そのときに、イエスさまは、「わたしのことを忘れないでいるために、このようにしなさい」とおっしゃって、パンを裂いて弟子たちに分け与えられ、また、ぶどう酒の入った杯を回して与えられました。

弟子たちは、そのときには分からなかったのですが、イエスさまが十字架につけられ、復活され、聖霊が注がれて、はっきりと分かりました。イエスさまは、ご自身の十字架のみわざを忘れることがないように、あのとき、パンを裂いてくださった、ぶどう酒を分け与えてくださったのだと、分かりました。パンを裂くのは、イエスさまが十字架につけられて、肉が引き裂かれたことを指しています。ぶどう酒は赤いですね、イエスさまが血潮を流してくださったことを指しています。イエスさまは十字架につけられて苦しまれ、血を流して、わたしたちの罪のための犠牲となってくださいました。わたしたちは、このイエスさまの御苦しみによって、罪から助け出されています。

イエスさまがパンを裂いて、五千人の人を養われたことがあります。それは、男の人だけの数ですから、女の人や子どもたちもあわせると一万人くらいの人に、パンを裂いて配られました。そして、イエスさまは、天からのパンを食べなさいとおっしゃいました。その天からのパンはイエスさまご自身であるともおっしゃいました。天からのパンであるイエスさまご自身をいただいて、わたしたち人間は、まことの命、永遠の命を生きることができる。神さまが与えてくださる命を真実に生きることができるのだとお教えくださいました。そして、皆、わたしのもとに来なさい。わたしが与える命のパンを食べなさいとおっしゃいました。パンを裂いて配られたのは、そのことを教えるためでした（ヨハネ福音書6章）。

ですから、皆さんにぜひ知っていただきたいのです。礼拝でパンを裂いている、そして、ぶどうジュースを飲んでいる、あの聖餐式で、わたしたちは天からのパンであるイエスさまご自身をいただいています。そうして、罪の赦しと神さまの命をいただいているのです。旧約の神の民イスラエルが、荒れ野で天からのパンであるマナによって養われたように、新約の教会に生きるわたしたちは、今、裂かれたパンとぶどうジュースによって養われます。ですから、十字架につけられたイエスさまを見つめて、悔い改めと感謝と喜びをもって、パンとぶどうジュースをいただきます。

もちろん、パンとぶどうジュースは目に見える品物に過ぎません。パンとぶどうジュースをいただくことは、聖霊が働いて、イエスさまと結び合わせられ、イエスさまに養われるということのしるしです。わたしたちは、イエスさまの十字架によって罪赦され、神さまの御言葉によって養われます。パンとぶどうジュースは、それを目に見える仕方であらわしています。そして、パンとぶどうジュースをいただくと、心が強められるのです。パンをしっかり噛みしめると、イエスさまの御苦しみが分かります。ぶどうジュースを飲むと、イエスさまの血がわたしたちのために流されたことが分かるのです。聖霊が、わたしたちに働いて、その恵みを与えてくださいます。

イエスさまは、この目に見える恵みの食卓へとわたしたちを招いてくださいました。十字架のしるしであり、悲しい食卓ですけれども、感謝と喜びの食卓なのです。十字架の恵みをいただくことだからです。イエスさまを信じて、洗礼を受けるのは、この食卓を一緒にするためです。この食卓に一緒に加わる日が早く与えられるよう、お祈りしています。

（望月　信）

〔今週の暗唱聖句〕　使徒言行録 2章42節

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

11月8日　「聖　餐」　幼稚科

〈ねらい〉

聖餐式とその意味を知る。まだ、パンやぶどうジュースがいただけなくても、その恵みに招かれていることを覚える。

〈展開例〉

絵を見せながら（122ページ参照）、お話しする。

①今日は、日曜日。さぐるくんは、いつもどおり、教会にやってきました。礼拝がはじまります。さぐるくんは、いつもの席に座りました。今日は、しんじおにいちゃんも、山田のおじさんも、めぐみちゃんたちも、いつもの席に座っています。しかも今日は山田のおじさんのすぐ隣りに、山田のおばちゃんが座っていました。はじめて教会に来たのです。さぐるくんは、山田のおばちゃんに手を振りました。山田のおじさんのお家はすぐ近くで、さぐるくんはおばちゃんとも仲良しなのです。

オルガンの音が、礼拝堂いっぱいに響いて、礼拝がはじまりました。さぐるくんは、いつもより大きな声でいっしょにさんびかを歌ったり、元気いっぱいで、「アーメン」を言いました。先生のおはなしが終わりました。すると、先生はお話しをする壇から降りて来て、一番前の大きな机の前に、立ちました。そうです。今日は“聖餐式”がある日でした。さぐるくんの胸は、ドックン・ドックンとたかなりました。どうしてかって？　それは、先生が大きな机の上の白い大きな布を取ると、さぐるくんがすごく我慢しなければいけない時間がやってくるのです。聖餐式では、パンとぶどうジュースが配られます。でも、さぐるくんは食べられません。じぃーっと、見ているだけです。

聖餐式がはじまりました。今日は、山田のおじさんも、しんじおにいちゃんもパンとぶどうジュースをとりました。いつもだったら、自分も欲しくて泣いてしまうさぐるくんですが、今日は泣きませんでした。山田のおばちゃんもパンをとらなかったし、おとうとのてつくんや、めぐみちゃん、かおりちゃんも食べていないことに気がついたからです。そして、みんなでいっしょにいつも聖餐式のときにうたう「マラナ・タ」（「讃美歌21」81番）のさんびをうたいました。てつくんも、「あーら・また」って、ちょっとまちがってるけど、うたっています。

②礼拝が終わると、しんじおにいちゃんが「今日は泣かなくてえらかったね」と褒めてくれました。そして、さぐるくんを大きな机のところまで連れて行って、だっこをして机の上の残っているパンとぶどうジュースを見せてくれました。

「このパンは、イエスさまのからだ。このぶどうジュースは、イエスさまが流された血をあらわしているんだよ。このパンと、ぶどうジュースを、教会の家族といっしょにいただくとき、わたしたちのために、十字架で死んでくださったイエスさまのことを思い起こすんだ」。さぐるくんはききました。「どうして、ぼくや、てつや山田のおばちゃんや、めぐちゃんは食べれないの？」しんじおにいちゃんは、言いました。「ぼくも、この間まで食べていなかったでしょ？さぐるくんといっしょで、赤ちゃんのとき洗礼を受けたけど、まだ自分の口で『イエスさまを信じます』って、教会で告白していなかったからなんだ。さぐるくんも、大きくなってぼくみたいに告白したら、いただけるようになるんだよ」。（そうか）……とさぐるくんは思いました。

山田のおじさんがやってきて言いました。「ああ、聖餐式って恵みだなぁ。イエスさまが今もいっしょにいてくださることがよ～くわかったょ。だから、本当にもう一度イエスさまが来てくださる日が、いっそう待ち遠しくなった」。しんじおにいちゃんは、「さぐるくんといっしょにパンとぶどうジュースをいただける日が楽しみだ。お祈りしているよ」と言いました。「うん」。さぐるくんは、（しんじおにいちゃんってやさしくて、かっこいいなぁ。ぼくも、しんじおにいちゃんみたいになりたいな）と思いました。

〈お祈り〉

てんのおとうさま。聖餐の恵みをありがとうございます。イエスさまによって、アーメン。

11月8日　「聖　餐」　小学科下級

〈ねらい①〉

改革派礼拝式文における聖餐理解を確認し、礼拝の聖餐式において何が行われているのかを子どもたちに伝える。

〈展開例①〉

聖餐式のパンとぶどうジュースって、おいしそうだね。食べたいなあって思ったことある人、手を挙げて!! どうしてパンとぶどうジュースなんだろう？ それは、イエス様がお決めになったからです。

聖餐式の時に、牧師さんのやってることを真似したことある人いる？ パンを配る時に、牧師さんはどんなことを言ってるかな？ パンをガバっと裂きながら「取って食べよ。これはあなたがたのために裂かれたわたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい」って言ってるね。このパンは、私たちのために十字架で裂かれたイエス様のからだなんだって、心に覚えながら食べるんですよ。そうイエス様が教えてくれたんだ。

ぶどうジュースの時はどうだろう？ この杯をしっかり見てくださいって言われるよね。そして「この杯は、罪のゆるしを得させるように、多くの人のために流すわたしの血で立てられた、新しい契約である。みなこの杯から飲め。」と言って、杯を配り始めるね。このぶどうジュースを飲む時には、私たちのために十字架で流されたイエス様の血を思い出すのですよ。このぶどうジュースを飲むことで、イエス様が立ててくださった「新しい契約＝イエス様を信じるだけで罪の赦しと永遠の命が与えられるという約束」を思い出すのですよ。そのようにイエス様が教えてくれたのです。聖餐式でパンとぶどうジュースを口にする人は、そんなことを心に思いながら、イエス様のおかげで本当に自分は救われたんだって確認して、感謝するのです。

〈ねらい②〉

聖餐式が本当に喜びの食卓であることを証しし、信仰告白した者の特権に招く。

〈展開例②〉

聖餐理解は改革派神学にあっても多様であり、とても一言では表せません。しかし聖書研究、カテキズム研究、説教展開例などを参考に、ご自身にとって「聖餐において一番恵みだと思うこと」を一つだけ明確になさって、子どもたちにお伝えください。先生が本当にうれしそうになさっている様子が、何よりの招きです。聖餐は身体を伴うものであり、理論だけでは把握しきれません。体験が重要になってきます。主イエスが本当にそこにいてくださって、パンを与えてくださった……そんな聖餐体験が証しされるなら幸いです。

〈祈り〉

神様。あなたは私たちに救い主イエス様を与えてくださいました。イエス様は私たちのために、十字架で体を裂かれ、血を流してくださいました。そのイエス様の体と血を、よく覚えさせてください。聖餐式の恵みを教えてください。

11月8日　「聖　餐」　小学科上級

〈ねらい〉

聖餐に与ることの恵みを学ぶ。

〈展開例〉

先週は洗礼を受けることの恵みについて学びました。「わたしは神さまを信じている」と自覚できる人は、洗礼を受けましょう。また、幼児洗礼を受けている人の場合は、信仰告白をしましょう。そうすることによって神さまが喜んでくださいます。

そして洗礼を受けた人、信仰告白をした人は「聖餐式」に参加しましょう。今日学びますのは、聖餐式とは何かということです。

聖餐式とは、イエス・キリストが十字架にかけられる前の夜に行なわれた最後の晩餐のときに定められた儀式です。教会は、長い歴史の中でこの儀式をとても重んじてきました。

しかし最後の晩餐のときにイエスさまが行われたのは「過越の食事」であると聖書に記されています。過越の食事とはイスラエルの人々が神さまの救いのみわざを喜ぶために囲んだ祝いの儀式です。それをイエスさまは「最後の晩餐」として行ってくださいました。そして、それが「最初の聖餐式」として行なわれたのです。

これで分かることは、聖餐式も過越の食事と同じような意味でのお祝いである、ということです。お祝いのときに暗い顔をしていることはマナー違反です。お祝いの席には明るい笑顔で参加しなければなりません。聖餐式も同じです。イエスさまは、わたしたち罪人が本当は受けなければならなかった神の罰を身代わりに受けてくださいました。イエスさまがわたしたちの代わりに十字架にかかってくださり、死んでくださったことによって、わたしたちの罪がゆるされました。わたしたちは、イエス・キリストが十字架の上で示してくださった愛によって救われたのです。わたしたちに求められることは、それらのことを喜びつつ聖餐式に参加することです。

わたしたちの教会では聖餐式を毎月(　)回行っています。毎週日曜日に行っている教会もあります。聖書のどこを探しても、聖餐式は年に何回行なわなければならないという決まりは見つかりません。そのことよりも、わたしたちにとって大切なことは、聖餐式が行われる礼拝には、必ず出席するように努力することです。ただしこれは「聖餐式が行われない礼拝は欠席してもいいです」という意味ではありません。

聖餐式では、パンとぶどう酒が配られます。今日はとくに、ぶどう酒の話をします。前にもお話ししたことがありますように、ぶどう酒の代わりにぶどうジュースを用いている教会も、たくさんあります。どちらでなければならないという決まりはありません。大切なことはお酒かジュースかではなく、色であると言われます。イエスさまは「これはわたしの血です」と言われながら、ぶどう酒を配られました。それは、ぶどう酒が血の色の飲み物だったからです。

「え？　赤い飲み物ならなんでもいいのですか。トマトジュースやアセロラドリンクでもいいのでしょうか」という質問が出てくるでしょうか。難しい問題です。イエスさまが最後の晩餐のときに用いられたのが「ぶどう酒」だったので、教会は伝統的にぶどうを用いて来たのです。

そして、ぜひ安心してほしいことは、わたしたちの教会の聖餐式のぶどう酒（またはぶどうジュース）は「これはわたしの血です」と言いながら配られるものであっても、血なまぐさい臭いがするわけではありません。聖餐式の司式者（牧師）はぶどう酒を血に変える手品師ではありません。聖餐の食卓にはぶどうのさわやかで豊かな香りがあふれています。それは人の心を幸せにする、祝いの席にふさわしい香りです。

〈お祈り〉

神さま、今日は聖餐式がお祝いであることを学びました。その幸せな聖餐式にわたしたちも参加することができるように導いてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

11月8日　「聖　餐」　　中学科

〈ねらい〉

〇聖餐とは何を指すか理解する。

〇聖餐を受けることによってどのような恵みが与えられるか理解する。

〈展開例〉

質問１　ペトロの勧めを受け入れた人々は、何に熱心であったとあるか。

質問２　パンを裂くこととは、具体的に何をすることを指すか。

質問３　子どもカテキズムの問74によれば、聖餐とは何であると書いてあるか。

質問４　これをすることによってどうなると書いてあるか。

質問５　子どもカテキズムの問75によれば、どのような人は、聖餐にあずかれないと書いてあるか。

まとめ

ペトロの説教を聞いて悔い改めた3000人の人々は、洗礼を受け、仲間に加わり、使徒の教え・相互の交わり・パンを裂くこと・祈りに熱心であったと記されている。ここで挙げられている彼らが熱心であったこととは、それぞれ、使徒の教えとは、御言葉を学ぶこと、相互の交わりとは、信徒同士の交わりや支え合いを、パンを裂くこととは、聖餐式、祈ることとは、文字通り祈ることを指している。子どもカテキズムの問74によれば、聖餐とは、パンとぶどう液を用いて臨在のキリスト・再臨のキリストを覚える礼典であると記されている。これを行うことによって、キリストとの交わりが深められる。また、問75によれば、信仰告白をしていない人・受洗していない人・教会が受けてはいけないと決めた人は聖餐に与ることができない。キリストに対する信仰を公に告白して、キリストと結ばれている人のみがそれに与ることができる。聖餐は、目に見えない神の恵みを、見えるものを通して私たちに生き生きと教えるために神がお決めになったことである。まだ聖餐に与れない子どもたちには、早く与れるよう勧め、神の恵みによって導かれるよう祈りたい。

〈祈り〉

神様、聖餐の恵みを私たちに与えてくださって、ありがとうございます。私たちは、理解する力が鈍く、恵みをすぐに忘れてしまう愚かな者たちでありますが、目の前にあるパンとぶどう液を五感で味わうことにより、生き生きとあなたの恵みを実感することができます。まだ聖餐式に与れない子どもたちが一人でも多く、一日でも早く、共にこの恵みに与れるようお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。

11月15日　「祈りとは何か（一）」　　聖書研究

テキスト　　創世記　12章1〜9節

〈はじめに〉

与えられた箇所は、既に第9号および21号において豊かに取り扱われています。いずれも「救いの歴史」を軸にしたカリキュラムのために選ばれたものです。しかし、今回は、「子どもカテキズム」のカリキュラムにおいて「祈りとは何か」を学ぶために選ばれています。

〈世界史からイスラエルの救いの歴史へ〉

第11章までは、人類の歴史について記されています。第12章からは、神の選びの民であるイスラエルの救いの歴史が記されてまいります。その突端に立つのがアブラハムです。このアブラハムからイスラエル民族が起こり、その頂点に主イエス・キリストが現れ、遂にキリストの教会が起こされ、今日の私どもに至ります。救いの歴史を物語るとき、この箇所は、決定的に大切です。

〈召命〉

アブラハムは、父テラが70歳のとき、その長男として誕生しました。テラは、家族を連れて、故郷のカルデア地方のウルの町を離れます。カナン地方を目指し、ユーフラテス川の下流に沿うようにして旅を続けます。ついに、直線で1000キロ以上にもなるハランにたどり着き、そこを「終の棲家」として、205年の生涯を終えました。

しかし、神は、父テラが145歳、アブラハムが75歳になったとき、「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい」(1)と語られました。神は、アブラムがハランに留まり、父と共に暮らすことを許さずに、神御自身が示す地まで行くことを命じられます。こうして、アブラハムは、神の呼び出しに従って、父が最初に願って出発した地、カナンの地を目指して出発します。

アブラハムがどのような人物であったのか、聖書には、ほとんど何も記されていません。そのことは逆に、神が御自身の御心を実現するために選ばれる人間とは、選ばれる側の人間的な優劣とは無関係であるということが鮮明にされます。

〈すべては、神の呼びかけを聴くことから始まる〉

アブラハムは、シケム、ベテルとアイの間、ネゲブと旅を続けます。そしてシケムにおいて、「あなたの子孫にこの土地を与える」(7) との約束を受け、最初の祭壇を築きます。さらにベテルとアイの間の地にも祭壇を築き、主の御名を呼びます(8)。祭壇を築くのは、神を礼拝するためです。そこで、主の御名をお呼びするためです。

これらすべての行為が繰り返し明らかにすることは、アブラハムに呼び掛けられた神への応答でした。信仰は、神の御言葉を聴くことによって始まります（10:17)。アブラハムは、自分の名をお呼びくださる主なる神を信じました。自らも主の御名をお呼びしました。こうして、主のお働きに応答し、神との対話を深めることによって、信仰が深められ、信仰とはいかなるものであるかを証しする人とされました。アブラハムは、信仰者の父と呼ばれます（ローマの信徒への手紙第4章参照)。血統上のことだけではなく、真の神を信じるということの「原型」を指し示しているからでもあります。彼の人と生涯は、御言葉の作品にほかなりません。

〈黙想〉

子どもたちの信仰の教師として召されている私どももまた、神に名前を呼ばれています。主の日ごとに、新たな祭壇を築く思いで、真実の神礼拝を子どもたちと共にささげることへと召されています。礼拝式の中心に、御言葉の朗読と説教があります。御言葉を聴くことは、対話としての祈りの前提です。いえ、すでに祈りそのものです。それだけに、子どもたちに聴かれ、届く言葉を編むための、私どもの祈りの準備が問われています。第一に、神の語りかけを聴き、子どもたちの心の声をも聴くことが必要です。　　（相馬伸郎）

11月15日　「祈りとは何か（一）」　　カテキズム研究

カテキズム　　子どもカテキズム 問76

子どもカテキズム
問76　お祈りとは何ですか。
答　神さまにお話しすることです。
そのためには、まず神さまからの御言葉に聴くことが必要です。
信じることは祈ることです。
参考教理問答　ハイデルベルク信仰問答117

〈神様とお話しすること〉

祈りとは「神様とお話しすること」だと言われています。このとき、「神様」という対象があることが大切です。キリスト教ではない無宗教の人々が祈るような祈りにおいては、そこには「神様」という対象が不在ですから、祈りの相手は誰でもよいわけです。そこでの祈りは、祈りの対象に対してよりも、むしろ自分自身に向けられ、自分の内的関心に集中しながら、そこにある自分自身の願い事が何者かによって実現されることを念ずる祈りとなります。それは自己中心的な祈りと言えるでしょう。

しかしキリスト教的祈りとは、「神を神とする」ことの中で、自分にではなく神様に向かって為される、神中心的な祈りです。そこでは第一に神様が問題なのです。これは「主の祈り」が、「天にます、我らの父よ、願わくは、御名を崇めさせたまえ」という神様への頌栄と崇敬をもって始められていることからも明らかです。

そして、そのような崇敬をもって「神様とお話しすること」は、当然のこととして感謝と賛美を含む祈りを生み出します。祈りにおいて私たちに向き合ってくださる神様は、敵でも味方でもない中立的な立場で向き合われる方ではなく、何をおいてもイエス・キリストにあって私たちを救ってくださった救いの神、それゆえに私たちの味方になって、深い愛で愛してくださる愛の神です。よって、この神様は、一瞬たりとも賛美と感謝に値しない方として私たちの前に立たれる神様ではありえないのです。神様への祈りには、至極自然に感謝と賛美が伴います。

さらに「お話すること」と記されているように、キリスト教的祈りは、本来的に瞑想や黙想なのではなく、具体的な言葉を介した神様との人格的対話であるということも忘れられてはならないことです。

〈まず神様からの御言葉に聞くことが必要〉

この節は、条件文として「神様とお話すること」というその前の節の内容を規定しています。ハイデルベルク信仰問答117問は、「神に喜ばれ、この方に聞いていただけるような祈りには、何が求められますか」という問いへの答えとして、第一に「御自身の御言葉において私たちに啓示された唯一のまことの神に対してのみ、この方がわたしたちに求めるようにとお命じになったすべての事柄を、わたしたちが心から請い求める、ということ……です」と答えています。つまり、子どもカテキズムも同様に語っているように、正しい祈りの条件は「聖書」です。聖書においてのみ、私たちは正しい神を認識可能です。そして、もし聖書を外れて祈りをなす時には、どれほど熱心にそれが為されたとしても、その祈りは正しく神様に向かわない祈り、自己中心的な祈りへとそれて行かざるをえないのです　　（吉岡契典）

11月15日　「祈りとは何か（一）」　　説教展開例

テキスト　　創世記　12章1〜9節
参照カテキズム　子どもカテキズム　問76

〔単元のねらい〕

私どもの働きの目標を、一言で定義づけるなら、「お祈りできる子どもに育てること」とすることもゆるされると思います。キリスト者の生活とは、祈りの生活だからです。「信じることは祈ること」です。ですから、祈りは、キリスト者の歩みの最初であり最後でもあります。最高の祝福であると同時にまた地上に生きる限りの課題でもあります。その意味では、二回の学びだけで終わるわけにはまいりません。むしろ、毎週の子どもとささげる礼拝式こそ、祈りの最大の学びの現場です。祈りの頂点は、主の日の礼拝式です。礼拝式を大きな祈りとすれば、個人の祈りは、小さな祈りです。そしてこの小さな祈りは、大きな祈りの中で支えられ、育まれます。そして、礼拝式の中でその最高（最上）のプログラムは、聖書朗読でありなによりも説教です。つまり、説教を聴くことも「祈り」なのです。説教聴聞なくして祈りは成り立ちません。聴くことから既に始まっていることを子どもたちに伝えたいと思います。

「お祈りの始まり、それはきちんと御言葉を聴くこと」

今朝は、アブラハムという人のことを学びましょう。このアブラハムさんは、すごい人です。何故かというと、神さまがこのアブラハムさんにすばらしい契約をあたえてくださったからです。神さまは、こう約束されました。「世界中の人間は、あなたによってわたしの祝福を受けることができます」。つまり、神さまの救いは、アブラハムさんとアブラハムさんの子どもたち、子孫に受け継がれ、こうして世界中の人たちがアブラハムさんのおかげで、神さまの子どもとされるというのです。イエスさまも、このアブラハムさんの子孫としてお生まれになったのです。

それなら、このアブラハムさんは、どんなにすごいことをやってのけたのでしょうか。誰も真似のできないような偉大な仕事を成し遂げたのでしょうか。勇気にあふれ、元気にあふれ、頭もよくて、人柄もよくて、そしてハンサムで……、これまでに生まれた人間の中で一番、ステキで、すばらしい人だったのでしょうか。

少しは当たっているかもしれませんが、それほどでもありません。実は、よくわからないのです。聖書には、何も書いていません。ただ、神さまが、アブラハムを一方的に選んで、お言葉をかけてくださったのです。しかも、そのとき、アブラハムさんは75歳、おじいちゃんって、言ったって怒られませんね。

そんなアブラハムに、神さまは、いきなり、「生まれ故郷を離れなさい。自分が生まれ育った懐かしいふるさとを捨てなさい」、こう、お命じになられたのです。

おそらく、アブラハムさんが暮らしていた町の人々は、月とか星とかの偶像を礼拝していたからだと思います。ところが、そんな中でも、アブラハムさんは、真の神さま、天地の創造者なる神さまだけを信じていました。

皆さんの中でも、クラスのお友だちの中で、教会に来ているのは、自分ひとりというお友だちもいるでしょう。それは、寂しいですね。教会に誘っても、来てくれないと悲しいですね。何よりも、たいへんにつらいこともあると思います。クラスの中で真の神さまのことを知っている人が一人もいないと、教会に誘うのも勇気が必要でしょう。

アブラハムさんは、もっともっとたいへんでした。僕たち私たちなら、どんなにつらくても、こうやって日曜日には、教会に来て、イエスさまを、

礼拝できます。一人ぼっちではなく、教会のお友だち、先生たちが待っていてくれて、迎えてくれます。ところが、アブラハムさんには、聖書がありません。聖書の御言葉を語ってくれる牧師先生もいません。教会がないのです。先生には、想像もできないほどです。どれほど、神さまを信じること、従うことが難しかっただろうかと思います。

けれども、アブラハムさんの心は、いつも神さまに向いていました。どうしてそう思うかというと、突然の神さまの招きの言葉を聞いたとき、すぐ、それに従えたからです。75歳の人です。皆の何倍も、ずーっとその町で、その町の人たちと生きて、生活してきたのです。それなのに突然、自分の故郷を離れなさいと語られました。

いつも心を神さまに向けていなかったら、「こんなおかしな声が聞こえた。ああ、もう年をとってしまったなぁ、とうとう耳も悪くなってきたなぁ」と考えることもできたかもしれませんよ。けれども、アブラハムさんは、聞き逃しませんでした。「これは、神さまの声だ、神さまからのご命令だ」と受け止めたのです。それは、ずーっと、神さまのことを考え、神さまのことを思い、神さまとお話してきたから、わかったはずです。

今日のカテキズムは、お祈りについてでした。「お祈りとは何ですか。神さまにお話することです。」つまり、アブラハムさんは、これまでずーっと神さまとお話をしてきたから、こんな驚くような命令にも、さっと従えたのです。毎日、お祈りしていなければ、神さまの御声をきちんと聴きとることも、それだけではなく、聴いてその通りお従いすることなどできません。

アブラハムさんが、偉大な人になったのは、神さまにそのようにしていただいたのは、実に、お祈りする人だったからです。毎日、お祈りしていたからです。神さまは、もっともっと、お祈りできる人、神さまとお話できる人にならせようと、このアブラハムさんを導いて行かれました。

僕たち私たちも同じです。真の神さま、イエスさまを信じる人は、お祈りする人です。お祈りは、神さまとお話することです。そのためには、まず、神さまの方が語り始めてくださるのです。これは、とっても大切なことです。お祈りは、僕たち私たちの方から始めることはできません。神さまの方が、始めてくださるのです。それは、聖書を通して、何よりも今朝、皆でしているように聖書のお話を聴くことによって、神さまは、僕たち私たちに語りかけてくださっています。お話をしてくだるのです。神さまは、「わたしは、あなたを愛しています。あなたを祝福しています。あなたは、わたしの愛する子どもです。あなたは、わたしの宝物です。わたしは、今日まで、そして明日からもあなたを守り、いっしょにいます。」こう、話かけてくださるのです。そしたら、僕たち私たちは、「ありがとうございます」と返事をしたくありませんか。「神さま、天のお父さま」と返事をしたいと思いませんか。そうやって、神さまとの会話、お話は深くなって行くのです。それをお祈りと言います。今、僕たち私たちは、神さまからのお話を聞きました。それなら、お返事しましょう。それがお祈りです。神さまから御言葉を聞いて、そして僕たち私たちも自分の言葉で感謝や讃美やお願いをする、今、先生と一緒に、お祈りしましょう。

(相馬伸郎)

〔今週の暗唱聖句〕　創世記 12章8節後半

そこにも主のために祭壇を築き、主の御名を呼んだ。

11月15日　「祈りとは何か（一）」　幼稚科

〈ねらい〉

物語を通して、アブラムさんは神様の言葉を聞き、神様の言葉通りに従っていったことを知る。神様が、いつも語りかけていてくださること、お返事をしお話し出来る喜び、うれしさをいっしょに覚える。

〈展開例〉

物語（絵本）の読み聞かせ（123ページ参照）。

場面ごとの対比を強調するため、見開きのページを最初から見せないで、お話に合わせて開く。

【神様とおはなしするひと】

①ずっと遠い、ウルというところに、アブラムというひとがすんでいました。ウルというところには、月を神様だと信じている人がたくさんいました。でも、アブラムさんは「ほんとうの神様」「主」を知っていました。

②ある日、主はアブラムに言われました。「あなたは、あなたの生まれたとち、お父さんの家を出なさい。そして、わたしがあなたに行きなさいというところへ行きなさい。わたしは、あなたに大きな喜びをあたえよう。その喜びは、あなたをとおしてたくさんの人にあたえられます」。

③アブラムさんは、かみさまのおことばどおりに、お父さんの家を出発しました。奥さんのサライさん、おいのロトさんもいっしょです。らくだや、羊たちもいっしょに連れて行きます。

④アブラムさんたちは、かみさまのおことばどおりにすすみます。夜になるとひとやすみ。でも、またあさになればすすみます。毎日、毎日、かみさまのおことばどおりにすすみます。

⑤アブラムさんは、どんどんすすんで、カナンという土地に入りました。「さて、木陰で休もうか」。アブラムさんが、モレという樫の木の下に近づくと、主が現われて言いました。「今、あなたがいるこの土地を、あなたの子どもたちにあたえよう」。そこは、とってもすばらしい土地です。おいしいたべものもたくさんとれます。

⑥アブラムさんは、主があらわれてくださった木の下で、礼拝をささげました。そして、近くに寝るためのテントを作りました。アブラムさんは、そこでも礼拝をささげ、主の「おなまえ」を呼びました。

「わたしは主、あなたの神です」の神様は、アブラムさんの名を呼んでお話してくださったように、わたしたちにも今、「わたしの愛する大切な子、○○ちゃん。わたしは、あなたと昨日も今日もそしていつまでも、いっしょにいます」と毎日呼んでくださり、せいしょのお話を通して、話しかけていてくださいます。うれしいね。

「てんのお父さま。（わたしの主、神さま）」。かみさまのお名前を呼んでお返事し、みんなでお祈りしましょう。

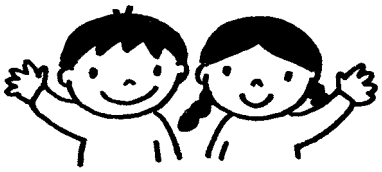
〈暗唱聖句〉

「アブラムは、そこでも主の御名を呼んだ」

創世記12章8節

〈お祈り〉

てんのおとうさま、ありがとうございます。教会にいるときも、おうちに帰ったときも、神様の言葉を聞いて、お返事します。忘れないで、毎日できますように。イエスさまによって、アーメン。



11月15日　「祈りとは何か（一）」　　小学科下級

〈ねらい①〉

だれにお祈りをしているのか、祈りの対象を明確にすることで、異教的誤解から守る。

〈展開例①〉

みんなはどんな時にお祈りしていますか？食事の前、寝る前etc、色んな時がありますね。そんな時、神様にどういう風に呼びかける？「天の父なる神様」って呼ぶ人が多いかな？

クリスチャンではなくても、お祈りをする人はこの世界にいっぱいいます。仏像の前でお祈りする人も、神棚の前でお祈りする人もいます。残念ながら、それは全部間違っています。また、ある人は、お祈りの相手なんて誰でもいいって思っています。でもそれでは、自分で自分にお話しているのと同じですね。どんなに一生懸命祈ったって、おかしいだけです。

お祈りは、イエス様を通して私たちを罪から救ってくださった神様にするものです。イエス様を与えてくださったほどに、私たちを愛してくださる神様。私たちを神の子としてくださった、天のお父様にお話することがお祈りです。

〈ねらい②〉

祈りは神様とのお話という、子どもカテキズムの理解を確認する。また、お話のためには、神の言葉を聞く必要もあるという自覚を導く。

〈展開例②〉

お祈りは、天のお父様になってくださった神様とお話しすることです。みんなはお父さんとお話する時どうするかな？ 学校でうれしかったこと、辛かったこと、友だちのこと、勉強のこと、なんでもお話できる？ お父さんと何でもお話してお願いできるという人は、とても幸せです。でもそういう人ばかりじゃないよね。「こんなこと言ったら怒られるかも……」。「お父さんなんて、疲れた疲れたばっかり言って、全然話もしてくれない……」。きっとそんな人もいるよね。でも天のお父様には何でもお話していいのです。こんなにすばらしいことがあった、ありがとう。こんなに悲しいことがあった、慰めてください。今このことにがんばっているのです、助けてください。なんでもお話して、お願いしよう。

そして、お話するということは、神様のほうでもお話してくださるということです。神様の言葉も聞かなければいけないよ。一人で話すだけなら、お話にならない。でも神様は、直接耳に聞こえるような声で話してはくれないね。神様はどうやって話しかけてくださるのだろう。神様の言葉、それは聖書に書かれています。聖書を読めば、神様が今私たちに話しかけようとしていてくださることが分かりますよ。だから、神様とお話するためには、お祈りといっしょに聖書を読むことが大事なんですよ。

〈祈り〉

神様。私たちはあなたに色んなお話をします。いつも聞いていてください。そしてあなたのお話も聞かせてください。聖書を一生懸命読みますから、私たちにあなたのお言葉を教えてください。

11月15日　「祈りとは何か（一）」　　小学科上級

〈ねらい〉

祈りとは、神との会話。この会話においてこそ、相手の話を聴くことが決定的に重要である。御言葉を聴き、読むことがすでにお祈り、語りかけられ、呼ばれていることに気づき返事をすることが祈りの始まりであることを共に知ろう。

〈展開例〉

・〇〇ちゃんは、お祈りしたことがありますか。皆、お祈りしたことがありますね。本当にすばらしいことです！ 先生は、「人間にとっていちばんすばらしいこと、うつくしいことは、神さまにお祈りすること、お祈りしている姿だ」って、聞いたことがあります。皆が、お祈りしているのを見ると、本当に、そうだと思います。先生も、自分がお祈りできること、それだけで感動することがあります。これって、すごいことなんだと分かるからです。天地の創造者の神さまに、自分の思いを打ち明け、お話できるなんて、最高の恵みだと思います。皆にも、そんな感動が伝えられたらうれしいなと思って、子どもの教会の先生をしているのです。

・今日のカテキズムをもう一度、読んでみよう。お祈りとは何ですか……。「神さまにお話すること。」それを会話って言います。先生やお友達や家族の人にお話することは、誰でもできるでしょう。特に、お友達にお話するとき、考えに考え、やっとの思いでするなんて、あまりないのではいかな。お祈りは、神さまとの会話です。

・友達に、自分の方から、機関銃のように、バババッと話して、「ジャアまたね、バイバイ！」て、終わったらどうなりますか。お友達と仲良くするには、どうすればよいですか。そう、大切なことは、お友達が言いたいことを、ちゃんと聞いてあげることですね。そして、自分の気持ちも正直に、話せたら、二人の間に友情が生まれると思います。

・お祈り、つまり、神さまにお話するためには、まず、神さまからのお話を聞くことが大切ですね。特に、神さまとお話するのですから、聴くことがないと始まりません。今日の礼拝のお話をしっかり聞けましたか？　お祈りができるようになるためには、どうしても必要なことがあります。神さまのお話を聞くことです。聖書を読むことも、神さまからのお話を聞くことです。だったら、お話をよく聴くこと、それは、もうお祈りをしていることだよね。子どもの礼拝の中で中心になるプログラムは、何だと思いますか？説教ですね。説教を聴くことは、お祈りしていることになるわけです。先生も説教するときがあります、それは、皆に自分の口でお祈りできるようになってほしいと願っているからです。それができたら、最高にうれしいです。

・友達になるためには、心を開くことが大事だけど、自分から始めるのは、勇気が必要だね。イエスさまは、私たちの友達となってくださるために、心を開いてくださいました。天のお父さまは、私たちを今日も、「わたしの愛する子ども」と呼んでくださいます。名前まで呼んでくださっています。返事をすることがお祈りです。今朝、アブラハムさんだけではなく、先生にも皆にも、神さまが話しかけ、名前を呼んで下さいました。今、みんなで、自分の口で、言葉で、返事をしたいと思います。

〈お祈り〉

天の神さま、私たちの方が、「天のお父さま！」とお呼びするから、神さまは聴いて下さるのだとばかり考えていました。けれども本当は、神さまの方が、「愛する子ども！」と私を呼んでおられます。今、大きな声で、「天のお父さま！」と、返事をします。神さまをお呼びします。後、何を話せばよいのか、分からないときがあります。そんなときこそ、神さまの子どもらしく、なんでもお話できるように、ならせてください。アーメン。

11月15日　「祈りとは何か（一）」　　中学科

〈ねらい〉

〇祈りとは何かということを理解する。

〇なぜ祈るためには神の御言葉にまず聴くことが大切なのかを理解する。

〈展開例〉

質問１　神は、アブラムにどうせよと言われたか。

質問２　アブラムは、それに対してどう応答したか。

質問３　神がアブラムに現れた後、アブラムは何をしたか。

質問４　子どもカテキズム問76によれば、祈りとはどうすることであると記されているか。

質問５　なぜ祈るためには、神の御言葉に聴くことが大切なのか。

まとめ

主はアブラムに、父の家を離れ、主の示される土地に行けと命じられた。また、アブラムを大いなる国民とし、地上の氏族のすべてが彼によって祝福されると約束された。アブラムは、家族を連れて、御言葉の通りにハランを旅立ち、カナン地方に入るが、そこで主はアブラムに現れて、彼の子孫にその土地を与えると約束される。アブラムは、主のためにそこに祭壇を築き、ベテルの東の山へ移った後、そこでも祭壇を築き、主の御名を呼んだ。アブラムの生涯は、神に呼ばれ、それに応答するということの繰り返しであった。子どもカテキズムの問76によれば、祈りとは、まず神の御言葉に聴き、その後、神に語ることとある。私たちは、ともすれば自分の要求ばかりを神に突き付け、神の御言葉に真剣に耳を傾け、それに従おうとする思いの薄い者である。まず御言葉に聴いて、神がどのような方であるか、神の御心は何かということを知らない限り、私たちの祈りは自己中心なものにならざるを得ない。まず神の御言葉を聴き、それに学びつつ従いつつ私たちの願いを神に語る、それが真の祈りである。祈りに熱心に励む者とさせていただきたい。

〈祈り〉

神様、祈りというあなたと交わる手段を私たちに与えてくださって、ありがとうございます。私たちは、あなたの前に立つ資格などない罪に汚れた者でありますが、あなたは私たちを愛して、私たちの祈りに耳を傾けてくださいます。あなたの御愛に心から感謝いたします。私たちがまずあなたの御言葉に聴き、それに学び、従い、あなたの御心にかなう祈りをする者となることができるようどうかお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。

11月22日　「祈りとは何か（二）」　　聖書研究

テキスト　　使徒言行録　12章1〜17節

今回の聖書個所でわたしたちは、使徒ペトロが牢獄から救い出された出来事を見る。それは教会を迫害しようとするヘロデ王とユダヤ民衆のあらゆるもくろみからの主の救いであった（11）。そして、この救いの背後には、信者の熱心な祈りがあった（5）。

〈ヤコブの殺害とペトロの投獄〉

冒頭の数節で、ヘロデ王（アグリッパ1世、ヘロデ大王の孫）がヨハネの兄弟ヤコブを殺害したこと、そしてユダヤ人がそれを喜んだことが報告される。ステファノの殉教以後、明らかにユダヤ民衆の間にキリスト者に対する不満・憎悪の念が高まっていた（8:1b）。これは民族を超えたまことの救いを提示するキリストの福音が、ユダヤ人の民族感情と選民意識を刺激したからだ。

ユダヤ民衆の支持を得ることは、ユダヤの支配者としての自らの政治的立場の強化につながる。ヘロデ王は、次の標的として使徒ペトロに狙いを定めた。殺害のタイミングは、ユダヤ民衆にもっともアピールしやすい過越祭。そのとき彼らの前にペトロを差し出せば群衆は、かつてイエスに対して叫んだように、「十字架につけろ、十字架につけろ」と叫ぶだろうか？　その時までペトロは「四人一組の兵士四組」（4）による厳重な監視の下に置かれることになった。

〈ペトロの救出〉

6節からペトロが牢獄から救い出された経緯が描写される。それは刑の執行を翌日に控える夜に起きた。主の天使に促されるままにペトロは牢を出て、二つの衛兵所を通り過ぎ、町に通じる鉄の門を抜けて、通りを進んでゆく。番兵は誰一人としてペトロの脱獄に気づかない。救い出されたペトロ自身でさえ現実のこととは思えない、幻のような出来事であった。

しばらく通りを進み、天使が離れ去ったとき、ペトロは我に返って、この奇跡の意味を悟る。「今、初めて本当のことが分かった。主が天使を遣わして、ヘロデの手から、またユダヤ民衆のあらゆるもくろみから、わたしを救い出してくださったのだ」（11）。

〈熱心な祈り〉

さて、ゼベダイの子ヤコブに続いて、使徒の筆頭ペトロをも失おうとしている危機的状況の中で、教会では何が行われていたのか。それは祈りであった。「教会では彼のために熱心な祈りが神にささげられていた」（5b）。

では、彼らが神にささげていた「熱心な祈り」とはどのような祈りだったのか。ここで「熱心」と訳されている言葉（エクテノース）が他の聖書個所でどのように使われているかを調べてみると興味深いことがわかる。類縁の言葉を含めても新約聖書では以下の4個所に見られるだけで、新共同訳ではかなり意訳されている。「……、清い心で深く愛し合いなさい」（ペトロ一1:22）、「……、心を込めて愛し合いなさい」（同4:8）、「……、昼も夜も熱心に神に仕え、……」（使徒26:8）、「……、いよいよ切に祈られた」（ルカ22:44）。

これらの聖書個所の中でとくに覚えたいのは、聖書本文の信頼性にやや問題はあるものの、やはり最後のルカ22:44である。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください」という、十字架の道を前にした主イエスの祈りの場面。そのとき弟子たちは眠り込んでいた。しかし弟子たちは今、主イエスにならって切に、熱心に祈っているのである。

祈りに関して覚えておくべきことがもうひとつある。それは祈りが聞かれることへの確信についてである。ルカは、ペトロのために熱心に祈りながらも実際に彼が救い出されたことをすぐに信じられなかった信者たちの姿を描く（15,16）。これはわたしたちの祈りの姿勢を問い直す。

（唐見敏徳）

11月22日　「祈りとは何か（二）」　　カテキズム研究

カテキズム　　子どもカテキズム　問76

子どもカテキズム
問76　お祈りとは何ですか。
答　神さまにお話しすることです。
そのためには、まず神さまからの御言葉に聴くことが必要です。
信じることは祈ることです。
参考教理問答　ハイデルベルク信仰問答128

〈信じることは祈ること〉

1.「アーメン」によって確実なものとされる祈り

ハイデルベルク信仰問答の問128は、「主の祈り」における「アーメン」という言葉について次のように説明しています。「アーメンとは、それが真実であり、確実である、ということです。なぜなら、これらのことを神に願い求めていると私たちが心の中で感じているよりもはるかに確実に、わたしの祈りはこの方に聞かれているからです」。

これは「主の祈り」だけでなく、すべての祈りに妥当することです。私たちが祈りの終わりに「アーメン」と祈りを結んでいること自体が、私の祈りが明確に神様によって責任を持って聞き届けられ、神様はこの祈りに対して誠実なる導きをもって答えてくださるという確信と信仰とを既に含んでいるのです。

2. 優しい父としての神様に、御名によって「アッバ」と祈る

では、祈りにおいて、私たちはどういう方に対して祈りつつ、「アーメン」とその祈りを結ぶのでしょうか。主イエスは神様に対して「アッバ」と呼びかけて祈られましたが、この「アッバ」とは、子どもが親しさの中で父親を呼ぶ際の呼称です。そして神の御子主イエスのみでなく、この私たちも神様に対して「アッバ」と呼びかけて祈ることが許されています。さらに、それだけでなく、私たちは、「イエス・キリストの御名によって」祈ることができます。つまり、私たちは、キリストの名義を使って、あたかもキリストが父なる神様に親しく祈る祈りとして、自分の祈りを神様に祈りささげることが許されているのです。

そして、その祈りを聞いてくださる神様は、父親が愛する子どもに最善のものを与えるのと同様に、私たちにとって一番良いものを与え、私たちの祈りに対して最上の導きをもって誠実に答えてくださる、父なる神です（ルカ11:9〜13）。だからこそ、私たちは信じて祈ることができる。相手がこの神様であるからこそ、「アーメン」と祈り終えることができるのです。

3. 必ず聞かれている祈り

祈りが具体的に目に見える仕方でかなえられないということは、確かにあります。しかし、その現実をもって「祈りが聞かれなかった」と判断するのは誤りです。キリストの御名によって「アーメン」と祈った祈りは、必ず神様のもとに届いています。優しい父親として神様は、私たちの声にならない祈りをも漏らさず聞き取られます。祈りはあくまで自己中心的なものではなく、神中心的なものです。それは自分の思い通りに神様を動かすことではありません。神様は確かに祈りを聞き取って、時に私たちの思いを遥かに超えて最善の導きをもたらしてくださる方であり、私たちはその神様の、自分の思いを超えて大きな力を信じるからこそ、どんな状況にあっても希望を持って祈ることができるのです。　　（吉岡契典）

11月22日　「祈りとは何か（二）」　　説教展開例

テキスト　　使徒言行録　12章1〜17節
カテキズム　　子どもカテキズム　問76

〔単元のねらい〕

祈りは、主イエス・キリストとの交わりの通路です。神の恵みを受ける外的な手段です。御言葉の説教と聖礼典は、通常、教会における礼拝式において与えられるものですから、毎日、これにあずかることはできません。その意味で、「祈り」こそは、いつでもどこでも、どんなときでも信仰に基づいてなし得る、恵みの賜物です。ですから、信仰の生活は、まさに祈りと共に織りなされるものです。子どもたちに、祈りを身につけさせるために、共に、励みましょう。テキストは、祈りに応えてくださる神を豊かに証ししています。また、ここでも個人の祈りを包む教会の祈りに強調点が置かれます。不真実な私どもの祈りにすら、真実な神が、ご自身の栄光のために応えてくださることを、伝えましょう。子どもたちの心に届けるためには、教会に生きる説教者自身の祈りへの具体的な応答の「例話」が有効であり、不可欠にもなるかと思います。

「祈りは必ず聴かれている」

今日のお話は、ペトロさんが主人公です。このとき、ペトロさんは、牢屋の中に入れられていました。ユダヤの国を支配していたヘロデ王は、自分の言う通りにしないキリスト者たちが気に入りません。そこで、教会の指導者、ヤコブさんを剣で殺しました。すると、ユダヤ人たちは喜びました。ヘロデ王は、いよいよ調子に乗って、ついにお弟子さんの中でも一番の指導者のペトロをも捕まえ、殺そうとしました。

ペトロさんは、ローマの兵隊たちに捕まってしまいました。16人もの大男たちが、小さな剣、一つも持っていない、ペトロさんを見張っていました。それを知った教会は、熱心な祈りがささげられていました。「神さま、どうぞ、わたしたちのペトロ先生を、助けてください！私たちのところに取り戻してください！イエスさまのお名前によって、アーメン」。皆で心を一つに合わせて、そして心の底から、真剣に、何度も何度も、叫ぶように神さまに祈りをささげていました。

さて、その時、牢屋の中のペトロさんはどうしていたと思いますか。びっくりです！グゥグゥ、眠り込んでいたのです。爆睡です。暗くて冷たい牢屋ですよ。しかも、両足は二本の鎖でつながれています。さらに、左右には、ローマの兵隊がついているのです。

昔、イエスさまがいっしょに乗っていてくださった船が、嵐によって転覆しそうになったとき、ペトロは、眠っていたイエスさまを、必死で起しました。ところが今、自分が明日は、殺されるかもしれないという絶体絶命のピンチのときに、眠っています。

また、このペトロさんは、イエスさまが十字架につけられる前の夜、イエスさまのお弟子であることがばれてしまうのが恐ろしくなって、「あんなイエスなんか知らない」と言って逃げ出しました。ところが今、イエスさまのためなら死ぬことも、覚悟しています。

どうして、そんな弱虫の人が、こんなに大胆な人に変わってしまったのでしょうか。それは、ペトロさんがお祈りしていたからです。お祈りによって、聖霊なる神さまに満たされ、イエスさまが一緒にいてくださることを信じることができたからです。

さて、神さまは、先ほどの教会の熱心なお祈り

を聴いてくださり、天使を遣わされました。天使は、ペトロの脇腹をつついて起こします。ペトロさんは、眠い目をこすりながら、天使に言われるまま、天使の後について行きました。すると、どうしたことでしょう。鎖がはずれ、牢屋の扉が開きました。厳重な扉が、いくつもいくつも開いて行きます。最後の鉄の門まで、開いてしまいました。神さまの奇跡です。遂に町に出ました。

はっと気が付いて、大急ぎで教会の仲間たちの所にかけつけました。「ドンドン、ドンドン、わたしです。扉を開けてください。」女中のロデという人が、心配そうに扉に近づきました。もしかすると、ローマの兵隊かもしれないからです。ところが、「わたしです」との声を聞いて、びっくりしました。「あっ、ペトロ先生だ！」もう、あまりの嬉しさで、門を開けもしないで、家の中に駆け込みました。そして、お祈りしていた仲間たちに、「ペトロ先生が門の外にいらっしゃいます」と告げました。

すると、どうしたことでしょう。皆がこう言うのです。「ロデさん、あなたは気が変になってしまったのですか。あのローマの牢屋、あの厳重な見張りがついている牢屋から、抜け出せるわけはないでしょう……」

先生は、とっても不思議に思います。だって、教会の人たちは、熱心に何をしていたのですか。「神さま、ペトロさんを助け出してください。命を救ってください」。こう祈っていたのではないですか。ある人は、「神さま、あのヤコブ先生のように、立派にイエスさまのために死ねるようにしてください」とお祈りしたかもしれません。素晴らしいお祈りです。でも、そう祈りながらも、「神さまの御心なら、どうぞ、助けて、何としても助けて！」とも祈ったのではないかと思います。だったら、「ああ、神さまはお祈りに応えてくださったのだ！」とすぐに喜び、感謝するのが当たり前ではないですか。

でも、先生には、その気持ちも分かります。先生も、神さまにいろんなことで、お祈りします。それは、神さまは、天地をお造りになられ、今も力強い御手ですべてを支配し、守っておられる王の王でいらっしゃると信じているからです。……でも、その神さまでも、やっぱり、できないこともあるのではないかと、考えてしまうこともあるのです。

僕たち私たちの教会は、今から15年前に、ビルの一室を借りて、礼拝を始めました。そのとき、こんな説教の台も、イスも、オルガンもありませんでした。お金もなければ、教会の仲間だってほんのわずか、町の人たちの信用だってありません。でも、お祈りしました。「神さま、ここに神さまの教会を、イエスさまが約束されたように、この岩の上に教会をつくってください！」このお祈りをずっと祈り続けました。そうしたら、今朝のように皆さんがここにいるのです。

でも正直に言うと、途中で、何度もがっかりしたり、もう駄目だとあきらめかけるような時もありました。絶対、このように皆さんと礼拝できるようになると、確信できませんでした。ところが、神さまは、そんな、小さく、弱いお祈りを越えて、働いてくださったのです。ただ神さまにのみ、栄光がありますように！

僕たち私たちは、小さな祈り、弱いお祈り、短いお祈りしかできないかもしれません。でも、その祈りに耳を傾けておられるのは、天のお父さまなのです。神さまは、喜んで、真剣に耳を傾けていてくださいます。たとい私たちが自分のお祈りを忘れてしまっても、無理だろうなと思っていても、神さまの御心であれば、ちゃんと覚えていてくださって、もっとも良いときに、こたえてくださるのです。イエスさまのお名前で祈るなら、どんなに頑丈な扉でも、蹴破って、実現するのです。お祈りは、僕たち私たちの力ではなく、神さまのお力によって、こたえられるからです。

今週も、神さまは、僕たち私たちのお祈りを待っておられます。「いのちのパン」で、毎日、お祈りして行きましょう。　（相馬伸郎）

〔今週の暗唱聖句〕　使徒言行録 12章5節後半

教会では彼のために熱心な祈りが神にささげられていた。

11月22日　「祈りとは何か（二）」　幼稚科

〈ねらい〉

物語を通して、神様がペテロさんや、教会の人々にしてくださった出来事を知る。いつも、どこでも、どんなときも、神様を信じてお祈りするよう導く。

〈展開例〉

物語（絵本）の読み聞かせ（124，125ページ参照）。

場面ごとの対比を強調するため、見開きのページを最初から見せないで、お話に合わせて開くと良い。

【お祈りは聴かれている】

①イエスさまが天にあげられた後、お弟子さんたちは、聖霊を受け、力強くイエスさまのことを伝えていました。イエスさまのことを信じる人がたくさんおこされていきました。……ところが、そのことをよく思わない王様がいました。王様の名前は、ヘロデ。ヘロデ王は、お弟子さんのひとり、ヤコブさんを捕まえて、剣で殺してしまいました。そして、ユダヤ人たちが、それを喜ぶのを見て、今度は、もう一人のお弟子さんのペテロさんも捕まえて、牢屋にほうりこんでしまいました。

②16人もの兵士たちが、ペテロさんをギロリとにらんで、ずっと見張っています。

③そのころ、教会では、みんなが、ペテロさんのためにいっしょうけんめいお祈りしていました。「神様。どうか、ペテロさんを助けてください」。「神様。ペテロさんが殺されないように守ってください」。「神様。ペテロさんをわたしたちのところに戻してください」。「アーメン」（大きく長めに）。

④……さて、明日、殺されることになったペテロさんは、鎖に繋がれたままです。けれども、ペテロさんは、ふたりの兵士の間でぐぅぐぅ眠っていました。すると、そこに、神様の天使がきて……つんつんつん。ペテロさんのお腹の横をつついて、言いました。「ペテロ、急いで起き上がりなさい」。

⑤すると……ガチャンガチャン。鎖が外れて落ちました。天使は言いました。「わたしについてきなさい」。ペテロさんは、言われるとおり天使についていきました。兵士たちの前を通り、重い鉄の門もひとりでに開いて、外に出ることが出来ました。あんまり不思議な出来事に、ペテロさんは「きっと夢を見ているのだ」と思っていました。

⑥町に出ると、天使はペテロさんのそばから離れて行きました。「これは夢じゃない！神様が天使をおくって、わたしをヘロデ王の手から救ってくださったのだ！」。

⑦ペテロさんは、大急ぎで教会の仲間の家へ行きました。そこには、たくさんの仲間が集まってお祈りしていました。

⑧ドンドンドン！　ペテロさんは、家の戸をたたきます。「みなさ―ん。わたしはペテロです。神様が天使をおくって助けてくださいました！」。ドンドンドン！　教会の仲間たちは、おそるおそる戸を開けてみました。

⑨本当にそこにはペテロさんが立っていました。「神様は、わたしたちのお祈りを聴いていてくださったのだ！」。みんなはとてもびっくりしましたが、神様がなさったすばらしいこの出来事を喜び、神様を讃美しました。

【ポイント】

お祈りは必ず神様に聴かれている。神様は、いちばんよいものを与えてくださる。

〈暗唱聖句〉

「教会では、熱心にお祈りしていた」

使徒言行録12章5節後半

〈お祈り〉

てんのおとうさま。いつでも、どこでも、どんなときも、なんでも神様にお話しできますように。イエスさまを信じてお祈りできますように。イエスさまによって、アーメン。

11月22日　「祈りとは何か（二）」　　小学科下級

〈ねらい①〉

「信じることは祈ること」という子どもカテキズムの言葉に聞き、「祈ること」にはじまる恵み多い信仰生活に導く。

〈展開例①〉

みんなは何のためにお祈りするのだろう？牧師さんが、お祈りしましょうと言うからだろうか？お父さんやお母さんがお祈りしてるから、いっしょに目を瞑っているだけだろうか？

お祈りは大人にならないとできないものではありません。まだしっかりとしゃべれない3歳の女の子でも、「今日お休みしている〇〇ちゃんが元気になりますように」って、自分でお祈りしているのを先生は見たことがあります。神様にお話したいこと、お願いしたいことがあるから、人はお祈りするのです。

そして、お祈りは必ず神様に聞かれています。もし、お祈りが聞かれないなら、お祈りする意味がありません。もちろん、私たちの願いどおりに、いつもいつもかなうわけではありません。でも私たちがお願いしていたことよりも、もっと素敵な答えを、神様は必ず与えてくださいます。あなたは、それを信じますか？そういう神様の愛を信じる人だけが、お祈りすることができるのです。

〈ねらい②〉

祈りが聞かれたという体験を分かち合い、「祈る」という行為を、子どもたちにとってより身近なものとして受け取れるように導く。

〈展開例②〉

子どもたちに、祈りが聞かれたという経験がなかったか聞いてみる。

祈りが叶えられたことのないという子には、カテキズム研究、説教展開例を参考に、その祈りもまた神に聞かれているという確信へと導いてください。

何より、教師ご自身の確信に裏打ちされた祈りの姿こそが、子どもたちにとってよい模範となるでしょう。具体的な経験があれば、それを分かち合うことを通して、祈りについて話し合ってください。

〈祈り〉

神様。あなたは私たちの祈りを、いつも必ず聞いていてくださる。私たちに、それを信じる信仰を与えてください。私たちの心が弱い時にも、お祈りすることができる力をください。どんなときもあなたと共に歩んで、あなたとお話しながら成長していくことができますように。

11月22日　「祈りとは何か（二）」　　小学科上級

〈ねらい〉

祈りは、必ず聴かれる。神はその確信を、み言葉と体験を通しても与えて下さる。しかし、祈りの確かさは、イエスさまの真実（アーメン）にのみ由来する。祈りを励ますときとしたい。

〈展開例〉

〇〇ちゃんは、お祈りは、聴かれると思いますか？　聴かれると思う人、聴かれないと思う人、それぞれに、その理由を教えてくれると嬉しいです。みんなの役に立つと思います。

・・・・

ありがとう。聴かれると思う人は、きっと、お祈りがかなえられたという体験があるかもしれませんね。誰でも、自由に教えて下さい。

・・・・

すばらしいですね。ありがとう。先生の体験も聞いて下さい。

・・・・

さて、お祈りなんて独り言、聴かれているはずはないと考えるお友達は、残念です。先生はこう考えるのだけれど、どう思いますか？　信じないで、お祈りするなら、お祈りがかなえられていても、それに気づけないのです。

二つ目は、信じないお祈りは、神さまに喜ばれません。お祈りは神さまとの会話だと学びました。相手が聞いていないかのように、まるで相手がそこにいないかのように話をするのは、おかしいですよね。失礼ですよね。

でも、実は、〇〇さんだけではありません。今日のお話を思い出して下さい。教会の人たちは、ペトロが牢屋から救い出されるようにお祈りしていたのに、本当に、ペトロが出てきたとき、信じられませんでした。何故でしょうか？

・・・・

つまり、自分の信仰の強さ、熱い信仰だからかなえられるというわけではないみたいですよね。お祈りは、どうして聴かれるのですか？　それはイエスさまの恵み、聖霊なる神さまが働いてくださるからです。大切なことは、ひとつ。主イエスさまを信じることです。具体的には、イエスさまの御名を唱えて祈ることです。イエスさまは、いつも、私たちのためにお祈りしてくださっています。ご自分のお名前で、祈る祈りを、天のお父さまに届けてくださいます。それが、聴かれるということです。あなたのお祈りを支え、保証してくださるのは、イエスさまです。

お祈りの最後に「アーメン」と唱えるのは、「イエスさまのおかげで、祈りは聴かれています」という信仰の告白です。先生が「アーメン」と言うとき、皆も「アーメン」と言ってくれると励まされます。でも、イエスさまこそ、いっしょに「アーメン」って言って下さっていると信じています。すっごいことですよね！

ただし、「聴かれている」ことと、「かなえられる」こととは、別です。たとえば、皆がまだ小さな頃、わがままを言って、「これが欲しい、これが欲しい」と泣いてダダをこねたことがあるでしょう。そんなとき、「いつでも泣いて叫べば、こっちのもの。すぐに買ってくれる」と思いましたか。もしも、そんな親だったら、みんなのように良い子になれなかったと思います。天の父なる神さまこそ、私たちが願うものならなんでも、その場でかなえて下さるお方ではありません。もっとも良い時に、もっとも良い方法で、わたしたちの願いをはるかに越えて、すばらしくかなえて下さる神さまです。

最後に、お祈りは、会話です。「お願い事」よりも、神さまの御心を知り、神さまとの会話を楽しむことの方が、大切です。お祈りを楽しめるように、みんなで深めて行きましょう。

〈お祈り〉

天のお父さま、僕たち私たちが、お祈りできるのは、イエスさまのおかげです。イエスさま、これからもずっとわたしのためにお祈りしていてください。わたしも、イエスさまのお名前で、信じてお祈りします。アーメン！

11月22日　「祈りとは何か（二）」　　中学科

〈ねらい〉

〇私たちの祈りがいつも神によって聴かれていることを理解する。

〇私たちの祈りは、いつも最善の形で応えられることを理解する。

〈展開例〉

質問１　ヘロデは、ペトロをどうしたか。

質問２　ペトロは、どのように監視されていたか。

質問３　ペトロは、牢獄からどのように助け出されたか。

質問４　ペトロは、何を悟ったか。

質問５　ペトロが、ヨハネの母マリアの家に行った時、人々はそこで何をしていたか。

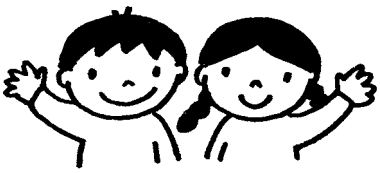
まとめ

ユダヤの領主ヘロデは、使徒ヤコブを殺害するが、それがユダヤ人に喜ばれたのを見て、次に第一の使徒ペトロを捕えにかかった。ペトロは、牢に入れられ、兵士16人に監視された。ペトロが引き出されようとする日の前夜、二本の鎖につながれ、二人の兵士の間で眠っていると、主の天使に起こされたが、その時、彼の手から鎖は外れ、外に出るまで門は次々にひとりでに開いていった。天使が彼を離れた後、ペトロは我に返って、主がヘロデやユダヤ群衆の手から天使を送って助け出してくださったと悟った。彼がヨハネの母マリアの家に行ってみると、そこでは、人々が大勢集まり彼のために祈りをささげていた。

神は、ペトロのために信徒たちがささげる祈りを不思議な形で聞き入れてくださった。私たちは、時として、全知全能の神にまるでできないことがたくさんあるかのように思い、不信仰に陥ってしまうことがある。この宇宙全体を創られた神には、小さな私たちの祈りをかなえることなど造作もないことである。しかし、愛する父として、神は、私たちに益になることのみを与えられる。たとい私たちが熱心に望んでも、それが私たちの益にならないことであれば、神はそれをかなえようとはなさらない。私たちの祈りは確かに神によって聴かれている。しかし、私たちの望むものが与えられるかどうかは、神が私たちの益になるかどうかによってお決めになることなのだ。このように愛をもって私たちの祈りに耳を傾けてくださる神を私たちの神としていただいていることを感謝したい。

〈祈り〉

神様、私たちの祈りにいつも耳を傾けてくださって、ありがとうございます。私たちは、いつも自己中心でわがままな祈りをしてしまうような愚かな者ですが、あなたは愛する父として、私たちにとっての最善のみを実現してくださいます。あなたの愛の御手にいつも信頼しつつ、常に信仰をもって祈りをささげる者とならせてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



11月29日　「待降・ダビデとの契約」　　聖書研究

テキスト　　サムエル記下　7章8〜17節

〈ナタン預言〉

7章4〜17節は「ナタン預言」として知られ、その内容に「ダビデ契約」を保つ、イスラエル救済の歴史の中心に位置する重要な箇所である。この契約の当事者はイスラエルの王に選ばれたダビデであり、宮廷で活動した預言者ナタンが神の言葉を仲介した。ナタンはダビデの子ソロモンの教育係であり（サムエル下12:25)、歴代誌ではダビデやソロモンの年代記を記した人物とも紹介される（歴代上29:29、下9:29)。王への近さが預言者の職務を曖昧にしなかったことは、バトシェバとの密通によってダビデが重大な犯罪に手を染めたとき、彼が王におもねることをしなかったことで明らかである（サムエル下12章)。本段落でナタンの告げたダビデへの約束は、神の言葉として取り消すことができない。

〈主の御業を記念する〉

預言の前半部4〜7節では、主のために神殿（原文：家）を建てたいとの申し出に対して主が断っている。主の家は人の思いが造り上げるものではなく、むしろ、神殿などは無くとも主は常にイスラエルと共にどこへでも旅しておられたことを想い起こすべきである。ダビデの願いは、しかし受け入れられて、後に息子ソロモンによって果たされる（13)。この文脈でとくに重要な点は、人が神に何をするかではなく、神が人に何をされるかである。ダビデが王宮に住むようになり、周囲の敵がすべて退けられて得た平安（1）は、主がイスラエルに与えた一つの達成であり、そのひとときを契約の言葉によって記念されるのも主御自身である。

〈ダビデ契約〉

5節と8節でダビデは「わたしの僕」と呼ばれ、「わたしの民イスラエル」との呼称と併せて神の選びが明示される。18節以下に続くダビデの祈りには選ばれた者の驚きと光栄とが十分に言い表されおり、預言に託されている契約の意義を正しく方向付ける。ダビデ契約を特徴付ける第一の点は、この選びにおいて表される神の主権性と恩恵性である。「契約（ベリート)」という通常の用語はこの段落には登場せず、「あなた」と「わたし」で交わされる申命記に独特の言い回しや15節の「慈しみ（ヘセド)」が神の契約を特徴付ける。また、他に見られる幾つかの箇所が次のように証言する。「わたしが選んだ者とわたしは契約を結び／わたしの僕ダビデに誓った。あなたの子孫をとこしえに立て／あなたの王座を代々に備える、と」(詩編89:4,5)。また、この呼称は古くはモーセに適用され（ヨシュア1:2,7等)、モーセの律法を介して結ばれたシナイ契約とダビデ契約には連続性と相互補完性とが認められる。シナイ契約が律法遵守を条件として双務的であるのに対して、ダビデへの約束では神の一方的な恩恵が際立つ。その点ではノア契約（創世記9章）やアブラハム契約（同15章）と一連の線上にある。約束された賜物は国土と王朝であり、そこに永遠の保証が添えられる（16節及びサムエル下23:5参照)。14節では主とダビデとの間で父と子の関係が成立している点も見逃せない（詩編89:27,28)。王は神ではないため絶対的な権限を要求してはならないが、神に服従する限りにおいて民を代表して独自の権威を委ねられる。子である王が服従を拒めば父から厳しい懲罰を受ける（詩編89:31〜33）が、契約は神の憐れみに支えられて破棄されることなく永続性を保証される（15,16)。

ダビデの王座に対する永遠の保証は、やがて預言者を介してメシア待望に結びつく。イザヤは来るべきメシアについて繰り返し語ることでイスラエルの民を励ました（イザヤ9:6、11:1〜10)。旧約聖書において契約は神の変わらない救いの恵みを保証する。ダビデの子として生まれた御子イエス・キリストの救いは、契約の歴史に支えられて揺るがない保証として、正義と平和を待ち望むすべての者に差し出されている。　　（牧野信成）

11月29日　「待降・ダビデとの契約」　　説教展開例

テキスト　　サムエル記下　7章8〜17節

〔単元のねらい〕

今日からアドベントに入り、通常の子どもカテキズムに従った学びから離れ、イエス・キリストの御降誕に焦点を合わせた説教となる。初回の今回は、旧約聖書に預言から聞く。ダビデは神の宮としての神殿建設を主に願うが、主が預言としてお示しくださったのは、ダビデの子イエス・キリストによって建てられる神の国である。ポイントは二つ。一つは、神は宮に閉じこもられるお方ではなく、私たちと共にいてくださる方である。第二に、神の宮は、人間が用意しなければならないものではなく、神御自身が私たちのために準備してくださることである。そして、永遠に揺るぎない神の国として私たちに与えられたイエス・キリストが、クリスマスの日にこの世にお生まれくださったことを、子どもたちに伝えたい。

「神の宮イエス・キリスト」

今日は、先週までの祈りの学びとは異なる聖書のテキストをお読みしました。それは、今日からアドベント（待降節）に入るからです。12月25日がクリスマスですが、教会では、今日から、神の御子であるイエスさまがお生まれくださったことを覚えて、礼拝を献げます。

今日は、旧約聖書からダビデさんに関する聖書テキストをお読みしました。「あれ、イエスさまのお話ではないの？」と思ったお友だちもいたのではないでしょうか。確かに今日の聖書のテキストにはイエスさまは出てきません。しかし、ダビデさんの時代から、神さまはイエスさまがお生まれくださるための準備をしてくださっていたのであり、そのことを今日は確認していきたいと思います。

ダビデさんは、神さまに守られて、イスラエルの王さまになり、まわりにいた敵をも滅ぼすことができたため、大きな国となりました。そのため、最初にダビデさんは、自分のために立派な宮を築きました。そして次に、ダビデさんは、いつも一緒にいて守ってくださった神さまに感謝して、神さまのために神殿を建てようと考えました。

なぜなら、神さまはモーセさんの時代に、幕屋を造るように命じられて、幕屋の中の至聖所に契約の箱を置き、そこに神さまがおられたからです。ダビデさんは、自分が立派な宮に住んでいるのに、神さまが幕屋というテントの中におられることに対して、忍びないと思ったのです。

しかし、神さまがテントにお住まいになったのには理由がありました。神さまは、ダビデさんを初めとするイスラエルの民がどこにいる時も、いつも一緒にいてくださるからです。それは、モーセの時代にエジプトを脱出して、40年間荒れ野をさまよった時も、約束の地カナンに着いた時もずっと、神さまはイスラエルの民と一緒にいてくださったのです。それに、エルサレムに定住したダビデさんやイスラエルの民に、神さま御自身が、立派な神の宮を築き、そこで礼拝するように求めることはなさいませんでした。神の宮を築き、動けなくなると、神さまはイスラエルと一緒にいることができないからです。神さまにとっては、いつもイスラエルの民と一緒にいることが大切だったのです。神さまが一緒にいてくださることは、私たちにも語られています。ダビデさんも、イスラエルの民も、どんなに苦しい時にも、どんなに困っている時にも、神さまが共にいてくださることを信じることができたため、苦しみを乗り越えることができたのです。そして神さまがダビデさんに勇気と力をお与えくださり、ダビデさんには

大きな祝福が与えられたのです。神さまが私たちと一緒にいてくださることを受け入れることが、私たちにとって大切なことです。

いつも私たちと一緒にいてくださる主なる神さまは、ダビデさんが神の宮を建てるのではなく、神さま御自身が神の宮を差し出してくださることを約束してくださいます。そして神さまは、ダビデさんに対して、あなたの子孫として、わたしの子を送るとお語りくださいます。そうです。ここで主なる神さまがダビデさんに約束してくださった方こそが、クリスマスの日にお生まれなったイエスさまです。ちょうど来週とその次の週に学ぶことになりますが、イエスさまは、ダビデさんの子孫としてお生まれになられます。そして、「その名はインマヌエル（神はわれわれと共におられる）と呼ばれる」（マタイ1:23）のです。クリスマスの日にお生まれになられたイエスさまによって、私たちは神さまが共にいることを覚えることができるのです。

イエスさまは、神の宮として、とこしえに王国がゆるぎないものになるために、十字架につけられてくださり、死と復活を遂げてくださいました。主イエス・キリストが十字架に死に、死から復活を遂げてくださることにおいて、罪と罪に支配されたすべての敵に対する勝利を遂げてくださいました。そして、このキリストの勝利によって、神の国はゆるぎないものとなったのです。

そして、ゆるぎない神の国をお与えくださったキリストは、今、天国におられます。私たちは、勝利を遂げられたイエス・キリストと、聖霊なる神さまを通して、いつでもどこでも交わりがあるのです。だからこそ、私たちは、いつでもどこでも、主なる神さまを礼拝し、神さまの栄光をたたえることができると共に、主なる神さまによって支えられ、どのような困難な時、苦しい時にも、私たちは神さまに祈り求めることができるのです。

（辻　幸宏）

〔今週の暗唱聖句〕　サムエル記下 7章13節

この者がわたしの名のために家を建て、
わたしは彼の王国の座をとこしえに堅く据える。

11月29日　「待降・ダビデとの契約」　　幼稚科

〈ねらい〉

神様がダビデ王様にしてくださった約束を知り、その約束が実現して、イエス様が真の王さまとしてお生れくださったことを知る。イエスさまのお誕生をお祝いする準備をする。

〈展開例〉

絵を使いながら（125ページ参照）お話しする。

①イエス様が、お生れになるよりずっとずっと昔、神様は羊飼いだったダビデさんを選んで、イスラエルの人々の王さまにしました。
②ダビデさんは、強くて大きな美しい王宮に住むようになりました。そして、神様はダビデさんの周りにいるすべての敵からダビデさんを守ってくださいました。ダビデさんは、安心して暮らしていました。

ある日、ダビデさんは、神様のために家を建てようと考えました。神様の箱が、自分の王宮よりずっと小さい、布で作ったテントのなかに置いてあったからです。ところが神様は言われました。「わたしの僕、ダビデよ。わたしは、あなたに『わたしのために家を建てなさい』と言ったことがありますか？　わたしは、羊飼いだったあなたを、イスラエルの王さまにしました。わたしはこれからずっと、あなたといっしょにいて、すべての敵からあなたを守ります。そして、あなたとイスラエルの国の人々に、ひとつの住むところを与えます。そこで、あなたも、イスラエルの人々もこれからは、安心して過ごすことが出来るのです。あなたが死んだあとも、わたしはあなたの子供たちを、この国の王とします。この国は、ずっとずっと終わることがありません。もし、王がわたしの言うことを守らないなら、わたしはその王を懲らしめます。でも、この約束は、決してやぶられません」。

そして、本当に、約束どおりになりました。ダビデさんの子どもも、そのまた子どもも、そのまた子どもも王さまになりました。（神様の懲らしめを受けた王様もたくさんいましたけれど…。）そして、ダビデさんが死んでから、ずっとずっと後でしたけれど、ついに！ダビデさんの子どもの子ども、そのまた子どもの子どもの……の中に、神様のひとり子、イエス様がお生まれになりました。

イエス様は、わたしたちの罪のために、十字架にかかって死んでくださいました。そして、三日目にお墓の中から復活してくださいました。わたしたちのいちばんの敵である罪と死と闘って、勝ってくださったのです。だから、イエス様が王様の神様の国は、決してなくなりません。どんな敵からも、守られるのです。（10月25日④⑤の絵を使う）

イエス様を信じているわたしたちは、イエス様によって、この神様の国の一員です。いつも、イエスさまがいっしょにいてくださり、守っていてくださいます。イエス様、ありがとう。

〈暗唱聖句〉

「神は我々と共におられる」

マタイによる福音書1章23節一部

〈お祈り〉

てんのおとうさま。もうすぐ、クリスマスです。どうか、まだ教会に来たことのないお友だちや、お休みしているお友だちも、イエス様のお誕生日をいっしょにお祝いできますように。イエスさまによって、アーメン。

11月29日　「待降・ダビデとの契約」　　小学科下級

〈ねらい①〉

説教を振り返り、ダビデ契約と、そこに込められたメシアの約束の恵みを把握する。

〈展開例①〉

今日のお話を振り返ってみよう。ダビデは神様のために、何をしてさしあげようとしたのかな？（答え：自分が王宮に住んでいるように、主なる神にふさわしい立派な神殿を建ててさしあげたいと思った。）

でも、神様はそんなことをお望みにならなかったですね。大事なのは、（①）が（②）に何をするかではなくて、（②）が（①）に何をしてくださるかでしたね。（答え：①人、②神）

神様はダビデに何をしてくださると、約束してくださいましたか？（答え：敵を退け、イスラエルに平安と繁栄を与えて、ダビデ王朝を興してくださる。そして、やがて生まれてくるダビデの子孫によって、とこしえの王国を据えてくださる。）では、そのとこしえの神様の王国をおさめるダビデの子孫とは、誰のことかな？（答え：もちろんイエス様です!!）

今日の御言葉にはイエス様のお名前は出てこないけど、でもやがて生まれてきてくださるイエス様のことが暗示されていますよ。イエス様が隠れんぼしてるみたいだね。さあ、イエス様を探そう!!（「ダビデの子孫」、「この者」、「彼」などを「イエス・キリスト」に読み替えてみてください。）

〈ねらい②〉

ナタン預言以外にも与えられている、メシア王到来の預言を確認する。

〈展開例②〉

やがてダビデの子孫の中から生まれてくる、正義と平和を実現する真の王様。とこしえの神の王国を打ち立てる、愛の支配者イエス様。そんなメシア王イエス様の預言は、他にもあるよ。聖書を開いて確認してみましょう。

・イザヤ9章5、6節（旧1074ｐ）
・イザヤ11章1～10節（旧1078ｐ）
・イザヤ16章5節（旧1085ｐ）

〈祈り〉

神様。ダビデに約束してくださった、救い主イエス様の約束を感謝します。そして、その約束のとおり、イエス様が来てくださって、とこしえの神の王国が据えられたことを感謝します。あなたの王国が、いよいよ豊かに広がりますように。

11月29日　「待降・ダビデとの契約」　　小学科上級

〈ねらい〉

救い主イエス・キリストが「ダビデの子孫」と呼ばれることの意義を学ぶ。

〈展開例〉

イエスさまがお生まれになった日、天使たちがベツレヘムの羊飼いたちに伝えた言葉は「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった」（ルカによる福音書2・11）でした。いろいろ疑問が起こってくる言葉です。イエスさまが「ダビデの町」でお生まれになったことには、何か意味があったのでしょうか。ベツレヘムが「ダビデの町」と呼ばれていることの意味は何でしょうか。そもそも「ダビデ」とは何のことでしょうか。これらの疑問を一つひとつ丁寧に考えていくことが大切です。

まず「ダビデ」は人の名前です。これは昔のイスラエルの王を指しています。ダビデは戦争の場面で強い人だったため、多くの人から尊敬されました。しかしダビデが尊敬された理由は、力の強さだけではありませんでした。彼は真の神さまを信じる信仰をもっていました（ただしこれは、真の神さまを信じる人は必ずダビデのように戦争しなければならないという意味ではありません。それは別の話です）。つまりダビデは強い信仰の持ち主としても尊敬されたのです。

そのダビデがまだ幼いころに過ごしたのが、ダビデの父エッサイの出身地であるベツレヘムでした。また、同じベツレヘムで、ダビデが王になる儀式（油注ぎの儀式）が行われました。それでベツレヘムは「ダビデの町」と呼ばれたのです。

ダビデが活躍した時代はイエス・キリストのご降誕の約千年前ですから、時間的には大きな隔たりがあります。しかしそれでもイエスさまが「ダビデの町」でお生まれになったということがわざわざ強調されていることにはもちろん意味があります。

しかしその意味は単純なものではなく、いろいろと複雑な要素が絡み合っています。

第一に考えられることは、「ダビデの町」にお生まれになったイエスさまは、あの昔のダビデと同じように多くの人々から尊敬される存在であるという意味が含まれているに違いない、ということです。

しかしそれだけではないと思われます。第二に考えられるのは次のようなことです。なるほど確かにイエスさまは「ダビデの町」にお生まれになった。しかしその意味は、イエスさまは、王になったダビデの姿のような豪華絢爛（またはセレブでゴージャスな）姿ではなく、むしろ、王になる前のダビデの姿のような素朴で質素な姿であるということです。

ダビデは生まれたときから王だったわけではなく、王家の子女であったわけでもなく、普通の家庭で生まれ育ったという意味で「普通の人」でした。「ダビデの町」ベツレヘムは、王としてのダビデを記念する町であるというよりも、王になる前の「普通の人」であった頃のダビデを記念する町であると言うべきでしょう。

イエスさまは、お生まれになったとき、ベツレヘムの「飼い葉桶の中に」寝かされました。それが「あなたがた〔ベツレヘムの羊飼い！〕へのしるしである」と天使は羊飼いたちに告げました。天使が伝えたかったことは、イエスさまは、“あなたがた羊飼いたちと同じような姿をしておられる”ということであったことは間違いありません。外から見ると「王」などに見えることは決してない、まさに「普通の人」に見える、それがわたしたちの救い主イエス・キリストなのです。

〈お祈り〉

神さま、今日は、イエスさまがわたしたちと同じ「普通の人」の姿でお生まれになったことを学びました。イエスさまのことをいつも親しく身近な存在として感じることができますように。イエスさまの御名によって、アーメン。

11月29日　「待降・ダビデとの契約」　　中学科

〈ねらい〉

〇神がダビデに与えられた契約について学ぶ。

〇神が契約を結ばれたダビデの子孫とは、救い主イエス・キリストであるということを理解する。

〈展開例〉

質問１　8節－9節で、神は、ダビデにどのようにすると約束しておられるか。

質問２　10節で、神は、イスラエルに対してどのようになさると約束しておられるか。

質問３　11節－16節で、神は、ダビデの王国の王座をどのようにすると約束しておられるか。

質問４　イスラエルの国家とダビデ王家は、実際にはどのようになったか。

質問５　神のこの約束は実現したといえると思うか。

まとめ

神は、イスラエル統一王国の王となったダビデに預言者ナタンを通して、素晴らしい約束をお与えになった。神は、ダビデと共にいることを約束なさり、すべての敵を退け、名声を与えると言われた。また、イスラエルには一つの場所を与え、彼らがそこに住みつくことができるようにされると言われた。また、ダビデの子孫の一人を指して、彼の王国とその王座は永遠に続くと約束された。

しかし、実際には、イスラエルは、ダビデの二代後に北王国と南王国とに分裂し、それぞれ外国から侵略されて、紀元前721年と紀元前587年に滅んでしまう。それでは、永遠に続くダビデ王朝という神の約束は反故にされてしまったのだろうか。そうではない。神のこの約束は、ダビデの子孫全体にではなく、そのうちのただ一人に対してなされたものであり、それは、ダビデの子と呼ばれるメシア、すなわちイエス・キリストに対して約束されたものである。イエスは、ダビデの子孫の一人としてお生まれになり、私たちの罪を十字架上で贖ってくださった。この方の王国は、地上のものではなく、天上の王国であり、その王座は永遠に廃れることがない。私たちは、この永遠の王を戴く王国の民とされたことを神に感謝したい。

〈祈り〉

神様、私たちのために約束の救い主イエス様を与えてくださって、ありがとうございます。イエス様は、ダビデの子孫としてお生まれになり、永遠の王国を私たちのために興してくださいました。私たちは、罪に汚れ、取るに足りない者たちですが、その民として王国に加えられていることを心から感謝いたします。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。

12月6日　「待降・キリストの系図」　　聖書研究

テキスト　　マタイによる福音書　1章1〜17節

〈イエス・キリストの系図〉

ユダヤ人は系図を重んじた。とくに祭司や王を任職する際には系図が重要であった。系図は、一代一代を丁寧にたどっていくことでなく、何よりも系統を明確にするために用いられた。すると、「マタイによる福音書」は、系図から始まっており、日本人読者としては取っつきにくさをおぼえるが、もともとユダヤ人対象に書かれたものならば、イエス・キリストの系図から始めるのは当然であろう。

ところで、1節には、イエスが、どういう御方なのか、つまり、どのような系統なのかが、はっきりと示されている。それは、「アブラハムの子ダビデの子」という系統である。これは、アブラハムの子孫、ダビデの子孫ということにほかならない。

「イエス・キリスト」は、イエスのフルネームでなく、キリスト（＝メシア）であるイエスということだが、キリスト＝メシアは、油注がれた者という意味である。ユダヤ人にとって、キリスト＝メシア、油注がれた者と言えば、預言者、祭司、王であったが、とくにこの系図では、神がユダヤ人の先祖アブラハムへと約束なさった全世界のメシアが、さらにはユダヤ人の王ダビデへと約束なさった王の働きをするメシアが、イエスであることが証言されている。

したがって、イエス・キリストの系図は、ユダヤ人にとってたいへん重要であるだけでなく、旧約聖書と新約聖書を連結させるという、たいへん重要な役割を担っている。

〈神の約束が実現した系列・アブラハムの子ダビデの子〉

神は、アブラハムに対して、全世界の諸国民がその子孫によって祝福を得るとの約束をなさった(創22:18)。この時、やがて時が満ちるならば、アブラハムの子孫から、全世界の諸国民にとってのメシアの到来が予告された。神は、そのメシアを送られるために、アブラハムの子イシュマエルでなくイサクを、イサクの子エサウでなくヤコブを、そして、ヤコブの12人の息子の内ユダへと続く系統を選ばれた。神は、ユダに対して、王権を約束された（創49:10)。このユダの子孫がダビデとなるが、彼はユダヤ人の王となり、神は、このダビデ王に対して、子孫から永遠の王・メシアが出ることを約束なさった（サムエル下7:12〜16)。

アブラハムからダビデまでがおよそ14代、ダビデからバビロン移住までがおよそ14代、そして、バビロン移住からイエスまでがおよそ14代(17)、時間的にはおよそ2000年の年月を経て、神の約束がついにイエスにおいて実現した。

〈神の約束が実現した系列の特徴〉

イエス・キリストの系図で、とくに注目に値するのは、ユダヤ人としての純潔性を示すべきなのに、タマル（3)、ラハブ（5)、ルツ（5）といった異邦人の女性が関わっていることが明記されているところ、そして、ダビデ王が人妻バト・シェバを奪った罪を犯したことが分かるように、わざわざ、「ウリヤの妻」(6）と明記されているところである。神の約束が、異邦人が深く関わり、さらに罪と切っても切れは離せない系列で実現したことは、何よりも、イエスが、ユダヤ人だけでなく、全世界の諸国民が信じて従うべき王的なメシア、とくに罪からの救い主としてお生まれになったことが示されている。　　（長谷川潤）

12月6日　「待降・キリストの系図」　　説教展開例

テキスト　　マタイによる福音書　1章1〜17節

〔単元のねらい〕

待降節の第二主日に与えられたテキストは、マタイによる福音書の主イエスの系図である。契約の子はともかく、地域の子らには、まったく知らない人の名前が羅列され、興味も持てないものであるかもしれない。しかし、人となられたイエスさまのご降誕のおかげで、ダビデの子孫でも、アブラハムの子孫でもない、まったくの異邦人である私どもが、神の子とされたことの幸いを告げたい。降誕のご目的が、私どもの救いのためであることを鮮やかに告げたい。

「イエスさまのおかげで、アブラハムの子」

今朝の礼拝のために、聖書は、マタイによる福音書を読みました。その最初のページを読みました。自分の聖書を開いて、一緒に読んだお友だちは、ズラーっと知らない人の名前がならんでいて、ちっともおもしろくなかったでしょう？　聴いていたお友だちは、もっとおもしろくなかったかもしれません。それは、知らない人の名前ばかりだからだと思います。知っている人の名前が出てきたら、まだよい、興味がわくかもしれません。

ここに挙げられたほとんどの人は男の人です。2節には、「アブラハムはイサクをもうけ」とあります。「もうける」というのは、むつかしいことばですね。「アブラハムの子どもは、イサクです」「アブラハムは、イサクのお父さんです」「アブラハムには、イサクが生まれました」という意味です。そのように、自分のお父さんは誰で、そのまたお父さん、おじいちゃんは誰で、ひいおじいちゃんは誰で、ひいひいおじいちゃんは誰誰で、というようにさかのぼって調べて、文章や図に書いたものを「系図」と言います。皆さんの中で、自分の系図を見たことのある人はいますか。先生の家には、ありません。お父さんのお父さん、おじいちゃんのことは知っていますが、曾おじいちゃんのことは、聞いたことがありません。つまり、先生は、立派な、由緒ある「生まれ」ではないということです。

皆さんの中で、お父さんが誰もが知っていても有名な人だったり、おじいちゃんが有名な人だったり、あるいは先祖の中に、そんなとても有名で偉い人は、いますか？　もしいたら、自慢したくなるかもしれませんね。親戚にいたとしてもそうでしょう。友だちの友だちのそのお友だちのお父さんが有名な人であっても、自慢したり、その人のこと知ってるよ、会ったことあるよと言うと、ちょっとカッコ良い気持ちがするかもしれません。

先生には、そんな人はだれ一人もいません。いえ……、これは、間違いです。嘘になってしまいます。実は、先生には、世界で一番有名な人、世界で一番偉い人、その人を先生の先祖に持っているのです。それなら、その人はいったい誰でしょうか。すぐにピンと来たお友だちもいるでしょう。世界で一番有名な人は、イエスさまです。世界の中で比べることもできない偉い人もイエスさまです。そうです。このイエスさまを、先生は、先生の先祖に持っているのです。

「エー、イエスさまは、日本人ではないのに、どうして？　イエスさまはユダヤ人のはずだと思うけど、何故？」と思うでしょう。その気持ちはよく分かります。でも、実は、これは、先生だけのことではありません。イエスさまが、この地上にお生まれになられた目的は、先生だけではなく、僕たち私たちをイエスさまの家族にするためなのです。イエスさまの弟、妹にするためなのです。

マタイによる福音書の最初に、書いてある言葉をもう一度、読みましょう。「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」。アブラハムというのは、信仰の父と言われる神さまの民のイスラエルの人々にとって、一番有名な人、大切な人です。なぜなら、神さまは、アブラハムを選んで、ご自分との契約を与えてくださったからです。それは、神さまの御言葉を信じて従うなら、アブラハムを祝福し、大いなる国民とし、アブラハム本人を祝福の源とするというお約束です。アブラハムの子孫にも救いをもたらすという恵みのお約束、すばらしい、祝福のご契約です。神さまからの一方的な契約です。ですから、アブラハムの子孫であるということは、神さまの子どもであるということを意味したのです。

次にダビデという人も大切です。この人は、イスラエルの歴史の中で一番、活躍した有名な王様です。エルサレムに最初に神殿を建てたのは、この王さまでした。そして何よりも、スバラシイことは、神さまは、このダビデ王さまの子孫から、救い主がお生まれになられると約束されたことです。ですから、聖書の歴史の中で、神さまの民の歴史で、ダビデ王さまは重要な人です。

マタイによる福音書を書いたマタイさんは、その最初に、大切なことを、ずばり書きました。イエスさまとはどなたなのかをご紹介をしたのです。つまり、イエスさまは、あのアブラハムさんの子孫です。あのダビデさんの子孫です。つまり、神さまが約束してくださった救い主、キリストであられるのです。それが、「イエス・キリスト」というお名前の意味です。

そして、その次に、大急ぎで、それなら、イエスさまがどのようにアブラハムにまでつながって行くのかを、記します。ダァーと、名前が続きますね。ところが、その名前の中には、実は、ユダヤ人からすると、良い方で有名であるよりは、悪い方で、悪いことで有名な人の名前も出てくるのでびっくりしてしまいます。とにかく、いろいろな人たちが出てきます。今朝は、それに触れる時間はありません。でも大切なことを一つだけ、お話します。

皆さんは、アブラハムの子孫ですか？ 違うでしょう。そうすると、神さまの祝福にあずかれませんか？ 神さまの祝福された人たち、神さまの民に入れませんか？ 問題はそこです。ユダヤ人のイエスさまは、僕たち私たちとは関係のないお方になってしまいます。

しかし、そうではありません。なぜなら、イエスさまを信じる人は、イエスさまを一つに結ばれるからです。イエスさまによって、イエスさまの兄弟となるのです。神さまの子どもです。アブラハムの子孫、ダビデの子孫のイエスさまは、ここにいる僕たち私たちのことを、イエスさまにつながる人としてくださるのです。そうなると、アブラハムもダビデも僕たち私たちの先祖です。僕たち私たちは、神さまの民の一員になれるのです。イエスさまのおかげで、です。

イエスさまは、天の神さまの独り子です。天のお父さまの御子です。つまり、神さま御自身です。しかし、僕たち私たちを救うために、僕たち私たちを神さまの子どもにするために、神さまの民の一人に加えてくださるために、この地上に人間となってお生まれくださったのです。

天のお父さまは、今朝も、イエスさまによって、僕たち私たちを神さまの約束された救い祝福のつながりの中においてくださいます。僕たち私たちは、正真正銘、アブラハムの子孫、神さまの子どもなのです。

（相馬伸郎）

〔今週の暗唱聖句〕　ルカによる福音書 19章9節

イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。」

12月6日　「待降・キリストの系図」　　幼稚科

〈ねらい〉

神様の独り子であるイエス様が、アブラハムの子孫、ダビデの子孫として、人となってお生れくださったことを知り、そのイエス様を信じるわたしたちも、イエス様によって神様の子どもとされていることを喜び、感謝する。

〈展開例〉

絵を使って（125ページ参照）、お話しする。

①イエス様がお生まれになるずっとずっと昔、2000年前くらいのこと、神様はアブラハムさんに大切なお約束をされました。神様は、アブラハムさんが心から神様を信じ、神様の言葉をよく聞き、言われたとおりに行うことを喜ばれて言われました。「わたしは、必ずあなたを豊かに祝福し、大きな喜びをあたえよう。あなたの子どもたちを、天の星のように、海辺の砂のように増やそう。どの国の人もみんな、あなたの子孫によって、大きな喜びがあたえられます。あなたが、わたしの言葉をよく聞き、言われたとおりに行ったからです」。そして、本当に神様の約束通り、アブラハムさんの子どもたちから、また子どもが生まれ、またその子どもたちから子どもが生まれ、天の星のように増えて行きました。

②そして、その中にダビデさんが生まれました。

③ダビデさんは神様によって王さまとされ、ダビデ王様も神様から約束をいただきました。「ダビデよ。あなたの子どもの子どもの子どもの子ども……子孫の中から、真の王さま、救い主が生まれる」。

④そして、本当に神様の約束通り、ダビデさんの子どもの子ども、そのまた子どもたちの中に、イエスさまのお父さんとなるヨセフさんが生まれ、イエスさまがお生れになったのです。（10月25日④の絵を使う）

神様のひとり子イエスさまが、アブラハムの子ダビデの子として、人となってお生れくださいました。イエスさまを信じるわたしたちが、神様の子どもとされるためです。神様は、ずっとずっと前から、この約束をしていてくださり、本当にそのとおりにしてくださったのです。わたしたちを罪から救うためです。神様ありがとう。

〈お祈り〉

てんのおとうさま。イエスさまによって、わたしも神様の子どもにしてくださって、ありがとうございます。イエスさまによって、アーメン。

12月6日　「待降・キリストの系図」　　小学科下級

〈ねらい〉

実際に聖書を開いて、イエス・キリストに至る二千年の契約の歴史を確認する。

〈展開例〉

今日は、聖書早開き選手権を開催します。イエス様の系図に名前が載っている人たちが、聖書に登場する箇所を開いてみよう。

アブラハム　創世記12：1－8（p15）
イサク　　創世記21：1－8（p29）
ヤコブ　　創世記25：19－26（p39）
ユダ　　創世記29：35（p48）

女性の名前も載っていましたね。（できれば、それぞれの物語を解説して）

タマル　　創世記38：1－30（p67）
ラハブ　　ヨシュア記2：1－24（p341）
ボアズとルツ　　ルツ記1・2章（p421）

系図だけしか出てこない人もいますよ。
アラム、アミナダブ、ナフション、サルモン、
オベド　　ルツ記4：18－22（p427）

それから、ついに王国時代に入ります。
エッサイ　　サムエル記上16章（p453）
ダビデ　　サムエル記上16章（p453）
ウリヤの妻　サムエル記下11章（p495）
ソロモン　　サムエル記下12：24（p498）

その後の王様たちは列王記などで確認してくださいね。名前が載っている王様も、載っていない王様もいるよ。系図は、歴代誌上3：10－16(p629)にあります。

そしてバビロン捕囚の後の人たちで、聖書に名前が出てくるのは、この二人です。

シャルティエル　歴代誌上3：17（p630）
ゼルバベル　　エズラ記3：1－7（p726）

それからイエス様がお生まれになるまで、およそ400年ほどの間にも、色んな人がいました。ヨセフさん以外は聖書には登場しませんが、そんな一人ひとりの生涯も、イエス様がお生まれになるために必要だったのですね。

〈祈り〉

神様。イエス様がお生まれになるずっとずっと前から、そしてイエス様がお生まれになった後もずっとずっと、私たちを導いていてくださってありがとうございます。

12月6日　「待降・キリストの系図」　　小学科上級

〈ねらい〉

救い主イエス・キリストの系図の意味を学ぶ。

〈展開例〉

新約聖書の最初のページにはカタカナの人の名前がたくさん出てきます。マタイによる福音書1章のことです。どうやらこのことは聖書を初めて読む人の多くが驚きを感じることのようです。学校や会社で「新約聖書」が無料で配られたのを手に取ったという方もおられるでしょう。「国際ギデオン協会」というグループが日本にもあり、聖書の無料贈呈というたいへん立派な活動を行っています。しかしです。初めて手にした「新約聖書」をわくわくしながら最初のページを開いてみたら、カタカナだらけだった。最後のページを開いてみたら、これまたとても難しい『ヨハネの黙示録』だった。これですっかり嫌気がさし、「聖書というのは最初から最後までワケが分からない本でした」と結論づけて本棚の奥に押し込んでしまったという人がたくさんいるらしいのです。

しかしもちろんそれは残念なことです。聖書という書物は、本当は面白い本なのです。また、最初と最後しか読まないという聖書の読み方も間違っていますが、そのことよりもっと残念に思うことは、新約聖書の最初のカタカナだらけのページには面白いことが書かれているということを知らずにいる方が多くおられることです。

イエスさまの系図の中で特に注目すべきは、この中に含まれている女性たちの名前であると言われています。それはタマル（3節）、ラハブ（5節）、ルツ（5節）、そしてウリヤの妻（6節）です。「ウリヤの妻」の名前はバト・シェバです（サムエル記上11：3など）。

この四人の女性は、旧約聖書の中では有名な人たちです。しかも、彼女たちが有名な理由は、多くの人に褒められるような立派な働きをしたからというようなことではありません。むしろどちらかといえばその逆です、何となく話題にしにくいような、複雑で難しい人間関係の中で悩んだり苦しんだり、またそのあたりのことで罪を犯したりした人々として、有名なのです。

彼女たちが実際にどのような事情の中にいたかを知りたい方は、それぞれの個所を読んでみてください。タマルについては創世記38章に、ラハブについてはヨシュア記2章に、ルツについてはルツ記に、そしてバト・シェバについてはサムエル記下11章に書かれています。

四人に共通していることがあります。ちょっぴり踏み込んだ言い方を許していただきたいのですが、要するに、「男の人との関係」という点に問題を抱えていた人々だったのです。

「面白い」のはそのような人々がイエスさまの系図の中に堂々と出てくることです。なんとなく都合が悪い感じの人々の名前はイエスさまの系図の中から除いてしまいましょう、というふうにこの福音書を書いたマタイは考えませんでした。考え方はむしろ逆でした。その人々を積極的に登場させました。イエスさまにとってそのような話は、恥ずかしがって隠したりするようなことではありませんということをきちんと説明しなければならないからです。

もちろんわたしたちは、罪を犯してもよいという言い方はできません。でも、わたしたちの目の前に複雑な人間関係の中で悩んでいる人々がいるときに、その人の悩みに耳を傾けることや同情することは、許されることですし、大切なことです。イエスさまは、人生の難しい問題を抱えている人々を「救う」ために、そのような系図の中にお生まれになったのです。

〈お祈り〉

神さま、今日はイエスさまの系図の意味を学びました。もしわたしたちの近くに複雑な人間関係で苦しんでいる友達がいたら、助けてあげることができますように。またわたしたちがそのようなことで苦しんでいるときには、神さま、あなたがわたしたちを助けてくださいますように。イエスさまの御名によって、アーメン。

12月6日　「待降・キリストの系図」　　中学科

〈ねらい〉

〇イエスの系図の特徴を理解する。

〇イエスの系図に示された神の救いの意味を学ぶ。

〈展開例〉

質問１　1節には、イエス・キリストは誰の子であると書かれているか。

質問２　3節と5節には、それぞれ誰によって子どもをもうけたと書いてあるか。

質問３　6節には、誰の妻によって子どもをもうけたと書いてあるか。

質問４　17節には、アブラハムからキリストに至るまで何代を経過したと書いてあるか。

質問５　福音書の初めにこのような系図が書かれている理由は何だと思うか。

まとめ

イエス・キリストは、マタイによる福音書によれば、アブラハムの子でありダビデの子であると初めに説明がある。誰々が誰々をもうけ……という記述が続くが、これは、誰を子供として持ったという意味になり、そのほとんどが、男性の名前になっている。つまり、父から息子へと続く男系の家系図なのである。3節、5節に来ると、この男系の名前の中にタマル、ラハブ、ルツという女性の名前が出てくる。さらに6節に来ると、ウリヤの妻によってダビデがソロモンをもうけたという記述が出てくる。そして、最後の17節には、アブラハムからキリストに至るまでは、計42代に亘るということが記されている。

よく新約聖書の初めのこのマタイ福音書の長い系図を読んで、聖書を読むのに挫折したという話を聞くが、一見無駄に長く思えるこの系図には神の救いの御計画の深い意味が隠されている。まず、系図は、キリストがアブラハムとダビデの子孫であるという記述から始まるが、アブラハムとはイスラエルの父祖であるが、その人物の子ということで、イエスは、旧約の神の民イスラエルを通して地上のすべての国民に救いが及ぶというあの約束の実現者であるということが示され、イスラエル統一王国の偉大な王ダビデの子であることが示されることで、イエスは、神がダビデに永遠の王座を与えられると約束されたあの子孫であるということが示されている。その間に何人かの女性の名前が出てくるが、彼女たちは、特別有名だったり、身分が高かったりするわけではなく、逆に選民イスラエルの系図には、到底ふさわしくないと考えられるような問題ありの人々である。タマルは、ユダの妻ではなく、嫁であった。ラハブは売春婦、ルツは外国人、ウリヤの妻と記されたバト・シェバは人妻であって、不倫の末に人殺しをしてダビデは彼女をその夫ウリヤから取り上げ、その彼女からソロモンが生まれるということになったのである。救い主イエス・キリストの系図は、このように、完璧で非の打ちどころのないものなどではなく、人間の罪と弱さが露出した系図であった。イエスは、そうした罪と弱さで自分たちではどうにもならなくなっている私たちを救うために地上に来てくださったのである。

〈祈り〉

神様、弱くどうしようもない私たちのためにイエス様を送ってくださり、ありがとうございます。私たちは、自分自身の力ではどうにもならないような汚れた弱い者たちですが、イエス様を信じる時、救いに与ることができますから、心から感謝いたします。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。

12月13日　「待降・ヨセフへの告知」　　聖書研究

テキスト　　マタイによる福音書　1章18〜25節

ルカ福音書が母マリアにスポットを当てるのに対し、マタイ福音書はあまり目立たない夫ヨセフや東方の博士たちを登場させ神の救いの約束の実現とその意味に注目を置こうとする。

〈神の約束の実現としての選びの器〉

マタイ福音書が夫ヨセフを登場させるのは、神の約束のダビデの子としてイエス・キリストがお生まれになったからである。20節で主の天使が神の救いの約束の実現を伝えるところで、ヨセフを「ダビデの子ヨセフ」と呼びかけている。それはマタイが既にイエス・キリストの系図において明らかにしたことであった。この御使いを通しての主の御言葉に、ヨセフは神の救いの御業の実現のための器としての彼の果たすべき使命・役割を新たにまた深く受けとめさせられたに違いない。ともするとクリスマスは、処女降誕の聖霊の御業（ルカ1:35）から母マリアに焦点が片寄りがちであるが、神の救いという点からすると、夫ヨセフの果たした役割は小さくない。このことを彼は深く自覚させられたので、マリアを妻として迎え入れ（1:24）、そして結婚してもイエスが生まれるまでは夫婦関係を自制し（1:24）、正式の嫡子としてイエスと命名したのである。

〈律法に忠実な人〉

マタイ福音書では神の救いの御業の筋道は読者に一目瞭然である。最初から妻マリアの妊娠は聖霊の御業による奇跡であることが述べられている（1:18）。マリアはそのことを直接御使いから説明を受け、彼女自身の信仰をもって同意し受け入れた（ルカ1:38）。けれども、ヨセフにはそのことは未だ知らされていない。おそらくマリアもすべてを神に委ねて、受胎告知（ルカ1:28〜33）のことをヨセフには語らなかったのであろう。それ故に、夫ヨセフは大いなる苦悩に陥る。未だ婚約中とはいえ、ユダヤの律法では結婚関係と同様と見なされ、婚約中の他の男性との関係は姦通と同罪とされたのである。彼の苦悩を深めたのは妻マリアへの不信だけではなく、彼の神の律法へのこの忠実な態度にあった。マタイは夫ヨセフを「正しい人であったので」と、その苦悩の真の理由を述べる（1:19）。マリアへの愛とユダヤの掟との狭間に彼は立たせられ、律法を重んずるヨセフは密やかな離縁を決断し、自ら身を引こうとすることで問題の解決を図ろうとする。人間的にはこれ以上の解決の手だてはなく、まさにギリギリの選択であった。

〈神、我らと共にいます、インマヌエルの恵み〉

このジレンマ・人間的な解決に終止符を打ち、さらなる上よりの神による解決へと導いたのが、御使いによる神の介入の御業であった。この主の天使の介入によってことの真相は明らかにされ、夫ヨセフもまた神の救いの約束の実現の器として神の御業へと招き入れられる。ヨセフは、妻マリアへの村人のいわれなき中傷やユダヤの掟による断罪の危険からマリアを守り、マリアがイエスを無事出産することを助ける役割を、神によって与えられていく。

ヨセフの役割は、確かにマリアのそれに比べて補助的なものでしかないとしても、このヨセフの同意と協力がなければマリア一人で何もかも困難を背負い、挙げ句の果てに石打ちにされて殺されてしまう恐れも十分にあったのである。マタイがイエスの名前を「インマヌエル（神、我らと共にいます）」としているのは、もちろん旧約聖書のメシア預言の成就（イザヤ7:14）であるが、そのようにしてマリアやヨセフと共に神がいてくださって人間的な解決や様々の危険から彼らを守り、そうして神の約束が彼らの信仰を通して実現されるためにほかならなかった。そして、このヨセフとマリアにおいて成された神の救いの御業は、さらに約束の民イスラエルの救いの実現へと進展していくことになる。まさに主の御名インマヌエルが、約束の民において、このお方によって実現されるのが、神の御心なのである。（山下朋彦）

※第19号（2005年10・11・12月号）110ページより、再掲載です（編集部）。

12月13日　「待降・ヨセフへの告知」　　説教展開例

テキスト　　マタイによる福音書　1章18〜25節

〔単元のねらい〕

カリキュラムの単元目標には、こうあった。「神は我々と共におられる、インマヌエルの訪れを喜ぼう」と。その訪れを唐突に告知されたヨセフは、はたして喜べたであろうか。聖書は彼の許嫁マリアの身に起こること、そして彼の戸惑いと悲しみを隠し立てしない。婚約期間中の男女の間に割って入るようなインマヌエルは、まずこの二人にとっての喜びとならなければ、われわれの喜びにはなり得ない。そのプロセスを丁寧に、現実味をもって物語りたい。

「その子をイエスと名づけなさい」

『い・い・な・ず・け』って、知ってる？。

「ハイ！ ハイ！ ぼく知ってるよ。おかあさんがご飯といっしょに出してくれる、あれでしょ。お水をいっぱいふくんでて、やわらかく、おいしい、みどりのお野菜。食べたことあるもん。」

あっそう！ 食べられるんだっけ？『いいなずけ』。

「やーねえ！ それって、野沢菜づけでしょ！お漬けものじゃあないのよ、いいなずけって。生まれたばかりのあかちゃんに、おとうさんがステキなお名前をつけてくれることよ。そうに決まってるわ。さっき読んだ聖書にあったじゃない！その子をイエスと名づけなさい、って。」

なるほど！ ふたりともスゴい想像力だね。

『いいなずけ』っていうのはね、結婚を約束している男の人と女の人のことなんだ。聖書の時代、ユダヤの国では、一人の男の人、またはそのお父さんやお母さんが、お嫁さんになってほしいと心に決めた女の人とその家族のところへ、贈り物を持ってお願いに行ったそうです。「あなたを花嫁としてお迎えしたいのです。」「わかりました。花婿になってくださる方のところへ参ります。」そんな約束をした二人は、家族からも町の人々からも『いいなずけ』と呼ばれるようになるのです。婚約から結婚までの期間は長くても1年、みんなから見守られ、助けられて、二人は結婚に向けて備えをするのです。婚礼の儀式のこと、住む家のこと、家庭のこと、仕事のこと、将来の夢など、これからの希望をいっしょに考えることができる喜ばしい間柄、それが『いいなずけ』なのです。今日の聖書に登場する、ヨセフさんという男の人と、マリアさんという女の人も、そのような『許嫁（いいなずけ)』の間柄でした。

ある日のこと。ヨセフさんは、マリアさんから、秘密を打ち明けられます。「ヨセフさん、今からお話しすることは、きっとあなたを驚かせてしまうでしょう。でも、話さずにはいられないのです。他の誰かに知られる前に、あなたにだけは、本当のことを知っていてほしいのです。ふた月ほど前、神の御心を伝える天の使いが現れて、こう言うのです。『おめでとう、マリア。主があなたと共におられる。恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名づけなさい。』……まだ結婚もしていないのに、どうしてそんなことがあるでしょう。そう申し上げると、天使はまたこう言うのです。『聖なる神の霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なるもの、神の子と呼ばれる。』……天使の告げた言葉のとおり、わたしは今、子を宿しています。」

ヨセフさんは、目の前が真っ暗になってしまいました。まだ結婚していないのに、婚約者から、子どもができたと告げられたのです。マリアさん

は、結婚の約束を破って、他の男の人と結婚してしまった、そう考えるしかないのです。ヨセフさんの驚きと哀しみは、どんなに大きかったことでしょう。それでも、ヨセフさんは、マリアさんを愛していました。自分の気持ちよりも、彼女のことが心配になりました。もしもこのことが世間に知れたら、彼女は掟によって裁かれてしまう。姦淫の罪を咎められて、石で打ち殺されてしまう。彼女のことを誰にも知られないようにしよう。ひそかに相手の男の人のところへ去らせよう。自分は結婚をあきらめよう。ヨセフさんはそう心に決めたのでした。

まるで悪い夢でも見ているような、しかし紛れもないその現実を背負って、重い重いその心を引きずって、ヨセフさんは生きてゆくしかありません。眠れない夜がどれほど続いたことでしょう。それでもようやく、疲れきって眠ることができました。その眠りの中に、夢の中に、あの天使が現れたのです。

天使はまず、こう呼びかけました「ダビデの子ヨセフ。」……ヨセフさんのお父さんの名は、ヤコブでした。ヤコブの子なのに、ダビデの子と呼んだ天使は、人違いをしたのでしょうか。そうではありません。ダビデの子と呼ばれたヨセフさんは、ドキッとしたでしょう。それは、メシア（キリスト）の呼び名だったからです。一千年むかしのイスラエルの王ダビデは、ヨセフさんの先祖でした。王国は滅びてしまいましたが、再びその王国を興すダビデの子メシアが現れる。そう言い伝えられてきたのです。そのダビデ王の子孫として、天使の言葉を聴くようにと、ヨセフさんは導かれたのです。

そこで天使は、こう告げました。「恐れるな、ヨセフ。マリアを妻として迎えなさい。マリアのおなかの子は、聖なる神の霊によって宿ったのだ。彼女は男の子をうむ。その子をイエスと名づけなさい。」……驚きました。マリアさんの打ち明けた秘密、あれはすべて作り話だと疑っていたからです。マリアさんに告げられたことと、まったく同じ言葉を、ヨセフさんは確かに聴きました。そして、信じたのです。いま聴いた言葉を、マリアさんも確かに聴いたのだと。そして、悟ったのです。人間には絶対できないことを、その言葉どおりに実現なさる方こそ、紛れもなく真の神さまなのだと。

消えかけていた結婚の望みが、再び現れてきました。ひとすじの光が、ヨセフさんとマリアさんのあいだに射し込んできたのです。それは、二人に告げられた一つの言葉を、神さまの言葉と信じて、従うことによって訪れる、まったく新しい希望でした。

「恐れず、妻マリアを迎えよ」という御言葉に従うことは、ヨセフさんにとっては、婚約中にできた子どもを、自分の子どもとして引き受けるということです。「マリアの宿した子は、聖なる神の霊による子（神を父とする子）である」という御言葉を信じることは、ヨセフさんにとっては、夫である自分を捨てるということです。「マリアの産む男の子をイエスと名づけよ」という御言葉に従うことは、その子を養い育てる父親になるということなのです。……そんな無茶苦茶なこと、普通ならできる訳がありません。ところが何と！ ヨセフさんはそうしたのです！ まったく新しい希望がそうさせたのです！

「イエス（イエー・シュアー）」という名は、「主こそ救い」という意味です。「この子は自分の民を罪から救う」と告げられたのは、その名の通りの働きをする「救い主メシアが生まれる」という意味なのです。人の罪は命を滅ぼし、世の罪は国を滅ぼす。そんな罪と滅びから救ってくださる神が、人となって世においでになる。神が我々と共にいてくださる。この希望だけが、ヨセフさんとマリアさんを結ぶ絆でした。

いいなずけとしての希望や喜びは、救い主の誕生によって、ひとたびは、木端微塵に打ち砕かれました。しかし、その代わりに、罪と滅びから救う神が共にいてくださるという、その子をイエスと呼ぶ者たちの新しい希望と喜びが訪れたのです。

（二宮　創）

〔今週の暗唱聖句〕　ルカによる福音書 1章32節

その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。

12月13日　「待降・ヨセフへの告知」　　幼稚科

〈ねらい〉

ヨセフもマリアも、主の天使の言葉を聴いて、神様のひとり子が、聖霊によってマリアに宿っていることを信じ、天使の言葉に従った。そして、イエスさまがお生まれになられた。イエスさまのこのお誕生を共に喜ぶ。

〈展開例〉

物語（絵本）の読み聞かせ（126ページ参照）。

場面ごとの対比を強調するため、見開きのページを最初から見せないで、お話に合わせて開くと良い。

【イエスさまのお誕生】

①今から、2000年くらい前のことです。ユダヤのナザレという町に、ダビデ家のヨセフという人が住んでいました。ヨセフには、結婚を約束している大切な人がいました。そのおとめの名前はマリアといいました。

②ある日のことです。マリアのところに天使がやって来て言いました。「おめでとう、マリア。主があなたと共におられます」。マリアが、びっくりして、いったいこれは何のことだろう？と考えていると、天使は言いました。「恐れることはない。あなたは神様の恵みを受けました。あなたは、聖霊によって赤ちゃんを身ごもります。そして、あなたは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。その子は神の子と呼ばれる」。マリアは天使の言葉を信じて、言いました。「わたしは、主のはしためです。お言葉どおりこの身になりますように」。

③そして、本当にマリアは赤ちゃんを身ごもりました。マリアはそのことを、ヨセフにお話ししました。今度は、ヨセフがびっくりしました。まだ、結婚をしていないのに、マリアに赤ちゃんがいることが人々にわかったら、大変です。マリアは石で打たれて殺されてしまうのです。ヨセフは正しい人でした。

④ヨセフは、よく考えてこう決めました。人々にわからないようひそかにマリアと別れよう。夜になりました。ヨセフは、大切なマリアのことを考えているうちに眠ってしまいました。ヨセフは夢を見ていました。すると、その夢の中に主の天使が現われ……、「ダビデの子、ヨセフ。恐れないで、マリアと結婚しなさい。マリアのおなかの赤ちゃは、聖霊によって宿ったのです。マリアは男の子を産みます。その子をイエスと名付けなさい。その子は、ご自分の民を罪から救うからです」。

⑤ヨセフは、目が覚めると、夢の中で主の天使が命じたとおり、マリアと結婚しました。そして、男の子が生まれると、その子をイエスと名付けました。こうして、神様のひとり子イエスさまが、お生まれになりました。神様が、ずっとずっと昔から約束してくださっていたことがとうとう実現したのです。

⑥イエス様のお誕生おめでとう。

〈お祈り〉

てんのおとうさま。ヨセフさんの家に生まれた男の赤ちゃんは、神様のひとり子、イエスさまでした。わたしたちの救いのためです。ありがとうございます。イエスさまによって、アーメン。

12月13日　「待降・ヨセフへの告知」　　小学科下級

〈ねらい①〉

説教を振り返り、ヨセフを生かした救い主誕生の希望を確認する。

〈展開例〉

今日のお話は、みんなもよく知っているヨセフさんとマリアさんのお話だったね。ヨセフさんがどれだけ辛い気持ちだったことか、みんなにも分かりましたか。でもヨセフさんは、やけっぱちにならないで、マリアさんを守って結婚できたから良かったですね。ヨセフさんの暗い心を照らしてくれたのは、マリアさんから生まれてくる赤ちゃんが神様の独り子、救い主イエス様なのだという希望でした。この希望が、どんな暗い心も照らすのです。

〈ねらい②〉

預言聖句を確認し、救い主預言が成就した驚きを味わう。

〈展開例②〉

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む……」。この預言は、聖書のどこに記録されているのか確認してみよう。

正解は、イザヤ書７章14説でした（p1071）。これはイエス様が生まれる700年以上も前に与えられた預言なのです。

〈ねらい③〉

インマヌエルの喜びを分かち合う。

〈展開例③〉

今日のお話にはインマヌエルという言葉が出てきましたね。「神様は私たちといっしょにいてくださいます」という意味です。神様はマリアやヨセフといっしょにいてくださって、色んな難しい問題を解決してくださいました。そして神様は、今私たちと、いつもいっしょにいてくださいます。聖霊において、私たちの心に宿っていてくださいます。それはクリスマスにお生まれになったイエス様が教えてくださったことです。私たちと同じ姿で、私たちに近づいてきてくださったイエス様を見るなら、本当に神様は私といっしょにいてくださるんだって、きっとよく分かると思いますよ。

みんなは、神様がいっしょにいてくださるって、強く感じたことあるかな？（それぞれのご経験を分かち合ってください）目を瞑って、手を伸ばせば、必ず神様がその手を握ってくださるよ。

〈祈り〉

神様。ヨセフさんの暗い心を明るくした、救い主イエス様の希望が、私たちの心も明るくしてくれます。ありがとうございます。神様、いつもいっしょにいてくださってありがとうございます。苦しいときも、悲しいときも、どんなときもいっしょにいてください。勇気を与えてください。

12月13日　「待降・ヨセフへの告知」　　小学科上級

〈ねらい〉

神を信じることが、人を信じる力と勇気を生み出す。神に押し出されてマリアを信じたヨセフの姿に学ぶ。

〈展開例〉

マリアは、聖霊によって身ごもるという、神の不思議なみわざを受け入れて、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」と答えました（ルカ1:38)。謙そんに自らを神のくすしきみわざの器として差し出しました。マリアの夫ヨセフには、どのような神のみわざが与えられたのでしょうか。

マリアに主の御使いが現れて、けれども、おそらくマリアは、そのことをなかなかヨセフに伝えることができなかったのではないでしょうか。婚約して、夫婦の誓いは交わしたといっても、まだ一緒の結婚生活が始まっていたわけではありません。それなのに、御使いが現れて「身ごもる」と告げられたなどと、どうして信じられるでしょうか。ヨセフが信じてくれるかどうか、マリアには自信がありませんでした。この夫婦に、まだそこまでの信頼関係はなかったのです。そして、どのようにヨセフに伝えようかと考えて、ぐずぐずしているうちに、おなかがふくらみ始めて来たのでしょう。

身ごもったことを知ったヨセフは、ひそかにマリアと縁を切ろうかと考えました。御使いが現れて「聖霊によって身ごもる」と告げたなんてことは、信じられないからです。御使いが現れるということが不思議なことであるというのは、今も昔も変わりません。ヨセフにも信じられないことでした。そして、夫の知らないところで身ごもるなど、ヨセフにとって考えられないことでした。ヨセフは、もはやマリアを信じることができないという状況だったのではないでしょうか。

そんなヨセフに、主の御使いが現れてくださいました。御使いは、「恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである」と言って、マリアの言葉が正しいことを告げました。マリアを信じなさい、信頼しなさいと告げました。そして、ヨセフは、まことの神を信じる正しい人でした。神の御言葉を信じるから、ヨセフは、マリアを信じてマリアを迎え入れ、一緒に生活し始めました。生まれて来る男の子を自分の子どもとして受け入れ、生まれたことを共に喜び、共に生きたのです。

ヨセフとマリアの夫婦は、最初から強い夫婦だったのではありません。弱くもろい、ヒビが入りそうな夫婦でした。妻のことを信じられないと思ってしまう夫でした。けれども、信じられないと思ってしまう時に信じてこそ夫婦なのです。神の御言葉に励まされて互いを信じることに立った、このステキな夫婦に救い主の両親となる幸いが与えられました。これは、主なる神からの大切なメッセージです。

皆さんも、信じていたお友だちに裏切られたり、何か信じられないという出来事を経験するかもしれません。けれども、信じられない時に信じることこそが大切です。救い主イエス・キリストは、罪を犯し神を裏切り続けている罪人を信じて、神の御前に立ち帰ることを期待して、十字架につけられてくださいました。信じることに立ち続けたお方が救い主なのです。

皆さんも、人間関係がだんだん複雑になってきているでしょう。人に傷つけられることもあるでしょう。悔しく思うこともあるでしょう。それらは、生けるまことの神がすべてご存じです。主なる神は、十字架のイエス・キリストによって、わたしたちに、なお信じることに立ち続けなさい、とおっしゃっておられます。人を信じる力は神を信じることから来るのです。

〈お祈り〉

神さま、信じることのできないわたしたちに、信じる力と勇気をお与えください。神さまに依り頼んで、人を信じることができますように。イエスさまの御名によって、アーメン。

12月13日　「待降・ヨセフへの告知」　　中学科

〈ねらい〉

〇イエスの誕生の経緯を学ぶ。
〇イエスの名に表された神の救いの奥義を学ぶ。

〈展開例〉

質問(1)　ヨセフと婚約していたマリアは、どうなったか。

質問(2)　それに対し、ヨセフは最初どうしようと思ったか。

質問(3)　夢に現れた天使は何と告げたか。

質問(4)　イエスは、なぜインマヌエルと名付けられたと思うか。

質問５　ヨセフは、眠りから覚めた後、どうしたか。

まとめ

イエスの母マリアは、ヨセフと婚約していたが、聖霊によって身ごもった。イスラエルの律法では、婚約している状態で、娘が身ごもれば、石打ちの刑で殺される危険もあったので、ヨセフはひそかに縁を切ろうとしたが、主の天使が夢で現れ、マリアを迎え入れること、マリアに宿っている子どもは聖霊によるものであること、その子の名をイエスと付けるべきことを告げる。このことは、インマヌエルと呼ばれるメシアの到来の預言が成就するためであった。ヨセフは、夢から覚めると、天使の命じた通りに、マリアを迎え入れ、子どもが生まれた後、その子をイエスと名付けた。

イエスは、旧約で預言されていた救い主メシアとして無防備な赤ん坊の形を取って、地上に降りてこられた。イエスという名前は、「主は救い」という意味であり、預言にあるインマヌエルとは、「神は我々と共におられる」という意味であるが、これらの名前は、神の救いについての奥義を言い表している。赤子のイエスは、まことに神の救いとして犠牲となるためにお出でになった。この方は、天にある栄光を捨て、私たち人間と同じように肉の体を持って私たちの世界で私たちと共に生きて、とことん私たちの弱さや苦しみや闘いを味わってくださった。はるか天上から下界を見下ろす神なのではなく、まことに私たちと共にいてくださる方であった。私たちと共にいてくださって私たちを救う方、それが約束のメシアであるイエスであった。

〈祈り〉

神様、イエス様を地上に送ってくださって、ありがとうございます。自分たちの力では到底救いを得ることのできない私たちのために、あなたは、赤子としてイエス様をこの地上に送ってくださいました。あなたの深い御愛に感謝いたします。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。

12月20日　「降誕・東方の学者たち」　　聖書研究

テキスト　　マタイによる福音書　2章1〜12節

詩情豊かで神秘的な物語であるが、マタイは、ここでも神の約束の実現に焦点を置いており、神の約束の受け取り手が誰であるのかを語ろうとする。受け取り手は、驚くべきことに約束の民ではなく、異邦人の博士たちだったのである。先のヨセフでさえも、主の天使の介入がなければ、危うく受け取り手であることを失いそうになった。

〈神の約束の実現としての選びの器〉

博士たちの出身地の「東方」とは、ユダヤから見て「東方」であって、おそらくペルシャやバビロニアを指すのであろう。この「東方」の地は、約束の民イスラエルにとって忘れがたい捕囚の地であり、また遠くさかのぼると、カルデアのウルやニムロドの国という、まったくの異教の地・異邦人の地であった。神の救いの約束からもっとも遠く離れていたのが、この「東方の博士たち」だったのである。その地にいた彼らがユダヤの都エルサレムをどうしてはるばる長い旅をして訪ねることになったのか、その理由は「その方の星を見、拝むために来た」と彼ら自身が語っていることに見出される（2)。旧約聖書の昔からの約束で、「メシアの星」のことが伝わっていたのか、また、バビロン捕囚の折にイスラエルの民から直接に聞いたのかもしれない。いずれにしても、博士たちは何とかしてメシアに会うことを心から渇望していたことは確かなことであろう。そうでなければ、途中に広大な砂漠のある危険で困難な旅に出発することはなかったであろう。

〈約束の民自身の冷淡と拒否〉

他方、エルサレムの都にいたヘロデ大王をはじめ、律法学者・祭司長・住民など約束の民は、わずか10㎞も離れていないベツレヘムで生まれられたメシアを、訪ねることもお祝いすることもまったくしなかった。東方の博士たちが来訪して初めて、メシアの出身地を調査し確認する始末であった（4)。ここにマタイは、約束の民のメシア拒否という十字架の影を暗示するのである。メシアは約束の民のためにおいでになられたのに、その約束の民はそのお方を認めようとしなかった。

それはまた、東方の博士たちの贈り物においても同様に示されている（11)。黄金と乳香は共に高価なものであり、高貴なお方への献げものとして相応しいものであったが、どうして没薬という埋葬の時に用いる品物が含まれていたのか、ここにもマタイの意図があると見なさなければならない。

〈メシアと出会った博士たちの喜び〉

東方の博士たちが、冷淡な約束の民のいるエルサレムの地を去り、ベツレヘムの村里へただちに向かったのは想像に難くない。神は博士たちの願い求めをお聞きくださり、遂に救い主に出会うという大いなる喜びと祝福とをお与えになられた。神の約束からもっとも遠く離れていた彼らが、約束の受け取り手とされたのである。この彼らは、異邦人が神の救いの約束の受け取り手とされる、その前ぶれであり、予兆である。

彼らの喜びの中味は何か、それは、もちろん救い主に出会えたという喜びであるが、2章10節には、彼らは「救い主に会って」ではなく、「その星を見て」喜びにあふれたと注意深く述べられている。すでにメシアに会う前に「星を見る」ことによって与えられた喜び、それは、とりもなおさず信仰によってこそ救い主に出会えることを教えるものである。私たち罪人を真の救い主へと導き、そのお方に出会わせるのは、神の御言葉に聞き従うという信仰によってのみである。彼らを東の国からずっとメシアに出会うまでに誤りなく導いた「星」とは、神の御言葉であり、その御言葉に聞き従う信仰によってのみ成された神の大いなる救いの御業であった。救い主を心から慕い求め、そのお方のみもとにひざまずいて私たちの持っているものをおささげする、その礼拝こそ、神様が喜んで受け入れてくださる本当の神への献げものにほかならない。　　（山下朋彦）

※第19号（2005年10・11・12月号）117ページより、再掲載です（編集部)。

12月20日　「降誕・東方の学者たち」　　説教展開例

テキスト　　マタイによる福音書　2章1〜12節

〔単元のねらい〕

カリキュラムの単元目標は「礼拝への招き」「キリストの前にひれ伏し、すべてをささげて、神をほめたたえよう」である。世界初のメシア礼拝（キリストミサ＝クリスマス）をささげた東方の博士（占星術の学者）たちに倣おうとの勧めである。「その方の星を見た」という動機は、彼らを命がけの旅へと駆り立てた。人間による学問的真理への真摯な探究を、神はご自身の摂理的御業への接近と崇敬につなげてくださった。ユダヤの王メシアを礼拝する異邦人の物語。

「その方の星を見た」

むかしむかし、イエスさまが、ユダヤの国のベツレヘムの町にお生まれになる、すこし前のこと。一千キロもはなれた遠い遠い東の方に、天文学の博士たちが住んでいました。チグリス河とユーフラテス河の流れるその地域は、大昔からメソポタミア・アッシリア・バビロンと、次々に文明の栄えた場所でした。くさび形文字が発明され、天文学や数学や医学など、様々な学問が発達していたのです。

天文学の博士たちは、月の満ち欠けによってカレンダーを作ったり、太陽の高さによって昼と夜の時間や季節の移り変わりを計ったりして、人々の暮らしと畑仕事を支えました。この博士らは、占星術の学者でもあります。夜空の星は地上の人々を映す鏡である。そう考えて、星の動きを見ては、世の中の出来事を占いました。

ある年のこと。博士たちは、いつもと違う、とても珍しい動きをする星たちを見るのです。紀元前7年の5月7日、木星と土星とが重なり合うところを観測するのです。もしかすると、いつもと違うことが起こったのかもしれない。そう考えて、観測を続けたでしょう。すると、同じ年の10月5日、また木星と土星が重なり合うではありませんか。これは何か、とても珍しい出来事が、どこかで起こったに違いない。

そこで学者たちは、あれこれ考え始めます。木星は、太陽の周りを回る惑星たちの中で一番大きく見える星、これは権力と秩序のしるし、どこかの国を治める王のことではないだろうか。土星は、青白くて不吉に見える星、災いや不運のしるし、そんな苦難の中にある国のことではないだろうか。彼らには、思い当たる節がありました。そう！ユダヤです。

五百年前、バビロンによって滅亡したユダヤの王国は、そのあとペルシヤによって、エジプトやシリアによって、そしてローマによって、ずっと支配されてきました。奴隷として連れて来られた大勢のユダヤ人は、チグリス・ユーフラテスに残され、帰れないままだったのです。博士たちは、ユダヤ人の知り合いから、ユダヤの国の歴史を、あれこれ聞いていたでしょう。聖書のメシア預言も聞かされたことでしょう。民数記24章17節、「わたしには彼が見える。しかし今はいない。彼を仰いでいる。しかし間近にではない。ひとつの星が、ヤコブから進み出る。」イザヤ書9章5節、「一人の嬰児が私たちのために生まれる。一人の男の子が私たちに与えられる。権威は彼の肩にある。その名は驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君と唱えられる。」やがて新しいユダヤの国を興す、ユダヤ人の王メシアが来る。この預言は必ず実現すると。

もしかすると、その王が来たのではないか。木星と土星が二度も重なったのは、そのメシアが誕生したからではないか。そうだとしたら、これはユダヤ人の知り合いだけでなく、世界の国々にも、大きな出来事に違いない。すると！何か風のよう

なものが、博士らの心を吹き抜けました。あの星の意味を確かめずにはいられなくなったのです。そして旅の支度を始めます。新しい王のご誕生なら、手ぶらでお会いするわけにはいきません。贈り物を携えて、ユダヤに向けて、西へ一千キロの砂漠の旅。時速4キロのらくだで、毎日5時間進めば、50日で到達できる道程。それは、サソリや追いはぎの待つ危険きわまりない旅でしたが、何かに突き動かされるように、博士たちはいで立ちました。

ユダヤの都エルサレムに到着した博士たちは、早速人々に尋ねます。「ユダヤ人の王として新たに生まれた方はどこにおられますか。私たちはその方の星を見たので、一目お会いするため、はるばる東方からやって参りました。」しかし人々は不思議に思います。王家に新しい王子が誕生したというような話は、誰も聞いていなかったからです。噂は都中を駆け巡りました。

ヘロデ大王に謁見が叶い、博士たちは改めて尋ねるのです。「ユダヤ人の王として新たに生まれた方はどこにおられますか。私たちはその方の星を見たので、一目お会いするために、はるばる東方からやって参りました。」大王は不安になります。ローマ帝国の後ろ盾でユダヤを治めていたヘロデは、ユダヤ人ではなく、イドマヤ人だったからです。王位を危うくする者が誕生したとなれば一大事。彼は慌ててユダヤの宗教指導者や聖書学者を集めて、メシアの生まれる場所を調べさせ、ベツレヘムであることをつきとめます。都から南へ8キロ、かつてユダヤの国王ダビデが生まれた町、そこからイスラエルを養い導く指導者が現れる。そう語る預言者の記録が発見されたのです。ヘロデ大王は、密かに東方の博士たちを呼び、その子の居場所が分かったら教えて欲しいと頼んで、何食わぬ顔でベツレヘムへ送り出します。それは、メシアを暗殺するためにほかなりません。

エルサレムでの出来事を、博士たちは十分理解していたでしょう。何か不吉なことが起こりかねない、そんな心配を抱いていたでしょう。誰かに尾行されているかもしれない、そんな不安も感じていたでしょう。これからの旅には、細心の注意が必要でした。

そんな博士たちを奮い立たせるかのように、何と！　あの星が現れます。同年の12月1日、南の空で木星と土星がまたも重なり合うではありませんか。これでもう3度目です。彼らは、これまでの旅が間違っていなかったと確信し、喜び勇んで都を後にします。星の見える方へ、2時間ほどらくだを進めると、一軒の家に辿り着きます。らくだを降りて、その家に入ると、幼子が母とともにそこにいるのを見るのです。その貧しい人に神が共にいるのを見るのです。すると！　あの風のようなものがまた、博士らの心を吹き抜けました。ふた月前に旅立った時と同じように、彼らは居ても立ってもいられなくなります。あの星は、この方の星に違いない。彼らは喜びに満たされて、ユダヤの王メシアの前に膝をかがめ、額を地につけるほどに深々と拝礼し、携えてきた贈り物の箱を開け、黄金と乳香と没薬を差し出しました。これまでの旅の一部始終を、博士たちは幼子の母に告げると、ヘロデの所へ寄らずに、帰っていきました。

これが、世界で最初のメシア礼拝、キリストミサ、すなわちクリスマスでした。ユダヤの人ではなく外国の人が、幼子イエスをキリストと信じて従ったのです。彼らをそうさせたのは、あの星でした。星の意味を知りたいと思わせ、危険な旅をも厭わぬ勇気を与え、ベツレヘムの幼子こそ新しい王であると示した、あの風のようなものこそ、幼子の父なる神の霊でした。

クリスマス。私たちも、ユダヤ人の王として生まれた方に、会いに行きましょう。その方を私たちの王として迎えましょう。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、知恵を尽くして、幼子イエスを愛しましょう。　　（二宮　創）

〔今週の暗唱聖句〕ヨハネの黙示録 22章16節

わたしイエスは、ダビデのひこばえ、その一族、輝く明けの明星である。

12月20日　「降誕・東方の学者たち」　　幼稚科

〈ねらい〉

遠い東の国の博士たちが、星に導かれて救い主イエス様に出会った。わたしたちも、神様のご計画のうちに、誰かに導かれて、教会に来て、御言葉を通してイエス様と出会っている。イエス様に出会っていることを共に喜ぶ。

〈展開例〉

絵を使いながら(127ページ参照)、お話しをする。

これ誰か覚えてるかな？（絵：12月13日⑤）

……「ヨセフさん！」「マリアさん！」ふたりは、天使の言葉を信じて、結婚したのでした。マリアさんのおなかの赤ちゃんも少しづつ、大きくなってきています。

これは誰でしょう？（絵：博士）

この人たちは、月や太陽や、星、空のことを調べている博士さんたちです。この博士さんたちは、ヨセフさんやマリアさんのいる国からは、ずっとずっと遠い東の方に住んでいました。星を見て、何がおこるか占ったりもしていました。

さて、マリアさんのおなかがもうずいぶん大きくなった頃のことです。この東の方の国で、不思議に大きく光る星が現れました。(絵：星と博士)

「あの星は何だろう？」「あんなに大きく輝く星ははじめてだ！」「もしかして、あの星はユダヤの人々が言っていたユダヤ人の王がお生れになるしるしなんじゃないか？」博士たちは大騒ぎです。一人の博士が言いました。「その方を拝みに行かなくては！」もうひとりの博士も言いました。「ユダヤ人たちは、その方を救い主だと言っている。すばらしい王様に違いない。」みんな同じ気持ちです。「らくだに乗って、出発だ！」（絵：①）

長い長い旅がはじまりました。新しい王様に贈る宝物を持ち、来る日も来る日も星をたよりに進みます。砂だらけのさばくの道を、みんなで励まし合いながら進みます。何十日もして、やっとユダヤのエルサレムという町までやってきました。

ちょうどその頃、ユダヤのベツレヘムという町の馬小屋の中で、イエス様はお生まれになりました。でも、博士さんたちがエルサレムの町で、「ユダヤの新しい王としてお生まれになった方はどこにおられますか？」と聞いても、誰一人知りません。博士さんたちは、がっかりしてしまいました。「ここまで来たのに。どうして、誰も知らないんだろう？」

……そのうちに、新しく生まれた王さまを探している人たちが町にいるというううわさが広がり、ヘロデ王の耳にも入りました。(絵：ヘロデ王)

ヘロデ王は、新しい王様が生まれたと聞いてこわくなり、エルサレムの祭司長たちや、聖書の専門家をみんな集めて、新しい王様、救い主がどこに生まれることになっているか聞きだしました。祭司長や、聖書の専門家は答えました。「ユダヤのベツレヘムです」。ヘロデ王は、すぐに博士たちを呼び寄せました。そして、「行って、その子のことをよく調べて、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝むから。」と命令し、博士さんたちをベツレヘムへ送り出しました。(絵：②)

こうして、博士さんたちはベツレヘムに向かって出発しました。すると、あの東の国で見たのと同じ大きな星がまた現れました。(絵：星)そして、博士さんたちを導くように進みはじめました。その星はイエス様のいるところの上でぴたっと止まりました。「ここだ！」「ここに違いない！」博士さんたちは大喜びです。「やったー！」ついに、新しいユダヤの王、救い主に会えるのです。

博士さんたちが、その場所に入って行くと、そこには、イエス様とマリアさんがいっしょにいました。博士たちは、ひれ伏して、イエス様を拝みました。「救い主のお誕生おめでとうございます」。そして、贈り物の宝の箱を開き、黄金、乳香、没薬を捧げました。博士さんたちはとっても嬉しそう。旅の疲れも忘れてしまっていました。(絵：博士を裏返す、ひれ伏す博士)

博士さんたちは、エルサレムに戻る前にベツレヘムで一晩泊まりました。……すると、夢で「ヘロデのところへはもどるな」とお告げがあったので、博士さんたちは、お告げの言うとおりに、ヘロデのところへは行かず、来たときとは別の道を通って、東の方の国へ帰って行きました。

12月20日　「降誕・東方の学者たち」　　小学科下級

〈ねらい①〉

説教を振り返り、東方の博士たちが、生まれたばかりのイエス様を礼拝することによって与えられた希望を確認する。

〈展開例①〉

今日のお話は、みんなもよく知っている東方の博士たちのお話でした。ユダヤ人の王メシアにお会いしたい、その方を自分の救い主として礼拝したいさｎ …そんな強い思いをもって、危険な砂漠の道をはるばる旅してきた博士たち。彼らの思いはかなえられ、生まれたばかりのイエス様にお会いすることができました。どれほどうれしかったことでしょう。そして博士たちがこれほどまでして会いたがっていたイエス様が、今や聖霊において私たちの心に宿っていてくださって、生きていてくださって、私たちの王様となってくださっています。すばらしいことではないですか。

〈ねらい②〉

博士たちがイエス様にささげた贈り物のすばらしさに着目し、まことの王にささげものをする喜びを確認する。

〈展開例②〉

博士たちがたずさえてきた贈り物。黄金は分かるけど、乳香や没薬ってよく分からないね。でもとても高価な香料なんですよ（可能ならば、どこかで入手なさってください）。当時では最高の贈り物でした。世界を救うまことの王様として生まれてきてくださったイエス様に、最上の贈り物をしたかったのですね。

私たちも礼拝で、感謝と献身のしるしとして献金をおささげしますね。小さな私たちでも、今イエス様にささげることのできる精一杯をおささげしましょう。イエス様は私たちのために死んでよみがえってくださった救い主ですから。私たちに代わって死ぬために生まれてきてくださったイエス様の、お誕生日であるクリスマスに、私たちの精一杯のプレゼントをおささげしましょう。

外国のお話で、ある子どもが礼拝の中で、献金を集めるお盆の上に乗ってしまったんだって。なんでそんなことを !? その時彼はお金を持っていなかったのです。でも自分のすべてをおささげしたいという気持ちを、何とかして表すために、「ぼくをささげます」ってお盆に乗ってしまったんだって。みんなもこのクリスマスに、お盆に乗ってみようか？

〈祈り〉

神様。わたしたちのまことの王様、イエス様を与えてくださってありがとうございます。小さなわたしたちですが、東方の博士たちのように精一杯のささげものをしますから、喜んで受け取ってください。

12月20日　「降誕・東方の学者たち」　　小学科上級

〈ねらい〉

イエスさまのご降誕のときに訪れた東の国の占星術の学者たちの姿を通して、聖書が大切であることを学ぶ。

〈展開例〉

先ほどは、クリスマスの礼拝を行いました。礼拝の中でわたしたちが聞いた話を思い出してください。それは、イエスさまがお生まれになったときに、ユダヤよりも東にある国の「占星術の学者たち」が、彼らの星占いの結果として、ユダヤのベツレヘムに「ユダヤ人の王」が生まれるということが分かったので、彼らが行った占いの結果が事実であるかどうかを確認するためにやって来た、という話でした。

なんだかへんな話だなあ、と思いませんか。だって、わたしたちは「星占い」というようなものを全く信じていませんし、そのようなものが“当たる”とは考えていません。ところが、先ほどの礼拝で学んだのは、東の国の占星術の学者たちが行った星占いがぴたりと当たったので、その人たちがイエスさまのところまでやってきた、という話でした。

「そうか、星占いというのもたまには当たることがあるんだねえ。それじゃあ、少しくらいはそういうものも信じてみようかなあ」というふうに考えてもよいのでしょうか。なんだか、だんだん不安になってきます。

でも、今日の聖書の個所をよく読みますと、わたしたちはやはり「星占い」というようなものを信じる必要はないし、信じるべきでもないということが分かります。書いてあることからはっきり分かることは、この東の国の占星術の学者たちは、どこから手に入れたかは分かりませんが、外国にいながら（旧約）聖書の実物を手に入れていたということです。「預言者はこう書いています」（5節）と断りながら、（旧約）聖書（ミカ書５：１）から引用していることで明らかです。

つまり、ここで分かることは、占星術の学者たちの最終的な判断の根拠は、彼らの星占いの結果ではなく、（旧約）聖書に記されている言葉であったということです。

もちろん彼ら自身が、星占いが“当たる”ということを否定することはなかったでしょう。しかし、ここでつかんでおくべき重要な点は、彼らが判断の根拠にしたのは「星占い」だけではなかったということです。根拠は他にもいろいろあったし、そのいろいろの中に「聖書」も含まれていた、ということです。

なぜこの点が重要なのかを説明いたします。ひとことで言えば、今日の個所に出てくる占星術の学者たちの姿は、今の時代に生きている人々の姿にそっくりであるということです。

その姿は、わたしたちのように毎週日曜日に教会に通っている者たちとは違うところがあるかもしれません。神さまを信じるとか、教会に通うとか、そういうことをしていない人たちが今ではたくさんいます。しかし、その人たちは何にも信じていないのかというと、決してそうではなく、占いのようなものを信じてみたり、いろんな本をたくさん読んだりしています。

そして、そのことについては、毎週日曜日に教会に通っているわたしたちも、それほど違いがあるわけではありません。占いは信じていませんが、聖書だけしか読んだことがないわけではなく、たくさんの本を読んだり、さまざまな価値観があることを知っています。

しかしそれでも、わたしたちが最終的に信頼しているのは聖書です。東の国の学者たちも、最終的には「聖書に導かれて」ベツレヘムまで来ることができました。まだ聖書を読んだことがない人は、ぜひこの書物を読んでください。

〈お祈り〉

神さま、いろんな宗教や多くの価値観の中でわたしたちが救い主イエス・キリストのもとへと導かれていくために、聖書の学びを続けることができますように。イエスさまの御名によって、アーメン。

12月20日　「降誕・東方の学者たち」　　中学科

〈ねらい〉

〇東方の学者たちがどのようにメシアへと導かれていったのかを学ぶ。

〇イエスのメシア性とは、どのようなものであったかを学ぶ。

〈展開例〉

質問１　イエスは、どこでお生まれになったか。その事について、どのような預言がなされていたか。

質問２　占星術の学者たちは、何をしにエルサレムに来たのか。

質問３　学者たちが王の言葉を聞いて出かけた後、どうなったか。

質問４　彼らは、幼子に会った時に何をしたか。

質問５　その後、彼らはどうしたか。

まとめ

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。この事は、ミカ５：１に預言されていたことの成就であり、その場所は、約束のメシアの誕生される場所として昔から知られていた場所であった。東方の学者たちは、メシアの星を見て、はるばる遠方から旅をして、メシアを拝むためにエルサレムまでやって来た。ヘロデ大王は、学者たちに真意を隠して、自分も行って拝みたいからと言って、幼子の情報を知らせるよう彼らに頼んで、送り出す。学者たちが出かけると、メシアの星が現れた。星は、喜びにあふれた彼らを幼子のおられる所まで導いていき、そこで止まると、彼らはひれ伏して幼子を拝み、黄金・乳香・没薬を献げる。神は、幼子を殺そうとするヘロデ大王には幼子の情報を知らせないように、夢で学者たちにヘロデの所に帰らぬよう指示を与え、彼らはそれに従って本国に帰っていった。

メシアは、イスラエルを復興させるために神が約束された指導者であったが、神の民イスラエルの指導者たちとその王ヘロデは、メシア誕生の報を聞いても拝みに行こうとはせず、最初にこの幼子を拝んだのは、東方の占星術の学者たちという全くの異邦人であった。彼らははるばる遠くから当時の旅の危険をも顧みず、自分たちの目でメシアを見て拝もうとユダヤまでやって来た。彼らは、異邦人でありながら、星という神からのしるしを信じて遠くからメシアを拝みに来るという、信仰を持つ異邦人の先駆けともいうべき存在となった。彼らは、喜びにあふれ、星に導かれて幼子を探し当て、メシアにこの上なくふさわしい三種の贈り物をする。王の身分を表す黄金、神の身分を表す乳香、そして十字架上での贖いの死を象徴する没薬である。イエスは、ユダヤ人の王としてお生まれになり、真の人にして真の神、私たち人間すべての罪を身に引き受けて十字架上で死なれるという使命を帯びてお生まれになった、神の約束のメシアであった。約束の神の民は、彼を受け入れなかったが、異邦人の学者たちは、喜びにあふれて彼を礼拝した。イスラエルから全世界の民へと向かうイエスの救いはこのように誕生の時から前ぶれとして示されていたのである。

〈祈り〉

神様、約束のメシアであるイエス様を与えてくださって、ありがとうございます。私たちが救いの喜びを持って、心から感謝し、全身全霊をもってあなたに従って生きていけるようどうかお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。

12月27日　「一年の感謝」　聖書研究

テキスト　　詩編124編

一連の「巡礼歌」の文脈からすれば、聖所における礼拝でささげるべき、嘆願の祈り（123編）に続く、感謝の祈り、もしくは賛歌。しかし、本編の主眼は、「もしも主がおられなければ」という導入の背後で主張されている「主がともにおられる」ことへの信頼を参拝者に促すことにあり、文体からしても知恵文学に近い。

冒頭の「もしも主がわたしたちにいなかったなら」という句の含意は、新共同訳に代表される「主がわたしたちの味方でなかったなら」というように「敵・味方」の図式でのみ捉えるならば一面的な理解に留まる。本編では敵に関する語法が不明瞭で、「敵」とか「悪人」といった通常の語が見当たらず、全体の喩えを通して暗示されるだけである。とくに2節後句にある「人（アダム）」という語は、イスラエル民族に敵対する他民族というよりは、神に対する人間を指す。よって本編は、イスラエルの民が遭遇する種々の艱難をできるだけ普遍的な視野で捉え、歴史のあらゆる状況に適合されるよう按配されたものと見られる。その意図は単に牧会的であるばかりでなく、「艱難」についての神学的な理解とも深く結びつく。

3〜5節で展開されるのは、神がおられない状況でイスラエルが陥るはずの結末で、聖書の伝統的なイメージが用いられる。4節、5節にある水のモチーフに引きずられて、3節も同じように古代神話の海のモチーフだとする見解があるが、必ずしもそうとはいえない。3節の表現を聖書自体から探れば、民数記16章32,33節や箴言1章12節との関連が浮かび上がる。具体的な映像としては、モーセにはむかったコラの反逆の結末を記す民数記の記述が有力であり、神学的な含意からすると箴言にある「陰府（シェオール）の力」が相当する。一方を選択するのではなく、両者を総合するような伝統的な語法と理解したい（よって、詩人の心情を活き活きと描写するというふうには考えない）。

そして4節、5節の「急流（もしくは川）」や「荒ぶる水」も、パレスチナの自然を背景としていたり、古代オリエントの神話のモチーフなのだが、むしろ、ここには出エジプトにおける葦の海やヨルダン渡渉における川、また預言者ヨナを呑み込んだ海など、聖書のイメージに結びつく。それらは必ずしもイスラエルを脅かしたものではなく、むしろ敵を滅ぼした神の奇跡的な力であったが、ここでは「もし神がいなかったら」という前提なのである。すなわち、もしも主がイスラエルと共におられなければ、聖書が語りつづけるごとく、神に反逆する者たちが辿った破滅がイスラエルの結末であったに違いない、という。1節にある「さあ言え、イスラエルよ」という呼びかけは、「わたしに続いて述べよ」という礼拝における司式者の声かも知れないが、教導的な意図とすれば「考えてみよ」と御言葉の想起を促す呼びかけである。

6節、7節に描かれる「罠（捕獲網）にかかった小鳥」であるイスラエルのイメージは、神に対峙する「人」(2) の弱々しさを自ら表明する。「罠」を仕掛けるのは敵の仕業に相違ないが、前述のようにここでは歴史的な体験の背後にある、陰府（シェオール）の力が暗示されることで、死と破滅に迫られるすべての信仰者に「解放」を宣言するものとなる。それゆえに「主をたたえよ」（新共同訳）との呼びかけがなされるのである。小鳥のような弱さを知った民は、人ではなく神を畏れて目を上げる時、そこに「我らの助け」があり、かつて主が共におられなかったことはなく、これからも共にあるとの信頼へと導かれる。「主が共にある」とは、「われらのために主がおられ、われらは主のものである」ことを表す。この契約の結びつきにおいて、主は私たちを死に引き渡しはしない。復活によって網は破られ、小鳥たちは自由に飛び立った。そして、8節はキリスト教会の伝統的な式文の文句となって今日に至る。

（牧野信成）

12月27日　「一年の感謝」　説教展開例

テキスト　詩編124編

〔単元のねらい〕

子どもたちと共に、一年の歩みを振り返っていただきたい。特に今年は世界中が経済危機の中にあって、子どもたちの中にも影響があり、実質的にもしくは精神的に苦しみの中にいる人もいるかも知れません。またその他においても、楽しみ・喜びばかりか、お友だちとの関係や進路のことなど、様々なことにおいて悩み・苦しみを持っている子どもたちもあるかと思います。

しかし、今も主なる神さまが私たちに命をお与え下り、必要なものを満たしていてくださっています。不平・不満もあるだろうが、それ以上に、神さまは試練を乗り越える力をお与えくださっています。新しく迎える年も、どのような苦しみや悲しみを迎えるかもしれないが、どのような時にも、神さまが共にいてくださることを信じ、神さまにすべてを委ねて祈りつつ歩むことができるように、子どもたちに語っていただきたい。

「神さまはいつもあなたを守っています」

2009年も、今週で終わろうとしていますね。皆さんにとって、今年はどのような一年だったでしょうか。「わたしの十大ニュース」を考えてみませんか（少しばかり、子どもたちに考える時間を与える)。嬉しいこと、楽しいことはどんなことがあったでしょうか。いくつもあったことと思います。神さまが一緒にいてくださり、楽しみ・喜びをお与えくださったことに感謝しなければなりませんね。

しかしそれと同時に、悲しいこと、苦しいこともあったかと思います。病気や怪我をした人もいるかも知れません。お父さん・お母さんのお仕事の関係で、家族みんなで苦しんだ人もいるかも知れません。なんで、神さまがいるのに、この様な苦しみをしなければならないのだろう、神さまがいるのであれば、このような苦しみが起こらないようにして欲しい、と思ってしまいます。

しかし、ちょっと、十大ニュースから離れて、今日、何をしてきたのか、確認していただきたいと思います。朝起きてから、朝ご飯を食べましたね。食べてこなかったお友だちもいるかな？　リジョイスを家族と一緒に読んできたお友だちもいるでしょう。そして、教会に来て、今、神さまの御前に集められ、神さまを礼拝しています。みんなは生きています。そして普通の生活が与えられています。これは神さまが私たちにお与えくださった素晴らしい恵みです。そして神さまは、住む家、食べるもの、着るもの、私たちの必要をすべて整えてくださっています。

最初にお読みしました詩編で、最初に「主がわたしたちの味方でなかったなら」と私たちに語りかけてきます。

もし主なる神さまが私たちの味方でなかったなら、最終的に私たちを守ってくださる方はいません。お父さん、お母さん、家族の人たち、教会の人たち、お友だちもいるでしょうが、最後の砦は神さまです。そして神さまが守っていてくださらなければ、私たちは苦しみを乗り越えることもできなかったはずです。

皆さんは、イスラエルの人たちがエジプトにおいて奴隷とされていた時に、神さまがモーセさんを立て、救い出してくださったことを知っていると思います（参照：出エジプト記7～12章)。神さまはどのようにしてイスラエルの人たちを救い

出してくださったでしょうか。エジプト王ファラオとエジプト人に対する災いの奇跡を行うことによってです。奇跡は十ありました。①血の災い、②蛙の災い、③ぶよの災い、④あぶの災い、⑤疫病の災い、⑥はれ物の災い、⑦雹の災い、⑧いなごの災い、⑨暗闇の災い、⑩初子の死の災いです。これらは、神さまがモーセとイスラエルの人たちと一緒にいてくださったからこそ、災いがもたらされることなく、守られたのですよね。また、エジプトから脱出する時も、後ろからエジプト王ファラオと兵士たちが追って来て、イスラエルの人たちが絶体絶命のピンチにたった時も、神さまはイスラエルの人たちを守ってくださいました。そうです。イスラエルの人たちの行く手を妨げていた海が開け、イスラエルの人たちはそこを渡っていきますが、イスラエルの人たちが渡り終えるや否や、海は再び閉ざされ、エジプト軍は滅ぼされてしまいます（参照：出エジプト記14章）。

最初にお読みした詩編で「主がわたしたちの味方でなかったなら」との言葉は、一度ばかりか二度も語られています。二度も繰り返すということは、神さまが味方でなかったのならどれだけの苦しみが私たちに与えられたのだろうかと恐怖があるからです。私たちはその恐怖に耐えることはできません。神さまが共にいてくださり、味方であるからこそ神さまによって守られているのです。この喜びを私たちは忘れてはいけません。

パウロさんは、この様なことを語っています。「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」（コリントー10:13）

神さまは、私たちをすでに教会にお導きくださり、神さまの子どもとしてくださっています。そして神さまは私たちを愛していてくださっています。パンを欲しいのに石を与えることはしません。魚を欲しがっているのに、蛇を与えることはしません（マタイ7:9～10）。神さまは、神の子どもとされた私たちに、必ず良い物をお与えくださるのです。

だからこそ、神さまが共にいてくださり、神さまが神さまを信じている私たちの味方であるのだから、どのような苦しみがあったとしても、必ず神さまは守ってくださいます。苦しみを乗り越えるように支えてくださいます。

今年、一年間、神さまは、私たちの生活をすべて守り導いてくださいました。そして、今、神さまに感謝しつつ、神さまを礼拝する時が与えられているのです。神さまに、感謝しよう。そして、これから始まります2010年も、神さまが私たちと共にいてくださり、私たちの味方でいてください。だからこそ、私たちは、神さまの御言葉に聞き、神さまに祈り続けつつ、安心して新しいことにもチャレンジしていくことができるのだと思います。　（辻　幸宏）

〔今週の暗唱聖句〕　詩編124編8節

わたしたちの助けは
天地を造られた主の御名にある。

12月27日　「一年の感謝」　幼稚科

〈ねらい〉

一年の恵みを思い出し、感謝する。

詩編124編の詩にあわせて、神様を讃美する。

〈展開例〉

絵を使いながら（128ページ参照）、詩編124編を朗読する。最初は先生、次にお母さんたち、最後にみんなで、☆印の部分は子どもたちが覚えていっしょに唱える。それぞれの子どもに合わせて、覚えられる範囲で。

①イスラエルよ、言え。
「主がわたしたちの味方でなかったなら
☆主がわたしたちの味方でなかったなら
　わたしたちに逆らう者が立ったとき
②そのとき、わたしたちは生きながら
敵意の炎に呑み込まれていたであろう。
そのとき、大水がわたしたちを押し流し
激流がわたしたちを越えて行ったであろう。
そのとき、わたしたちを越えて行ったであろう
驕り高ぶる大水が。
③☆主をたたえよ。
　主はわたしたちを敵の餌食になさらなかった。
④仕掛けられた網から逃れる鳥のように
わたしたちの魂は逃れ出た。
網は破られ、わたしたちは逃れ出た。
⑤☆わたしたちの助けは、
　天地を造られた主の御名にある。

「神様にありがとう」を言おう。

一年の中で、感謝することを思い出し、一人ひとつずつ順番に言う。小さいお友だちは、今日、昨日、一週間の間や、クリスマスのことなど、近いところでお母さんに手伝ってもらいながら思い出す。

〈お祈り〉

てんのおとうさま。一年前には、今よりずっと小さかったわたしたちも、こんなに大きくなりました。いっぱい神様のお話しも聞けました。ありがとうございます。そして、何よりイエス様を感謝します。イエスさまによって、アーメン。

12月27日　「一年の感謝」　　小学科下級

〈ねらい〉

今年一年の様々な出来事を思い巡らし、神に感謝し、みんなで祈る。

〈展開例〉

どんな恵みがあったか語り合うことです。でもそれが一番難しいものですが。子どもたちが話をしやすいように、いくつか質問を用意しておくといいかもしれません。あまりまじめなものばかりでなく、笑いながら話せるようなものがいいでしょう。子どもたちの本音は、談笑の中に垣間見えるものです。そういった談笑から、彼らの中にある「神様に生かされて今年も歩んできた」という無意識の喜びを見出してあげて、それを教師が言葉にすることで意識化してあげていただきたいと思います。

・新しい友だちは何人できました？　恋のライバルは現れた？

(神が与えてくださった出会いを感謝)

・今年お母さんからほめられてうれしかったことは？　怒られていやだったことは？（神が与えてくださった成長を感謝）

・今年歌った賛美歌で一番好きだったものは？　先生のお話の中で、一番ウケたギャグは？　先生も生徒も全部ふくめて、教会学校のMVPはだれ？（神を礼拝することができたことの感謝。）

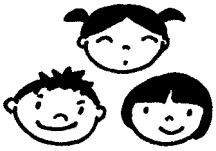
・今年食べたもののなかで一番おいしかったものは？(神様が与えてくださった日々の糧に感謝)

・今年は何回泣いちゃったかな？　かけっこで負けて悔しくて泣いちゃったこと、ケンカして悲しくて泣いちゃったこと……色々あったかな？

（神様が与えてくださった試練に感謝。また一番惨めな時にこそ共にいてくださった、神の憐れみに感謝。）

〈祈り〉

神様。この一年間、あなたは私たちに必要なすべてのことを与えてくださいました。強い風が吹く日も、心が凍りそうに悲しかった時も、いつもあなたがいっしょにいてくださいました。ありがとうございます。あなたに感謝します。来年も、あなたが私たちの神様でいてください。そして私たちが神様の子として、もっとふさわしくなることができますように。



12月27日　「一年の感謝」　小学科上級

〈ねらい〉

旧約の民は、喜びも悲しみも、率直に神に訴えて賛美し、祈りました。わたしたちも、一年の歩みをとおして与えられた喜びと悲しみを分かち合い、主に祈りをささげましょう。

〈展開例〉

今日の詩編に、「敵意の炎」とか「大水」や「激流」とありました。これは、人生の中でいろいろな苦しいこと、悲しいことがあることを意味しています。生けるまことの神を信じて、信仰者、キリスト者として生きていても、いつも楽しいこと、嬉しいことばかりではありません。苦しいこと、つらいこと、悲しいこともたくさんあるのです。人間が神の御前に罪を犯して堕落して以来、わたしたちは、いろいろな苦しみ、悲しみを味わわないで生きることはできません。残念ですが、それがわたしたちの現実です。

けれども、生けるまことの神はわたしたちの味方であり、力強いお方です。わたしたちの苦しいこと、つらいこと、悲しいことを善いことにつくりかえてくださいます。詩編は、主なる神が助けてくださったとうたっています。天地を造られた神は、わたしたちの生活のすべてをご存じです。わたしたちを苦しみから助け出して、苦しみをも恵みへと変えてくださいます。

我が家には子どもが三人いますが、その真ん中の一人が病気で入院するということがありました。一週間くらい入院することになって、まだ小さいので、一人だけで入院することはできません。お母さんが付き添うことになりました。そして、上の子どもはお父さんと一緒にいて、学校にも行くのでよいのですが、下の子どもはまだ幼稚園にも行っておらず、おばあちゃんに預かってもらうことになりました。三人の子どもたちがみんなばらばらで、とくにいちばん小さい子はお父さんからもお母さんからも離れることになって、とてもつらく悲しい思いをすることになりました。けれども、別れる時に一緒にお祈りして別れたのです。真ん中の子が病気で入院しています。神さま、けれども、あなたが一緒にいて、いやしてくださいます。そして、それまで別れ別れになりますけれども、どこにいてもあなたが一緒にいてくださって、わたしたちは一つです。そうお祈りして、別れてからもお互いのためにお祈りしました。それは、とてもつらい経験でしたけれど、わたしたちの家族が本当に一つの家族であるために、大切な経験でした。別れていても、お祈りして、一緒であることができるのです。いちばん小さな子も、おばあちゃんと一緒にいつもお祈りしていました。真ん中の子が元気になって、皆が再開した時は、本当に嬉しかったです。離れていても、家族は一つであるという恵みを味わう時になりました。つらいことでしたが、神さまが、それを恵みに変えてくださったのです。

皆さんは、この一年、どんなことを経験したでしょうか。楽しいこと、嬉しいことがあれば、つらいこと、悲しいこと、苦しいこともあったでしょうね。苦しかった、つらかったけれども、今考えてみると、良い経験になった、というようなことはあるでしょうか。それは、神さまが造りかえてくださったのですよ。神さまが、わたしたちを導いてくださっているのです。残りの時間で、分かち合ってみましょう。

〇一年の歩みを振り返って、教師が何か証しを考えてみるとよいでしょう。苦しい経験が恵みと感じられたことを証ししましょう。

〇子どもたちの声を聞きましょう。子どもたちからは、楽しいこと、嬉しかったことを聞くだけでもよいでしょう。苦しかったことを無理に聞かない配慮も必要です。

〈お祈り〉

神さま、わたしたちの一年を守り導いてくださって、ありがとうございました。楽しいことだけでなく、苦しかったこと、つらいことも、神さま、あなたがすべてをご存じです。イエスさまの御名によって、アーメン。

12月27日　「一年の感謝」　中学科

〈ねらい〉

〇一年間の神の恵みを具体的に思い起こす。
〇神の恵みに心から感謝をささげる。

〈展開例〉

質問１　1節～5節では、主が私たちの味方でなかったらどうであったと書かれているか。

質問２　6節 、7節では、どういう理由で主をたたえよと書いてあるか。

質問３　8節で、私たちの助けは何にあると書いてあるか。

質問４　この一年を振り返って、つらかった、大変だったと思うようなことはあったか。あったとすれば、どんなことだったか。

質問５　そうした時に、神はどのように助けてくださったか。

まとめ

1～5節では、もし主がわたしたちの味方でなかったら、私たちは生きながら敵意の炎にのみ込まれ、大水が私たちを押し流し、激流が、誇り高ぶる大水が私たちを超えていっただろうと記されている。続く6,7節では、主が私たちを敵の餌食になさらず、わたしたちは逃れることができたので、主をたたえよとダビデは呼びかけている。最後にダビデは、私たちの助けは、天地を創られた主の御名にあると締め括る。

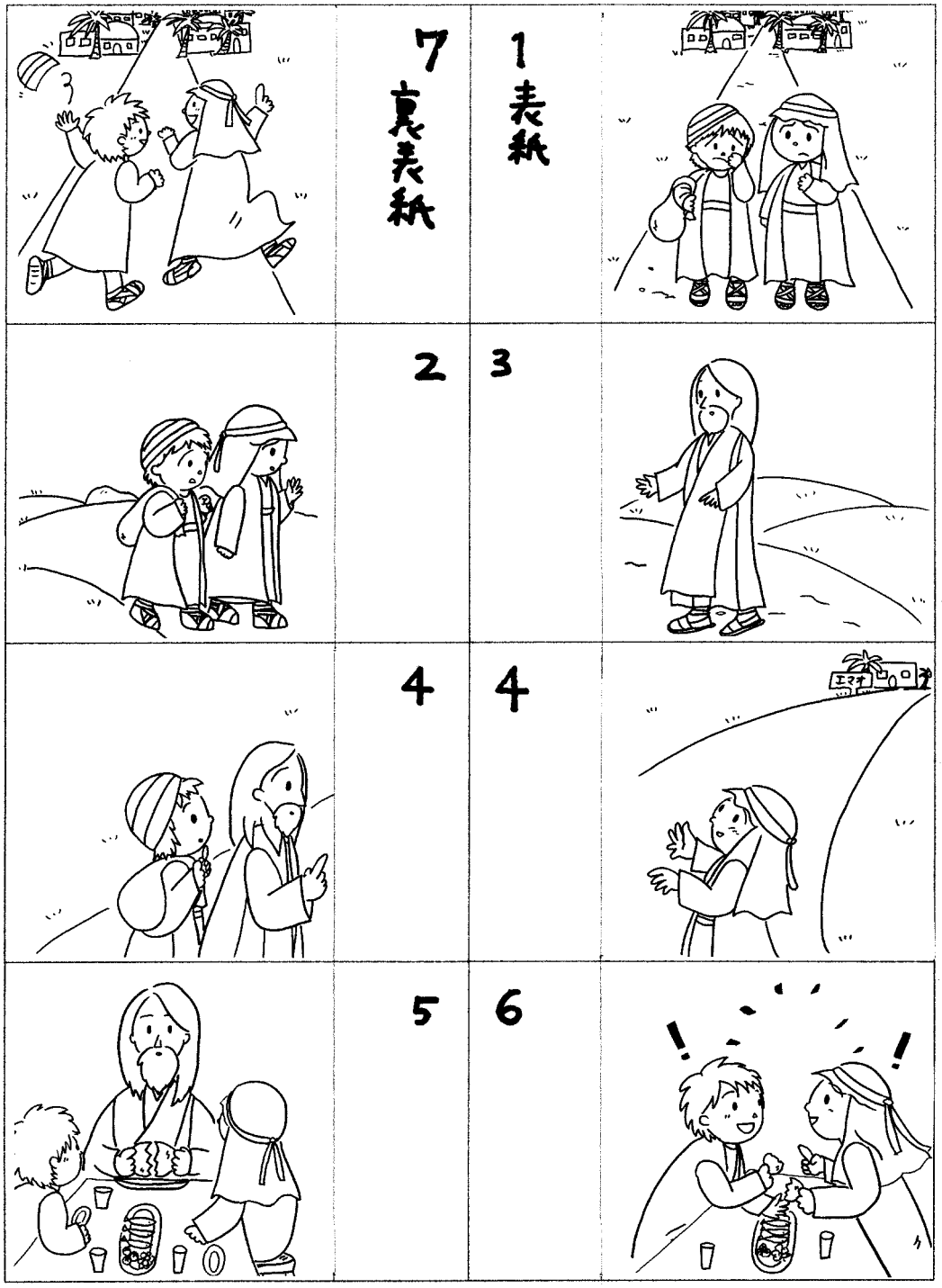
私たちは、神に愛されている神の子どもたちである。神は、いかなる時にも私たちを愛し、私たちを攻撃する者たちから守ってくださる。たとえ人間的には悲しくつらい事が起きたとしても、その背後には必ず「私たちの成長のため」という神の御配慮がある。私たちにとって何らかの益が約束されていない限り、神が無意味に私たちの上に悲しい出来事が起こるのを許されることはない。そうした意味で、私たちは、天地を創られた神の御手の中にあって、この一年も完全に守られてきたのである。この一年も、神は私たちの味方であり続けてくださった。この一年にちりばめられていた、私たちを愛する父としての神の愛と御配慮のひとつひとつを思い起こし、神に心からなる感謝をささげる時とさせていただきたい。

〈祈り〉

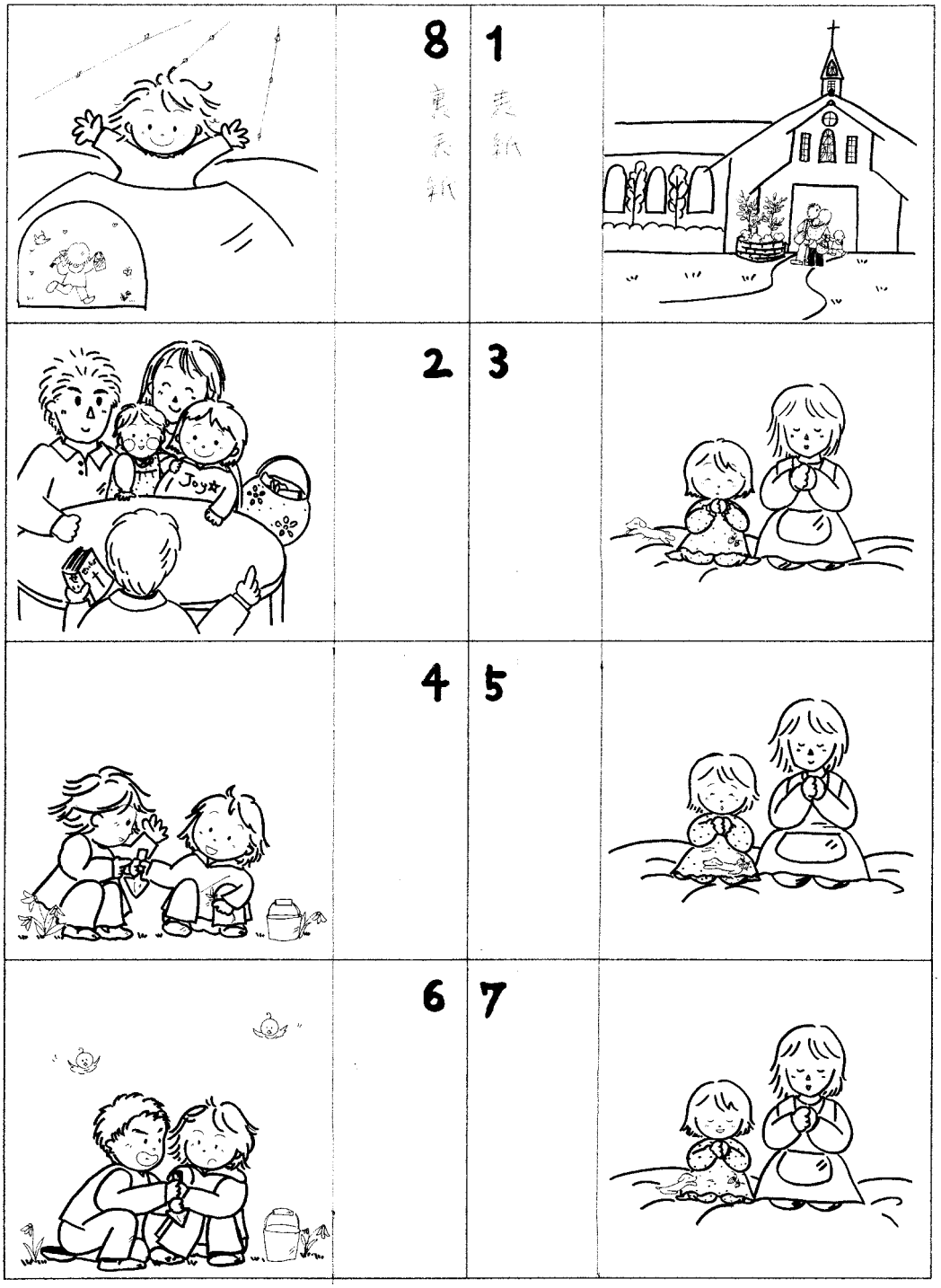
神様、この一年もあなたが私たちを守り続けてくださって、ありがとうございます。私たちは、弱く愚かで、あなたに背くこと多く、従うことの少ない者であったことを懺悔いたします。どうか、来る年、少しでもあなたに従う者となることができるようお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。

幼稚科視覚教材

10/4, 10/18

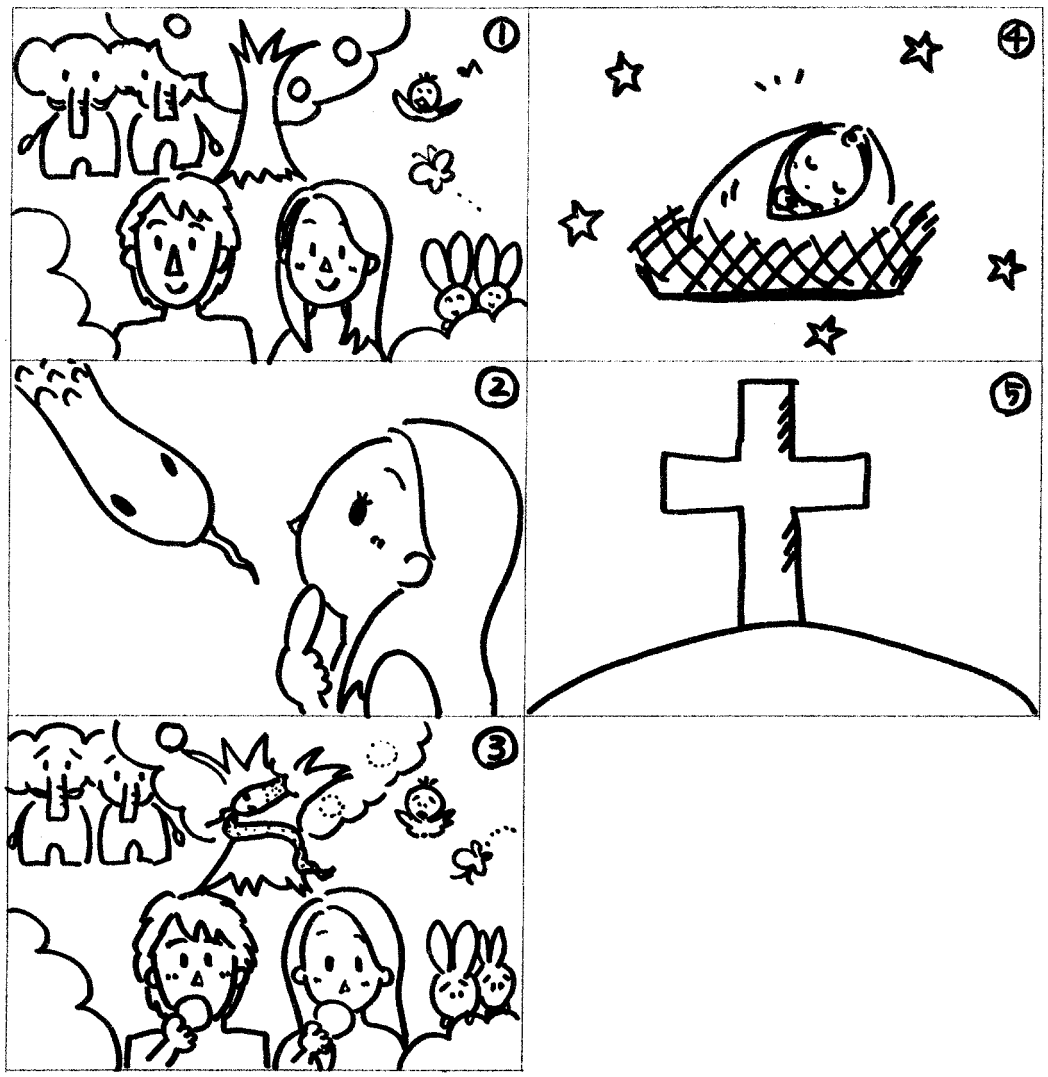


10/11



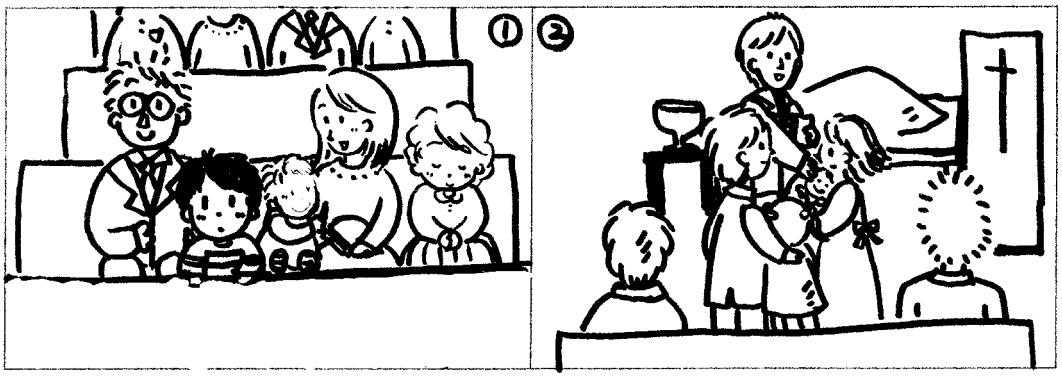
幼稚科視覚教材

10/25

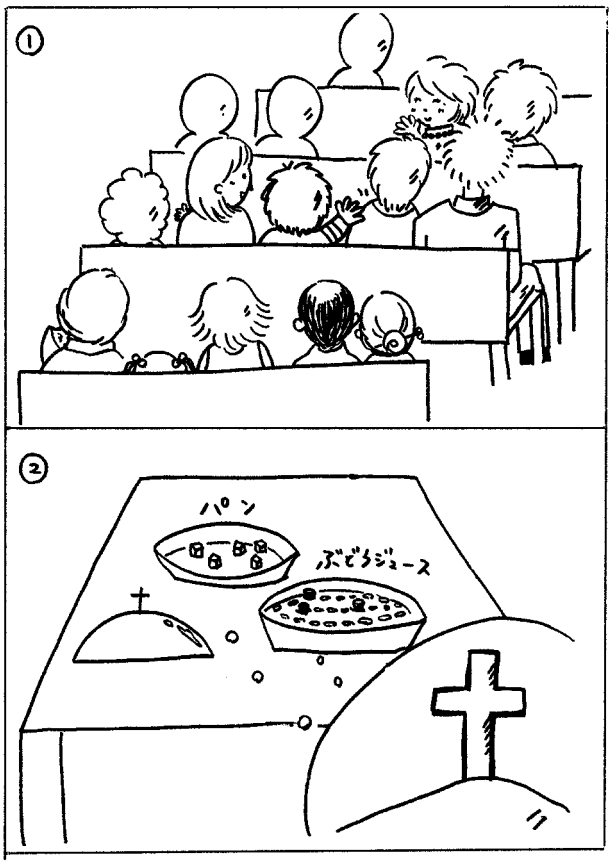


幼稚科視覚教材

11/1

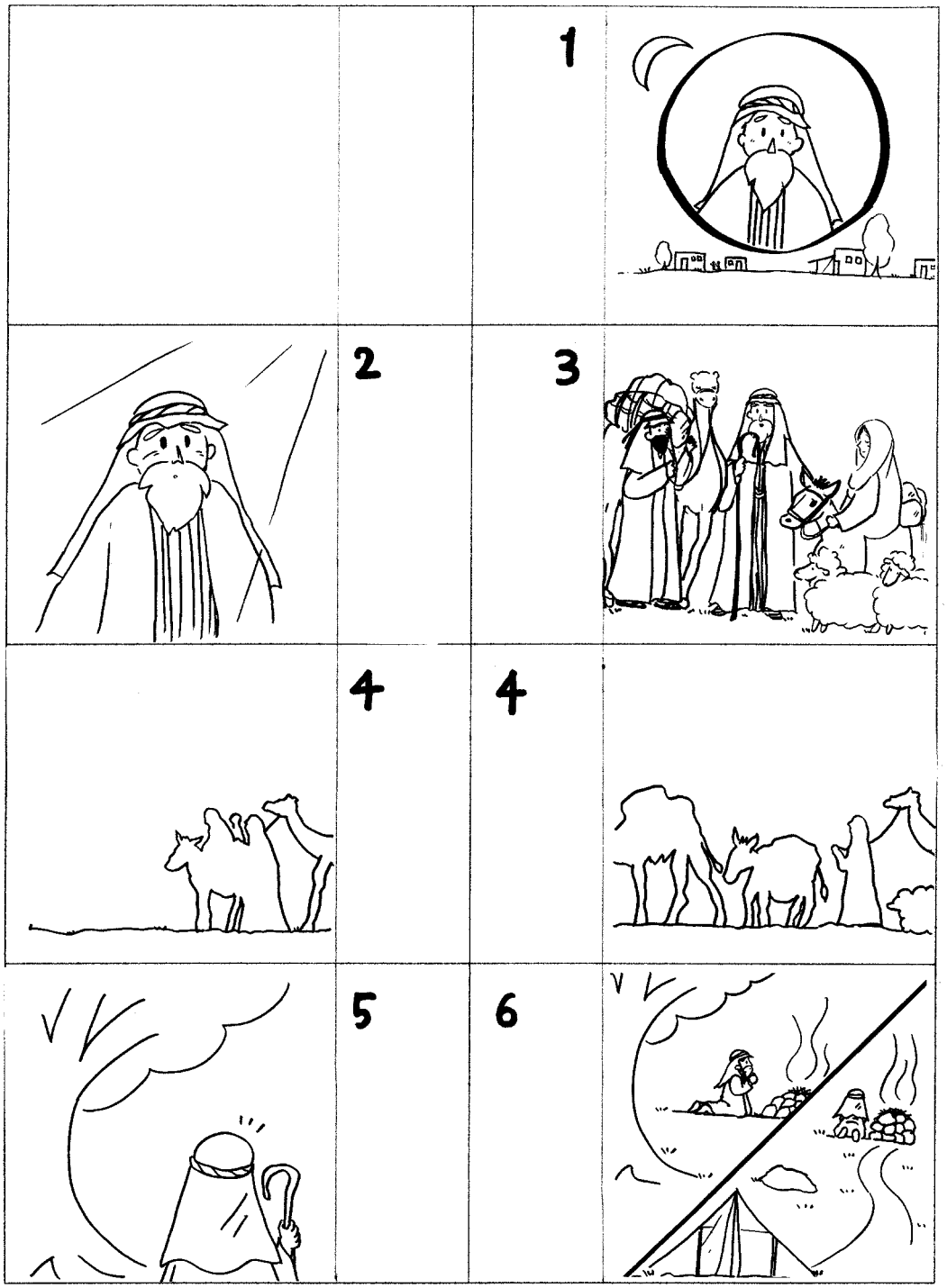


11/8

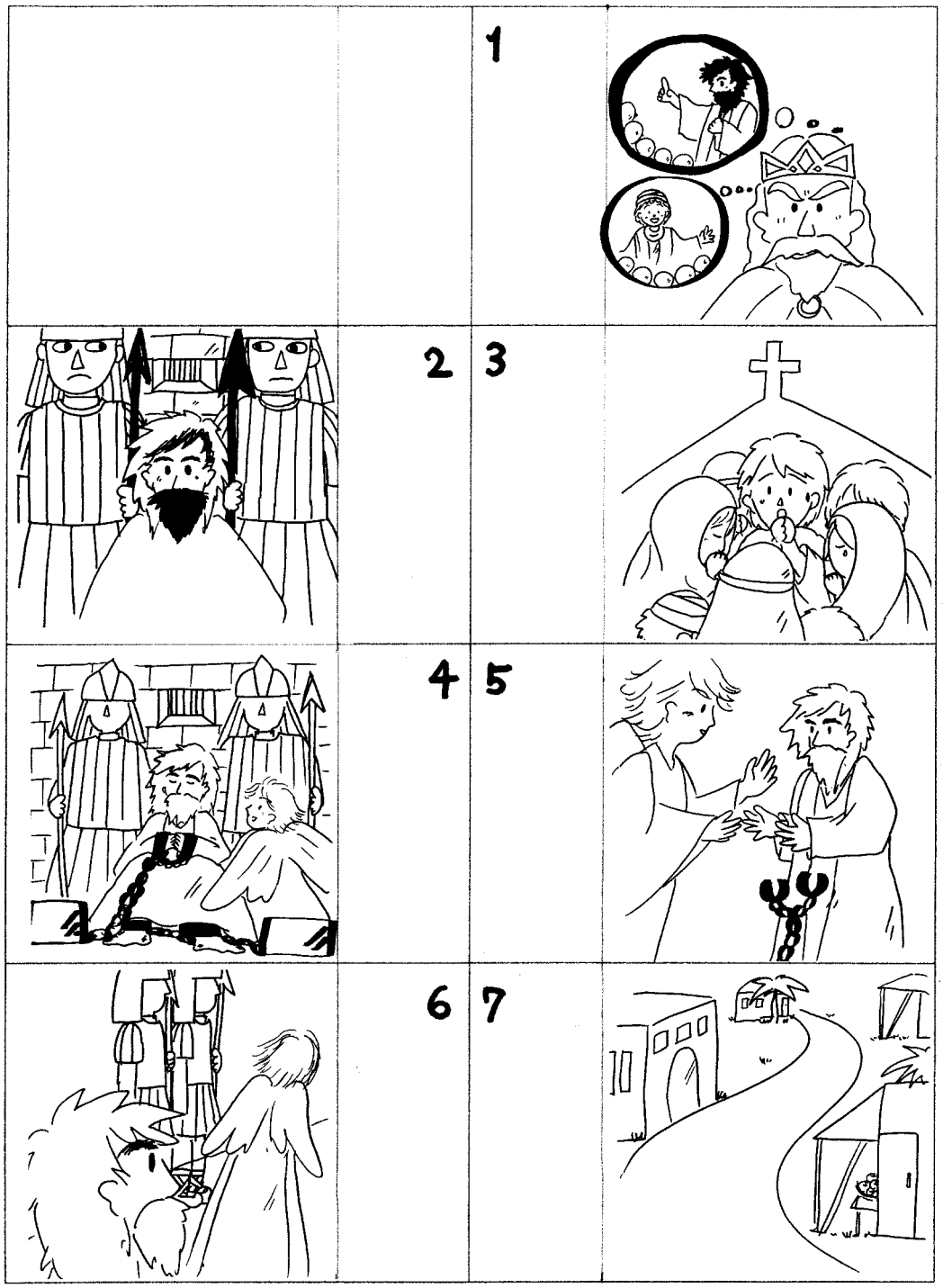


幼稚科視覚教材

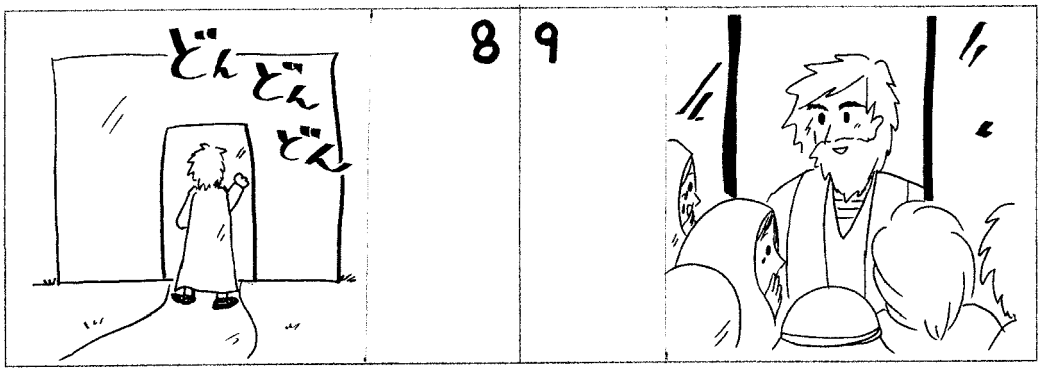
11/15



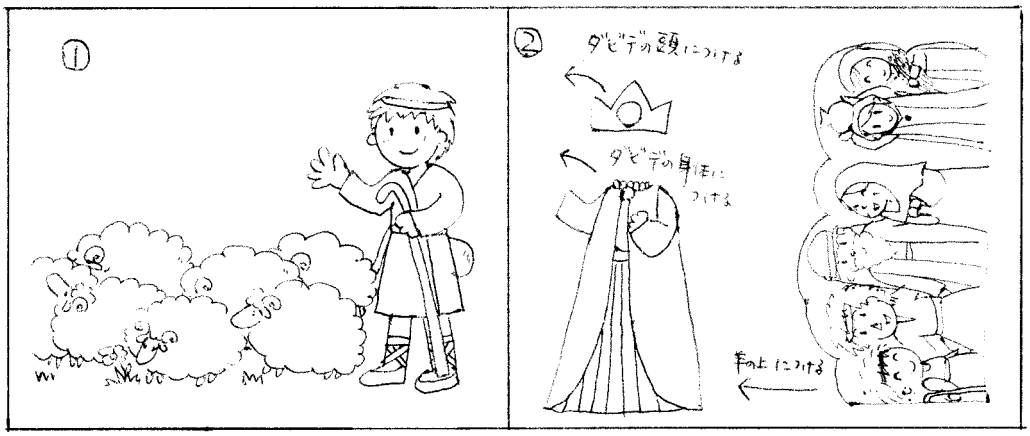
11/22



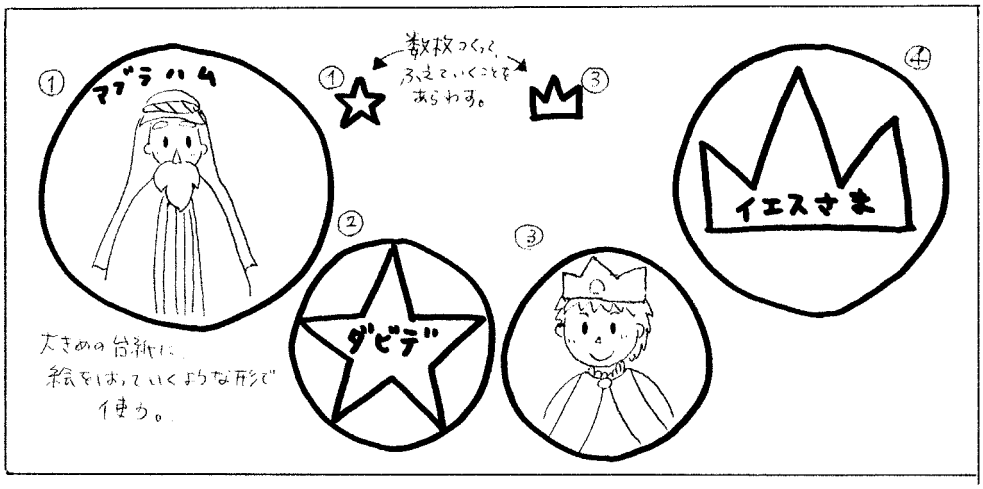
11/22（続き）



11/29



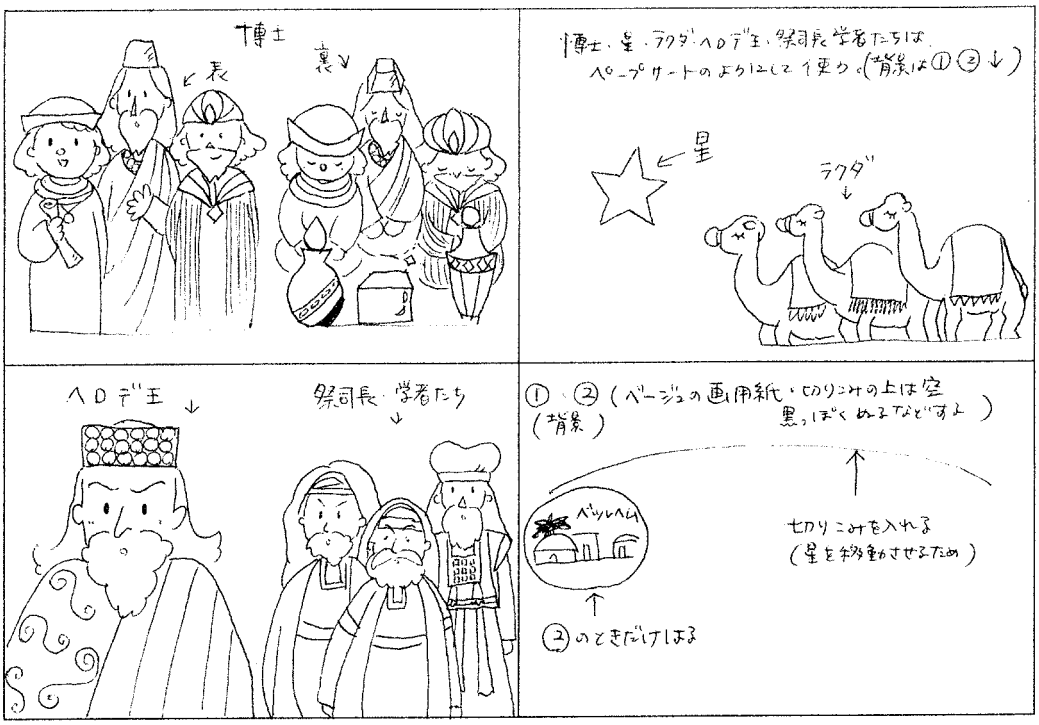
12/6



12/13

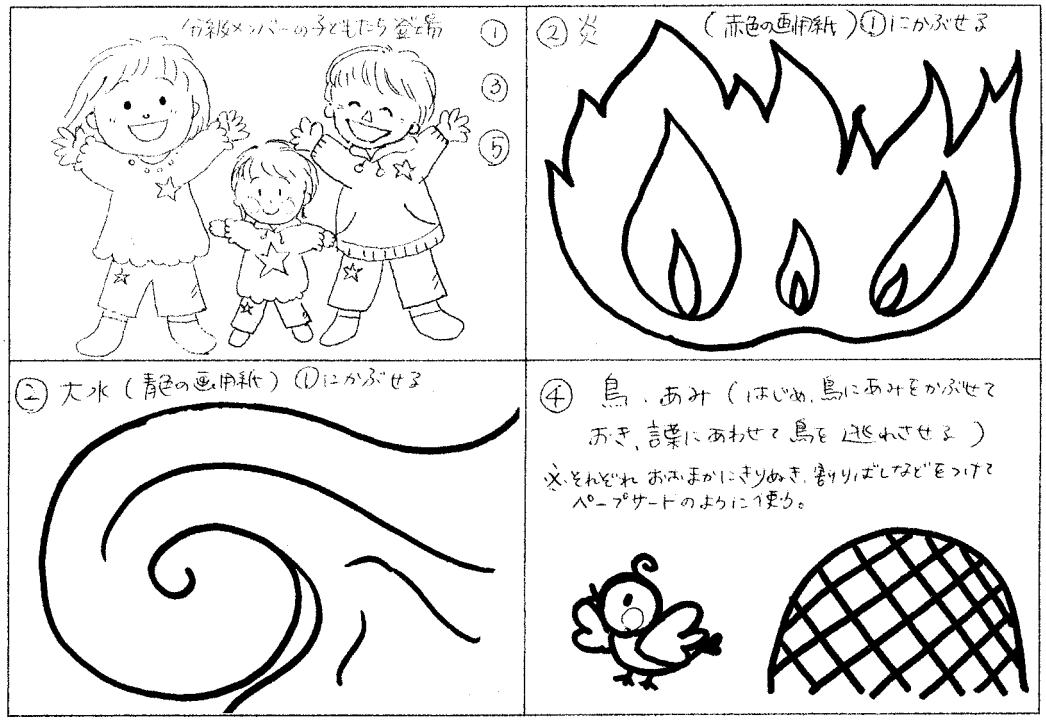
幼稚科視覚教材

12/20



幼稚科視覚教材

12/29



2010年１～３月カリキュラム（第36号）

―『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年―

月　日 教会暦・行事	主　　題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
1月3日 新年	新しい一年	―	―
		詩編23編	詩編23:1
	羊飼いである主なる神が共にいてくださることを信じて歩み始めよう		
10日	祈りのお手本	問77	ウ小99、ハイデ118－119
		ルカ11:1－4	ルカ11:1（部分）
	イエスさまの祈り「主の祈り」によって、祈ることを身につけよう		
17日	天の父よ	問78	ウ小100、ハイデ120－121
		マタイ6:9－13	マタイ6:9（部分）
	神の子とされた感謝と喜びをもって、父の御名を呼ぼう		
24日	御名を あがめさせたまえ	問79	ウ小101、ハイデ122
		マタイ6:9－13	マタイ6:9（部分）
	祈りとは神を神としてあがめることである。御名をほめたたえて祈ろう		
31日	御国を 来たらせたまえ	問80	ウ小102、ハイデ123
		マタイ6:9－13	マタイ6:10（部分）
	祈りとは御国の完成を待ち望んで生きることである。再臨を求めて祈ろう		
2月7日 （信教の自由）	御心の 天になるごとく	問81	ウ小103、ハイデ124
		マタイ6:9－13	ルカ1:38（部分）
	祈りとは神の御心にわたしたちの心を重ねることである。御心を求めて祈ろう		
14日	日用の糧を 与えたまえ	問82	ウ小104、ハイデ125
		マタイ6:9－13	ヤコブ1:17（前半）
	主がわたしたちの必要をご存じである。必要のすべてを求めて祈ろう		
21日 レント	我らの罪を 赦したまえ	問83	ウ小105、ハイデ126
		マタイ6:9－13	マタイ6:12
	主が罪を背負って十字架につけられた。罪の赦しに生きることを求めて祈ろう		
28日 レント	悪より 救い出したまえ	問84	ウ小106、ハイデ127
		マタイ6:9－13	マタイ6:13
	主が罪と悪に勝利しておられる。誘惑に打ち勝つことを求めて祈ろう		
3月7日 レント	頌　栄	問85	ウ小107、ハイデ128
		ヨハネ黙示録5:11－14	ヨハネ黙示録5:13
	祈りは神をほめたたえて閉じられる。神に栄光を帰して祈ろう		
14日 レント	アーメン	問85	ウ小107、ハイデ129
		コリントニ1:15－22	ヘブライ11:1
	祈りはキリストの真実に支えられている。心から「アーメン」と言おう		
21日 レント	ゲツセマネの祈り	―	―
		マタイ26:36－46	マタイ26:39（後半）
	主は祈りにおいてすでに苦しみを背負われた。主の御苦しみに目を留めよう		
28日 受難週	キリストの受難	―	―
		マタイ27:32－44	ヨハネ3:16
	十字架から降りない救い主。十字架につけられたキリストを仰ごう		

2010年度 年間カリキュラム

（2010年4月～2011年3月）

二年サイクル聖書物語の第一年

	月　日	教会暦・行事	主　題（仮題）
2010年 第37号	４月４日	進級式・復活祭	復活のキリスト
	４月11日		創造主なる神
	４月18日		被造物の祝福、環境（土地・生物）
	４月25日		神の栄光の舞台、歴史の主
	５月２日		人間の創造、人生の目的と文化命令
	５月９日	母の日	人間の創造、男と女の創造
	５月16日		罪と堕落
	５月23日	聖霊降臨祭	聖霊の降臨と教会
	５月30日		救いの約束（原福音）
	６月６日		カインとアベル
	６月13日	花の日	ノアの箱舟
	６月20日	父の日	ノアの契約
	６月27日		バベルの塔
第38号	７月４日		アブラハムの召命
	７月11日		割礼
	７月18日		ソドムの滅亡
	７月25日		イサクの誕生
	８月１日		イサクを献げる
	８月８日		エサウとヤコブ
	８月15日	（平和）	平和の主
	８月22日		売られたヨセフ
	８月29日		エジプトのヨセフ
	９月５日		総理大臣ヨセフ、摂理の主の勝利
	９月12日		モーセの誕生
	９月19日	（20敬老の日）	モーセの召命
	９月26日		十の災いと過ぎ越し

年・号	月　日	教会暦・行事	主　題（仮題）
第39号	10月３日		葦の海を渡る
	10月10日		天からのパン
	10月17日		十戒を授かる
	10月24日		金の子牛の事件
	10月31日	宗教改革記念日	幕屋の建設
	11月７日		約束の地の偵察
	11月14日		ヨルダン川を渡る
	11月21日		約束の地カナン
	11月28日	アドベント	待降・アブラハムの子
	12月５日	アドベント	待降・ダビデの子
	12月12日	アドベント	待降・バビロン捕囚
	12月19日	クリスマス	降誕・主イエスの降誕
	12月26日	年末	東方の学者たち
2011年 第40号	１月２日	新年	洗礼者ヨハネと主イエスの受洗
	１月９日		荒れ野の主イエス
	１月16日		ガリラヤ伝道
	１月23日		八福の教え
	１月30日		地の塩・世の光
	２月６日	（11信教の自由）	律法の完成者キリスト
	２月13日		完全な人イエス
	２月20日		天に富を積む
	２月27日		神の国と神の義
	３月６日	（9– レント）	黄金律
	３月13日	レント	権威ある者の教え
	３月20日	レント	病人をいやし預言を成就するメシア
	３月27日	レント	嵐をしずめる権威を持つメシア

〈執筆者よりひとこと〉

●三歳の女の子の分級を想定して、準備しました。幼子たちの心に、主の喜びが響きますように。感謝して。(草野容子)

●工作やゲームなどの工夫を盛り込むこともできず、本当につたない展開例になってしまって申し訳ありません。子どもたちの祈りの成長のために、少しでも用いられれば幸いです。(坂井孝宏)

●子どもたちが日々さらに主に近く歩むよう、お祈りしながら教案を用いていただけたら幸いです。(吉田通志子)

●今年も多くの子どもたちが夏のキャンプに参加し、喜びを携えて帰って行きました。真の信仰の成長は、この子どもたちが各教会で御言葉の養いと交わりにあり続けることだと思います。各教会の歩みが祝福されますように。(辻　幸宏)

●10月～12月の教案誌を編集、発行し、この一年も終わりが近づいていることを感じさせられます。一年の締めくくりの時期、クリスマスもあります。主の祝福を祈り求め、忠実に歩んで参りましょう。(望月　信)

〈あとがき〉

●日本基督教団の関川泰寛先生より、原稿をお寄せいただきました。教団の全国連合長老会（及びそこに属する群れ）とわたしたち日本キリスト改革派教会とは、公的な交わりはありません。けれども、日本の地に改革・長老主義の教会を建て上げる志を共有する同志である、と考えます。教団の中でそのことに取り組むとは、場合によっては、一つの教派を形成するということ以上の困難があるでしょう。その取り組みからわたしたちが学ぶことも多いはずです。互いに励まし合って、おのおのに与えられた場で、福音宣教と教会形成に取り組みたいと願います。

●毎号、多くの執筆者の方々のご協力をいただき、感謝しています。とりわけ分級展開例執筆者の労苦は並大抵のものではありません。ぜひ執筆のためにお祈りください。また、皆でこの取り組みを分かち合って、共に主に仕えたいと願っています。分級展開例のためにご協力いただける方がありましたら、ぜひ編集部までお申し出ください。お待ちしています。

〈購読の申し込み〉

●『教会学校教案誌』をぜひご購読ください。また、別冊『子どもカテキズム』(300円）をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第28号までは一部500円で販売しています（品切れの号もあり)。

●申し込みの受け付けと送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。副読本『主は羊飼い』のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所　辻幸宏まで
〒503-0996 大垣市島町283
Tel/Fax. 0584-91-3538

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

まえがき
　望月　信（高蔵寺教会牧師）
牧師の声
　金田幸男（甲子園教会牧師）
教会学校・日曜学校訪問
　高蔵寺教会教会学校教師会
諸教派の教会教育事情
　関川泰寛（日本基督教団全国連合長老会出版委員会）
聖書研究
　後藤公子（前インドネシア派遣女性宣教師）
　木下裕也（名古屋教会牧師）
　藤井真（堺みくに教会牧師）
　相馬伸郎（名古屋岩の上伝道所宣教教師）
　唐見敏徳（忠海教会牧師）
　牧野信成（神戸改革派神学校教授）
　長谷川潤（四日市教会牧師）
　山下朋彦（平和の君伝道所宣教教師）
カテキズム研究
　大西良嗣（滋賀摂理伝道所宣教教師）
　木下裕也（名古屋教会牧師）
　坂井孝宏（熊本伝道所宣教教師）
　吉岡契典（仙台カナン教会牧師）
説教展開例
　長谷川潤（四日市教会牧師）
　木下裕也（名古屋教会牧師）
　望月　信（高蔵寺教会牧師）
　相馬伸郎（名古屋岩の上伝道所宣教教師）
　辻　幸宏（大垣伝道所協力牧師）
　二宮創（中部中会巡回教師）
分級展開例
　幼稚科
　　草野容子（恵那教会教会学校教師）
　小学科下級
　　坂井孝宏（熊本伝道所宣教教師）
　小学科上級
　　11月15・22日　相馬伸郎（名古屋岩の上伝道所宣教教師）
　　12月13・27日　望月　信（高蔵寺教会牧師）
　　上記以外　関口　康（松戸小金原教会牧師）
　中学科
　　吉田通志子（仙台教会日曜学校教師）
イラスト作画
　表紙　松田裕子（秩父教会）
　本文　岡野美佳（青葉台教会）

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎（長）	名古屋岩の上伝道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻　幸宏	大垣伝道所協力牧師
長谷川潤	四日市教会牧師
望月　信	高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会『教会学校教案誌』
2009年10・11・12月号（季刊）
第35号
2009年8月30日発行

発行　日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所　日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部
名古屋岩の上伝道所　宣教教師 相馬伸郎
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座　00890-2-148183「伊藤治郎」
編集・印刷　株式会社あるむ
頒価　900円（本体価格）